
焰の邂逅 01.能力者達の交わる夜

有華 桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焰の邂逅 01・能力者達の交わる夜

【NZコード】

N6336D

【作者名】

有華 桜

【あらすじ】

男子禁制のとある学園 棘薔薇学園に通う一人の少女、紅条焰
（ひじょうとうめ）
彼女を取り巻く友人、先輩、そして『敵』。『超能力者』と呼ばれる、ある特殊なチカラを手に入れた人間達と出会いながら、焰は自分自身の『失ったモノ』を探して行く。現代系・超能力バトル小説、『焰の邂逅』！少女達の活躍する戦いに活田せよ！

第一章／能力者達の交わる夜（上）

深夜、とある街外れの廃工場 人工的な明かりはなく、ただ夜空に浮かぶ月の光が建物の中を照らしている そんな広い空間の中、二つの人影が揺れ動く。

僕こと紅条焰は、死と隣り合わせの境地と呼ぶべき状況にいた。現状を簡単に説明すると、とある殺人鬼を相手に互いの命を奪い合っている。

「冗談じゃない。なんだよあれ、規格外にもほどがある……！」

咳きながらも、僕は駆ける速度を落とさない。

少しでもこの姿が相手の視覚に收まり続けてしまえばゲームオーバーだなんて、まったくもつて馬鹿馬鹿しい状況だ。

けれど、これは能力者同士の殺し合い。

正真正銘、互いの命を賭けた 一対一での殺し合いだ。

（状況は相手が確実に有利。僕は相手に接触しないといけないし、どうやって近付くか）

僕の持つ超能力・物体発火は、直に触れなければ対象を燃やすことは出来ない。

だが、そんな僕とは違い、敵の持つ能力は極めて厄介だ。

僕が対象に触れなければ能力を発動できない事に対し 敵の持つ能力は、その視覚で一定時間、対象を認識する事で発動する。

ようは、敵に見つかってしまったら、その視野から一定時間中に姿を隠す事が出来なければアウト その瞬間、僕の敗北が確定する。

この廃工場はとてもなく広く、さらに廃棄されたゴミや鉄筋、壊れた車の残骸などが山のように置かれており、敵にはそう簡単に見つかる事はない はずなのだが、

（……問題は、音だ）

いくら広いと言えど、この空間は密閉されていた。

建物の外を車や人が通つて いる訳でもないし、この周辺は静まり返つて いる。そんな場所で物音を立てれば、まず僕の居場所が敵に特定されてしまふ。

その為、本当は走る事でさえ避けたいが 状況は、すでに切迫していた。

「逃げ回る事しかできねーみてーだな、オイ！ その程度でオレに勝てるとでも思つたのかよ！」

僕の背後を逃さぬまま、敵である能力者が叫んだ。

互いの距離はそこまで遠くないが、両者の間に ある遮蔽物に守られ、僕はなんとか逃げ続けて いるような状態だつた。

確かに相手の言つ通り、このままで防戦一方だ。

こちらから手を出す方法が分からぬ以上、いずれ敵に捕まってしまう。それだけはなんとしても避けなければならない。

本音を言えば、この状況下で勝ち目を見出 すのは至難の業である。相手が素人ならばともかく、敵はプロだ。こうした戦闘行動得意とするエキスパートである。

幸いと言つべきか、互いの身体能力にそこまでの差はない こ うして逃げ続けるだけならばなんとかなる。

しかし、それまでだ。

なんとかしてこの状況を打破する策を考えなければ、僕に勝機はやつてこないだろう。

（長期戦になる……いや、それじゃ駄目だ。僕と敵の条件を比べれば、戦いが長引けば長引くほど僕が不利になつていいくだけに決まつてゐる。考えろ、何があるはずだ　）

僕は思考を最大限に回転させながら、障害物の間をすり抜けるようになり、^{また}跨ぎ、飛び越えていく。

（少なくとも敵は三秒間での能力発動は不可能 けれど、三秒で相手の懷に飛び込んで、なおかつこの手で触れられるのかと言えば……無理、か。たつたの三秒じや、取れる行動の選択肢が少なすぎ る。何らかの手段で敵の動きを封じる、あるいは不意打ち こそ、

どれも不安定だ。確実に成功させられるとは思えない（）

半壊したトラックの残骸に隠れながら、僕は敵の動きを待ちつ

思考を巡らせる　だが、いくら考へても最善策が思い付かない。

全ては一瞬、たつた一度のチャンスにかかっている。

その機を逃してしまえば、全てはそれまで　これは、そういう

戦いだ。

「あーいい加減つまらねー、飽きてきた。鬼ごっこはイイんだが、どうにも一方的過ぎて困る。これじゃあ単なるレイプショードぜ。それに、テメエもそろそろ限界なんじやねーのか？」

ガゴン！　と、背後で大きな物音がした。

「ま、テメエがそつやつて逃げ続けられるのも　」

振り返つてみれば、背中を預けていたはずの軽トラックの残骸がまるで、プレス機に押し潰されたかのようにへしゃげてい

た。

「オレが今まで手加減していたからなんだが、な？」

敵の姿が、見えた。

戦いを始めてようやく、僕は初めて対峙している相手の姿を直視してしまった。

黒く短い髪はワックスか何かでボサボサに仕上げられており、耳元には鋭い針のようなものがぶらさがったシルバーのピアスがそれぞれ左右にひとつずつ。

上半身はこの蒸暑い時期にぴったりの涼しそうな黒のタンクトップ、首元には髑髏のような形をしたネットレス。

股近く、ギリギリの部分まで短くした紺色のパンツに、腰部に巻かれた太いチーノがじやらじらと音を鳴らしている。

そいつは鋭い鷹のような眼光で僕を睨むと、唐突に後ろを向いた。「ま、落ち着けよ。とりあえずホラ、こうして後ろを向いておいでやる。ああ、テメエが少しでも襲い掛かってくるような気配を感じたら、反撃は覚悟して貰うが……まあいい、本題だ。テメエ、どうしてオレの能力を知っている？

「それは、答えなければ振り返る、と解釈していいの？」

「別に。答えたくなーんなら、特に答える必要はねーけどよ。普通、気になるだろ。テメエとオレは間違いなく初対面だって言つのに、テメエはオレの視覚から逃れる事を第一に動いていやがつた。オレが能力を使うよりも前からだ。初対面にしては、オレの能力について知り過ぎてるとは思わねーか？」

敵の言葉に耳を傾けるべきではなく、それに答えるべきでもない普通ならそれが正しいはずだ。

今すぐこの場から逃げ出せば、今この状況を元に戻す事は出来るだろう。

だが、それでは意味がない 結局、あの不毛な鬼ごっこを繰り返す事になつてしまふからだ。

だからこそ 僕は今、このチャンスを生かすしかない。

「そうだね。君の能力は、視覚で対象を一定時間認識する事で発動するもの 僕はそう聞いてる」

「聞いてる、か。ようするに、テメエには後ろ盾がいるつてわけだ。それも、オレの能力を知つて生きていられる程度の 能力者……か？」

「さあ、ね。僕はただ頼まれただけだから」

「頼まれた……だと？」

「そ。もつとも、まさかこんなに強い相手だとは思つてもいなかつたから、今となつては逃げ出したい気分でいっぱいなんだけね」「へえ、口先だけは随分と余裕じやねーか。ま、大体事情は分かつたが……正直、今あんまり乗り気じやねーんだよ、オレ。テメエが来る前に少し他のヤツと殺り合つて疲れてるしよ。それに、テメエもそろそろ限界なはずだ。だから、さっさと」

会話タイム終了 第一試合スタート、つてところか。

僕はいつでも相手の視野から逃れられるよう、隠れる為の場所をいくつか横目で確認しておきながら、

「帰れよ。見逃してやる」

まつたく、想像もしていなかつた言葉を耳にした。

「は……？ それってどういう

」

「聴こえなかつたのか？ 帰れ、つってんだよ。テメエみたいにハナつから殺意のない奴を相手にするのはオレの性に合わねーんだ。オレが殺しの対象にすんのは、あくまでこのオレを殺害対象として意識している奴だけなんでな。テメエ、頼まれて仕方なくやつてるだつて？ 殺^やる気がない、逃げ出したいと思うならさつさとそういやがれ。そういうの、いい加減日障りなんだよ」

両腕を組み、後ろを向いたまま その殺人鬼は、心底鬱陶しそうな口調でそう言った。

「……驚いた。てっきり見境なく人を殺すのが好きな人なんだと思つてたよ」

「ああ？ テメエ、舐めてんのか。どこのどいつに頼まれたのかは知らねーが、どうやらそいつにありもしねー事を吹き込まれたようだぜ。確かにオレは殺し合ひはやってて好きだし楽しいが、別に殺す事 자체が好きなわけじやない。純粹に、命のやり取りつて奴を楽しんでるだけだ。相手がオレを本気で殺しに来る、オレが本気で相手を殺すつもりで立ち向かう それが最高なんだよ。勝手に人の趣向を捻じ曲げてんじゃねー」

それはそれでどうかと思うのだが、言われてみれば聞いていた情報とは齟齬^{ちぐ}がある。

確かに、この僕が殺人鬼に個人的な殺意を持つてはいるわけではないし 頼まれてさえいなければ、出来ることならこんな事はしない。

頼まれた事を勝手に放棄して逃げ出すというのも悪い気はするが、何より互いに興が冷めてしまった。

相手の言葉を聞く限り、ここは素直に立ち去るのが一番の選択肢だろう。

「……うん。分かつたよ殺人鬼さん、ここはひとつ引き下がるう。確かに、僕個人が君に殺意を抱いているわけじゃない。それに本来こういうのは不得手だし、何より不本意なんだ。こっちからちょっかいをかけておいて悪いとは思つけど、この場はお言葉に甘えさせて貰う」

「ハイハイ、面倒くせーからさつさと失せる。……ああ、ひとつだけ言つておくが、オレを呼ぶなら殺人鬼ってのは間違いだ。訂正しやがれ」

「ん、名前で呼べつて事？ 実は僕、依頼主から名前までは聞いてないんだけど」

「違えよ、バカ。殺人鬼つーのは、イメージ的にレイプ魔みてーな感じだろ。そんなんじゃなくて、オレは殺り合うのが好きでな。一方的にいたぶるのは性に合わねー。だから、殺人鬼つー呼ばれ方はあんまし好きじやねーんだよ。呼ぶなら、そうだな……戦闘狂、つてのはどうだ？」

戦闘狂 なるほど、一応、自分でも狂つているつて自覚はあるらしい。

しかし今更、この僕に呼び方を訂正させるだなんて、何か意味があるのだろうか。

「それじゃあ……、戦闘狂さん。僕はこのまま退散しちゃうんだけど、本当に見逃してくれるんだね？」

「ああ……そうだな、そんじゃ逃がす代わりにテメエの依頼主に伝えとけ。何のつもりでオレを狙つてんのかは知らねーが オレを殺したいなら本気で殺しに来い、つてな」

あの殺人鬼 改め、戦闘狂との戦いから次の日。

僕 紅条焰は、とある学園の裏庭に呼び出され、一人の女子生徒と会合していた。

「それで意気投合した末、背を向けて退散したと言つわけですか？」「別に意気投合したつてわけでもないんだけど……まあ、そんなと

ころ」

戦闘狂の殺害を僕に依頼した張本人であり、僕にとって一年上の先輩 三年生の百瀬百合花、それが彼女の名前だ。

長い黒髪をふたつに分けた三つ編みで整え、恐らくは美人だろう

それを台無しにするかのような、センスのない大きな丸眼鏡。服装は、全生徒共通である学園公式のセーラー服 だが、彼女のはスカートが他と比べて少し長い気がする。

色々な意味で、凄くもつたない人だ というのが、僕が初めて彼女と出会った時に得た第一印象である。

「そうですか。よろしい、結構ですわ」

「え、はいそうですかって許しちゃうんですか！」

「もう過ぎた事ではありませんか。今更ぐだぐだと責任を追及したところで、何かが変わるわけでもありませんでしょう？ それとも、わたくしが焰さんを叱れば、あの殺人鬼が死んで下さるのかしら？」

「……そうですね、ごもつともで」

僕は昨日あつた出来事 あの戦闘狂と対峙した時の事を、洩らす事なく報告していた。

依頼されていたからには、それなりに責任感というものが僕にもあつたのだが こんな返しをされるとは。

「はい。さて、一応あなたが得た情報は聞いておきましそう。会話をしたつていう事は、相手の姿もちゃんと見たのですわよね？」

「見たけど、それが？」

実際は暗がりで纖細には見えなかつたけれど、特徴やら服装をこの眼に焼き付けているのは事実だ。

「ええ、一応これだけは確認しておきたくて。その殺人鬼、性別はどちらでしたか？」

「……え？」

「ですから、その殺人鬼の性別を聞いているのですわ。わたくし、

一度だけ対峙した事があるのですが、相手の姿や声は正確に確認できませんでしたから。それはもう、逃げるのに必死で。ですから気になっていたのです。わたくしが得ている情報は、あくまで名前とその能力について だけでしたから

名前。

あの戦闘狂の名前、そういうえば聞いていないけど 知っているのだろうか。

「そうだね。それじゃあ、そいつの名前を教えてくれるなら、答えてもいいよ」

「……この期に及んで、別の取り引きをしようとも？」

今まで見た事がないくらい、鋭い眼光で僕を睨みつける百瀬百合花。

「じょ、冗談だって。取り引きとかそんなつもりはまったくないから。つていうか、別に名前くらい教えてくれたつていーんじゃ

「まあ、それもそうですわね。殺人鬼の名前は久峰零次と言います。永久の久に、峰不二子の峰。数字の零ゼロに、次。ですわ」

「……何かひとつへんというかマニアなの混じってなかつた?」「

「氣のせいですね」

「まあ、いいけど。久峰零次、か

「それで?」

「ああ、うん。女性だつたよ」

「そうでしたか。なるほど……、そういう事ですの」

「とは言つても、実際少し見ただけなんで何とも言えないよ。まあ胸元が結構膨らんでいたのと、顔付きや声色からそう判断しただけで」

「いえ、十分ですね。ありがとうございます」

「そうですか。で、これから僕はどうすれば? その久峰さんは何だか僕みたいなのじゃ相手にならないらしいけど。……というか、正直僕だけじゃ彼女に勝てるとは思えないな。何度も能力を食らいそうになつたけど なんのさ、あれは?」

正確には一回。

どれも僕自身が受けてはいないが、相手が能力行使すると、僕の近くの物がひとりでに動いたり、宙に浮いたり　拳句の果てにペしやんこである。

僕のものとはまったく違う種類の能力　その正体が、いまいち掴めない。

「対象に触れないであれだけの芸当が出来るんだ。お手上げだよ、敵わないうてあんなの」

触れる事なく対象に物理的な力行使する事が出来る能力、僕はそう見ている。

物を動かし、潰す　あんな力が人間に向けられたら一体どうなるのか、想像もしたくない。

「確かに、殺人鬼は『殺したいなら本氣で殺しに来い』と言つたのですわよね？」

「うん。本氣で、つていうのは多分、殺すつて言つ明確な意思を持つていらないといけないんだと思う。僕は正直、久峰零次に対して個人的な殺意があるわけじゃないから」

「そうですか。……ですが、それは本当なのかしら？　わたくしが対峙した時、わたくしはまったく殺意の欠片もありませんでしたけれど。別に個人的な恨みがあるわけでもありませんし」

「はい？　それじゃ、どうして僕にこんな依頼を？」

「ええ、あくまでその時は　ですから。一度受けた屈辱は、倍にして返してあげなければ気が済みませんもの」

ようするに一度襲われたからやり返してやる、つていうだけの理由なのか。

なんだかこの人、見かけは大人ぶつてるけど　中身は結構、子供なのかも知れない。

「しかし、気が変わりました。女性だと言つのでしたら良いでしょう。それならば、殺してしまう必要もありません」

「必要がない……それは、女だからってだけで？」

「ええ。わたくしは何も一人で行動しているわけではありません。

それはあなたをこうして使つていてる事からも明白だとは思いますが

…… 実際、他に数人の仲間がいますわ。それも全員が能力者であり

」

「まさか、全員が女だと？」

「その通りですわ」

……、なるほど。

つまり、能力者でありながら同性の仲間をかき集めているってわけか。

どうして同性でなければいけないのかは　この際、置いておこう。

「焰さん」

「は、はい？　なんでしょう」

「一度、前に申し上げているとは思いますが」

「はあ」

「わたくし、あなたの事を愛していますわ」

「それは……、どうも」

「正直、あなた以上の人間はこの世にいないと断言できますもの。それぐらい、わたくしはあなたを溺愛しているのですわ。それは、分かつていただけますかしら？」

そう、以前　この百瀬百合花と初めて会った時、僕はいきなり衝撃的な愛の告白を受けていた。

実際彼女と会うのはそれが初めての事で、僕はまったく名前すら知らない相手だったから　というか、それ以前の問題でもあるけれど　返事は断らせて貰つたのだが、それからといつもの、凄い勢いで付きまとわれている気がする。

それに今更こうして再確認されても、僕としては返答に困るとしか言いようがない。

「ですから、そんなわたくしが危険にさらされようとしていれば、もちろん助けて下さいますわよね？」

「理屈が理解できないけど、まあ……善処します」

「ええ、それでいいのです。それでは今晚、少し付き合つていただけますかしら?」

「今晚……と、こ'うと?」

「あら。別にえつちな方面のお話ではありますんわよ?」

「前振りからしてそつちに結び付けられるほど性欲に飢えてないんで大丈夫です」

「そうですか。残念ですわ」

「どこまで本気なんだ、この人。」

「では、そろそろ本題に入りますわ。今晚、その女に会います」

「会う……つて、まさか」

「いいえ、戦うわけではありません。仲間に引き入れる為に会うのですわ」

僕 紅条焰の通つている学園は、他には見ない少し風変わりな女子高である。

棘薔薇女子園

設立者のセンスを疑いたくなるような名前を持つたその場所には、無駄に広大な敷地 その左半分に校舎、右半分に生徒専用の宿舎があり、正門からまっすぐ伸びた中央にある巨大な噴水が、綺麗に輝く水しぶきを上げている それが、言つてみれば他の学園はないような、この学園だけの特徴と言えた。

一応なりとも女の身である僕としては、こういつた学園生活も慣れてしまえばとりわけ平凡であるべきだと思っているのだが どうも最近、おかしな先輩に付きまとわれるようになつてから、僕の日常はすっかり普通ではなくなつてしまつた。

ただ女子では体験する事の出来ないような事を、僕は繰り返し経験してしまつた。

それも、一度ならず 昨夜の事を含め、これで二度目である。

いい加減まともな生活に戻りたいとは思うのだが、ここまで来てしまつとそう簡単に戻れるとも思えなくなつてしまつ。

知らなかつた世界に足を踏み入れた代償。

普通である事を世間から拒絶された、一人の人間が行き着く結末

とでも言つのだらうか。

「つおーい、ほむりやんお待たせー！ 待つたかなー？」

唐突に背後から響く、甲高い少女の声。

聴き慣れたその声。 僕にとつてそれが誰のものかだなんて、振り返つてその姿を確認するまでもなく分かる。

「遅い。十分以上の遅刻だね、香奈。面倒だからすっぽかして先に寮へ帰るうかと思つていたところだよ」

渋谷香奈。

背中辺りまで伸びているであろう茶色の髪を、赤リボンでくくつたツインテールに仕上げている。

いつ見ても代わり映えのない、幼さの残つた可愛らしい顔付き。 顔だけではなく、その身体も同年代にしては小さめであり、僕と並ぶとその背の低さが分かる。

学園指定の制服も、僕のサイズはMなのだが　彼女のものはSサイズである。

いつもは馬鹿みたいに人懐っこい小動物的なイメージがあるのだが、その実、中身はどんなくえげつない　主に、学力的な意味で。

彼女と僕の間柄を簡潔に説明するならば、僕にとつてのたつた一人の理解者、とでも言つべきだらうか。

「あつは、『めんよー。お詫びにちゅーしてあげるから、許してください？』

香奈はいつもの場所

噴水の左隣に設置されている木製のベンチ前まで駆け寄つてくると、座つて待つていた僕に対し、これまたいつも通りのふざけた冗談（だと思う）を挨拶代わりにやつてきた。

中央広場の噴水場、それが僕と香奈の放課後の待ち合わせ場所で

ある。

基本的に、この学園は同学年の場合だと授業終了時刻は変わらず、学年ごとに変わるのだが、僕と香奈は同じ一年であり、お互い部活に入っているわけでもないので、こつもこつして待ち合わせと一緒に宿舎へと帰っている。

「へえ、それは良いね。ならこの広場のど真ん中、噴水の上に立つてお互いに向き合にながらの熱いキスシーンがじー要望ですよ、僕は」「うつわそっ、それじゃ皆に観られるよー！ ピーせならホラ、裏庭でこつそりとかそういうシチュエーションがあたし的には好みかなー？」

「こひらこひら、勘違いしちゃ駄目だよ。観られるからこそ良いんじゃないか。香奈はきっとマジだからや、やつちのまづが興奮すると思いうよ~」

「むむ……。オッケーいよいよ、おむづちゃん。せんべ、やつまへるわ！」

「やひないよ！ こんなのがどうかがり見たってからかってるだけだろ！ 香奈もそれぐらこ氣付こいつねー。」「だつてあたしマジだしー？」

「え、そこ肯定？ 適当に言つたのに当たつたの僕？ っていうかまがりなりにも僕達は女同士なんだから、そういうのは出来ません！」

「別にほむりやんならいいんじやね？」

「……それ、本氣で言つてるなら今日は僕一人で帰るよ」

「あひ、すいません焰サマ！ すいべー！ [冗談です] 許して下さいー」

何をそんなに必死になる必要があるのか、泣きそうになりながら僕にしがみついてくる渋谷香奈（十六歳）。

そういうのもこんな場所でやられつけつゝとまう、人間とかね？ 「はいはい、分かったから。遅刻してきたの怒つてるわけじゃないから。いつもみたいに一緒に帰つてあげるから

「

「うわあ、怒つてんじゃーん！ 許してよー、今日は大事な用事があつたのー」

「大事な用事？ え、なにそれ。もしかして……男絡み？」

「……ちょっと見てくださいーー皆わーん、まだあたし何も言つてないのにほむりやんの顔面がすんごい事になつてますよー」

「僕そんな顔してるかな？ 別に男の一人や一人くらいどうでもいいんだけど、そんなにおかしいかな？ あれ、でも香奈が学業関連で用事があるようにも見えないんだけどな？」

「うわーん、ないないないなーーいつ！ 男とかいましぇんからあ！ いつでもあたしはほむりやんしか見えてないからあ、好き好き大好きだからーー！」

「あ、いやあの……香奈、別にそこまで言わなくともいいよ……」

これなんて ハンビだよ。

そろそろ悪ふざけも自重しないと、拙い噂がこの広大な敷地内を一日足らずで駆け回つてしまふかも知れない。

僕と香奈の仲の良さは、自分で言うのも変だが、かなりの教師生徒に一部内容を大げさにして知れ渡つている事実だ それだけでも怪しまれていますのに、このままじゃ一気に僕の株が大暴落である。

いくら女子しかいない学園生活だからといって、性欲をもてあました一人の女生徒が同性愛に手を出しました なんてのは、話題性で言えば最高に盛り上がるだろうが、冗談としては僕にとって最悪な部類の噂だ。

絶対に、それだけは断固として阻止するべきである。

「とにかく落ち着こうよ、香奈。第一、こんな生活をしている僕らが男絡みで用事だなんて有り得ないよ。まだ部活の勧誘とか委員会の雑用とか掃除当番を押し付けられたとか教師の愚痴に長時間付き合つてたとか そっちの方が、現実味があるつてものだよ」「だよねえ、そうだよねえー？ 実は生徒会長の百瀬先輩にさー、委員会に薦められたのだよー」

「ぶツツツ…？」

「ほえ？ どうかした、ほむりやん？」

「い、いや……なんでも、ないよ……」

生徒会長の百瀬つて　あの何を考えているのか分からぬ、美人のくせに地味でメガネでもつたいたい上、同性愛者疑惑まである百瀬百合花ではないか。

（そういえば、彼女つて生徒会長だつたんだつけ……）

しかし、あの百瀬百合花が香奈を委員会に薦めるだなんて、一体どうこう事だらう。

学力や人脈が優秀な香奈を早めに手の内にしておきたい、とかそんな理由だらうか　人を使うのが巧いというか好きそうだからな、あの人。

「それで？ 薦められてそのままホイホイ付いてっちゃつたわけ、香奈は」

「そつ、そんな事はないよー。ほむりやんとのこいつした田課が崩れちゃうのが一番の苦痛なのです、香奈ちゃんは。一緒に帰つて一緒に晩ご飯食べて一緒にお風呂入つてまた明日つてしないと、あたしは死んじゃうのー」

「それはちょっと、いくらなんでもオーバーだよ……」

「そうかにゃ？ ま、そーゆーわけで誘いはお断りしましたー。さすがにすつぱり切つちゃうのもかわいそうだつたので、休み時間とか空いてる時間は手伝いとかするつて言つ話にはなつたんだけどねー」

「へえ、香奈にしちゃ珍しい。僕と同じで、香奈もそういうのつけて好きじゃないだろ？ 部活も入りたがらないしさ」

「ある意味、それがあたしにとつての譲歩でもあつたわけなのです。なんてつたつてあの先輩、色々すごかつたからわー。なんてゆーの、威圧感とか？」

「ま、分からなくもないけどね……。あの人の考へてる事なんて僕にはまるで理解出来ないし」

「あれれ、ほむりやん。もしかして百瀬先輩と面識あつたりするのかなー？」

まづい、うつかり言わなくとも良い事を口にしてしまった。

「あ、あー……うん。まあね、なんていうか……ちょっと、色々ありますて」

「ふむうー？ なんだか怪しいなー、怪しいぞー。色々って何が色々あつたのかなー、香奈ちゃん気になつてまいりましたよー？」
さつきの仕返しのつもりだろうか、今度は香奈が詰め寄るようになつかかってきた。

まさか正直に『先輩に愛の告白をされたやついました』なんてぶつちやけるわけにもいかないだらうし くそ、どうしたものか。

「うつわ、顔赤くなつてるよほむりやんつてば！ ま、まま、まさかこれはウワサの禁断の愛が生まれました的な展開の予感……？」

「えつ？ な……なつ、なんでそんな事わかるんだよー！」

「あれー、図星ー？ これはショックだよあたし、大分きたよ相当きつついよー？ まさかこの香奈ちゃんを置いてそんな事になつてたなんて……酷い、酷いよほむりやん！」

いつの間にか攻守逆転である。

おかしい、今日は調子が悪いのかも知れない。

「とりあえず落ち着け、香奈。まずは僕の話を」

「あら、こんな所で何をされていますのかしら。大事な用事つてもしかしてこの事ですの、渋谷さん？ それに奇遇ですかね、焰さん」
なんとか香奈に弁解をしようとしたその時、ふと左隣から声がした。

ナイスタイミングで いや、僕にとつては正直バツドタイミングだとしか言いようがないけれど やつてきた一人の女生徒、百瀬百合花がそこにいた。

噂をすればなんとやら、なんてのはただの迷信ではなかつたらしい。

「も、百瀬百合花……」

「なんですね、焰さん。いきなりフルネームで呼び捨てにしないで下さいな」

「せつ、先輩っ！ これはその、あのー」

「別に言い訳は結構ですわよ、渋谷さん。前々からあなた方が共に上下校を行っている事ぐらいは周知の事実ですし、こういう事も想定の範囲内ですわ。今更それを日撃されたからといって、まさかわたくしが知らないとでも思つていましたの？」

いきなり現れ、いきなり絡んできた百瀬百合花のターンが始まった。

「こちらの誘いを断られる事も予想済みです。大事な用件だとまで言つものですから、てっきり別件だらうとも考えましたが いえ、もういいでしょ。それよりも、今はこりうして偶然居合わせた幸運を祈るべきですね」

こうまで言われると本当に偶然なのか、狙つてこの場に居合わせたのではないかとまで疑えてくるが そこまで僕も詮索は出来ないし、する必要もない。

どちらかといえばこの機会を利用して、先程の話をひやむやにするチャンス それを利用すべきだろ。

「で、お話を元に戻しますけれど。あなた達、こんな広場のど真ん中で何をしてらしたのかしりっ？」

「ああ、それは」

「单刀直入に聽きます先輩。先輩は、ほむりやん……あ、いや、この紅糸焰さんの事をどう思つていますか？」

「ちょつ、ばか、香奈それは」

「なるほど……それは確かに率直な質問ですわね。つうん、こんな広い場所でこのような事を堂々と公言してしまつても良いものか少し悩みますが……。ええ、別にいいでしょ。これもまた運命です。ここで高らかにひとつ宣言してみるのもまた一興、ですわね」

僕の必死の抵抗も空しく、一人の少女 渋谷香奈と百瀬百合花は、まるで対立する龍虎のように向かい合つて、

「わたくし、先日、こちらの焰さんに愛の告白をしました」

胸に手を当てながら、百瀬百合花は誇らしげに高らかと宣言した。

(うわ、マジで言っちゃったよ……)

「……へーえ、そりなんですかー。あれ? まさか本当だつたとは思わなかつたかなー。ねえどいつ言つ事なのかにやー、ほむりやん?」

「え、いや別に僕はその」

「あら、『安心して下さい渋谷さん。その件でしたらわたくし、もとの見事に撃沈しましたので。それはもう、数秒とかからずに即答で』

「即答……? ほむりやん、それもどうかと思つよー? まさか相手が本気だと思わなかつたんじやないよねー?」

「だからあの、まず前提からしておかしいわけで」

「ですが、別に諦めたわけではありません。こう見えてわたくし、根はしつこい方ですから。わっぱりすつきり断られた後の今現在でも、この世に焰さん以上の人には居ないと、わたくし断言できますわ」「ほーう。だつてさー、ほむりやん。羨ましいなー、羨ましいよ。あたしはそんなほむりやんが羨ましくて仕方がないねー」

もう嫌だ、そろそろ本気で疲れてきた この一人に関しては、真剣に口走つているとしか思えないから余計に疲れてしまう。

「ま、いいや。悪ふざけはこの辺にしどこうー。それよりも、百瀬先輩。さつき、この世にほむりやん以上の人はない、とか言いましたよねー?」

ふと、急に真面目な声色になつた香奈が、正面に立ちすくむ百瀬百合花に対してそう言い放つた。

「ええ、確かに言いましたけれど。それが、なにか?」

「いえー、別にどうつて事じやないんですけどねー。他人の気持ちを詮索するなんてのは最低のする事だしー。でもね、これだけは聴かせておいて下さい先輩。それは紅糸焰の全てを知つた上で、本気で言つているんですか?」

「ふふ……なるほど。さすがは焰さんの唯一無二の親友、と言つた

ところですかしら。そうですね……その質問に対しては、あえて
答えない事にしましょう。あくまで、今は」

なんだろう、この空氣　さっきまでとは一転して、なんだか凄
く重苦しい　って言うか、もしかしてこれ僕が原因ですか？
「ま、まあ一人とも。とりあえず僕はね、今はそういうの無しだか
ら。うん、そんなわけでそろそろ宿舎に戻　」

「あー、なるなる。なんとなく解りましたよ先輩。あの時にこのあ
たしを勧誘したのは、そういう意味があつたからなんですかー？」

「あら、別にそんなつもりはありませんわ。ただ本当に、あなたの
手を借りたいと純粹に思つただけの事ですから。それにわたくし、
そこまで姑息な手段を取るような人間ではありません」

まつたく聞いてないよ、この二人。

香奈、百瀬先輩の両名をなんとか宥めて宿舎へと帰宅してきた僕
は、宿舎内にある食堂で夕食を済ませ、そのまま一人と別れて自分
の部屋へと向かっていた。

この宿舎は部屋のひとつひとつが狭い代わりに、生徒一人につき
一つの部屋を与えられる　とは言つても食堂の他にも大浴場や大
広間など、生徒達は基本的にそういうたスペースでくつろいでいる
事が多く、言つてしまえば自分の部屋なんてものは私物を管理する
倉庫であり、後は一人で勉強するかテレビ見るか寝るか、それだけ
の為にある場所と言つても過言ではない。

コンクリートで出来た棘薔薇文学園の校舎とは打つて変わり、こ
の生徒用宿舎はどこか田舎にでもありそうな和風の旅館のような作
りをしていて、僕はこの宿舎がいたくお気に入りだつたりする。

学園に通う生徒のほぼ全ては、基本的にこの宿舎で寝泊りするの
がこの棘薔薇文学園における原則なのだが、まれに外から通学して
やつてくる生徒も少數ながらいるらしい。

だが それも本当にごく僅かで、ほとんどの生徒達はこの宿舎で暮らしている。

そんな事もあって、この学園は他の学校とは比べ物にならないくらい、生徒間の仲が良い 稀に不良みたいな子達もいるが、そういうのは別でグループを組んでいて、普段は互いに干渉しないし、僕も一部を除いて彼女らとはあまり面識がない。

そう言つた関わりの少ない者達を除き、こうして一人で廊下を歩いているだけでも、数多くの生徒が声をかけてくる。

「あら、紅条さんじゃない」

「ん？ ああ、こんばんは。船橋さん」

「聴いたわよ、今日広場で取り合いされたんですって？ 羨ましいわね、モテる人は。でも、女の子にモテる女の子って何なのかしら。カリスマ、とか言つやつ？」

「……えつと、その噂つてもう大分広まっちゃつてたりするのかな」

「そうねー、多分この階のみんなはもう知つてるんじゃない？」

「うわ……。くそ、最悪だ……」

「わわつ、生徒会長と口リートに大人気の紅条焰がいますっ！」

「こ、今度は一之瀬さんか。後ろからいきなり大声出さないでよ、驚いた」

「おお、紅条。百瀬先輩と渋谷に取り合いされたんだって？」

「佐久間さんまで、ちょっと止めてつてそういうの……。ほんと、何もないんだから」

次々と現れる三人の少女達 彼女達は通称・三姉妹と呼ばれる三人組で、僕と同じ一年生である。

一人目 船橋由香利。
ふなはしうかり

金髪ロングに黒のカチューシャを着用、三姉妹のリーダー的存在であり、いつも会うたびに上から目線でものを話してくる少女。

二人目 一之瀬灯。
いちのせあかり

桃色がかかったショートカットと左右に飾られた細長い赤リボン、

三姉妹の三女的存在で、僕の事を一度たりともフルネーム以外で読んだ事がない、おかしな敬語口調で喋る少女。

三人目 佐久間飛花里。
さくまひかり。

青髪のポニー・テールにすらりと伸びた体躯、三姉妹の第三者的といつか傍観者的存在であり、女の子とは思えないような男らしい態度や言動をする少女。

どうして彼女達が三姉妹なのかというと、いつも二人でつるんでもいるからと言うだけで、苗字の違いを見れば解るように本当の姉妹と言つわけではない。

名前がそこはかとなく似ているけれど、まったく関係ないので了承。

ちなみに生徒会長＝百瀬百合花なのは解りきっているとして、ロリートっていうのはあの渋谷香奈の事だ 見た目がロリータで中身がエリートだから合わせてロリート、なんてあだ名で呼ばれている。

もつとも、そんな呼び方をする知り合いの生徒達は少ないのだが一之瀬さんが命名して以来、少なからず周りの人間も真似をして使い始めた印象がある。

「ふーん？ そんな事はないって、もしかして紅条さん……二人とも蹴ったわけ？」

「蹴った、ってそれはまた悪い言い方を……だからさ、皆はまず前提つてものを」

「わー、酷いです紅条焰！ 女の子の気持ちをなんだと思ってんですか！」

「あのね、一応これでも僕、だって女なんだけど」

「……紅条。君の気持ちも解らなくはないが、乙女の心と言つものは実に純粹で壊れやすく脆いものだ。それを何の考えなしに蹴り崩してしまったと言つのは、少し感心しないぞ」

「ええい、佐久間さんだって何も解つてないじゃないか……！ まづ僕が女性だという事と、あの一人も同性だつていう事を考慮して

「

ようするに、今日の僕は調子が悪いといつ事でひとつ。

僕は、あの三姉妹をどうにか言い聞かせて、本当に納得したのかはさておき、今度こそ自分の部屋へと戻つて来ていた。
四畳半程度のワンルームに近い広さの部屋、そのドアの鍵を開けて中へ入ると、畳の上にある布団の上にひとり座りながら、こちらを向いている少女の姿を確認した。

「ふう、ただいま。麗華ちゃん、ちゃんとご飯は食べた？」
久峰麗華。

枝毛ひとつ見せないすらりと伸びた綺麗な黒髪、他に見ないほどの白い肌は脆く今にもひび割れてしまいそうな卵の殻のようだ。
服装はこの学園の敷地内では滅多に見られないような黒いレースの付いたドレスを纏い、場違いなほどに優雅なイメージを連想させるような落ち着きを持つた少女。

年齢は推定だが、恐らく十二、三くらいだろう。

今日の昼休み　百瀬百合花との会合で得た情報、あの戦闘狂の

『久峰』という苗字。

こんな偶然なんて本当にあるのか、と現実を疑つてしまつが

「……ご飯は全部食べた。そこに洗つた食器、置いてる……」

「そつか、偉いね。この部屋からは一歩も出でない?」

「……うん。言われた通りにしてる……」

この物静かな彼女がどうしてここに居るのか、一言で現すと拾つたのである。

それも学園の敷地内、この宿舎のすぐ近くで、だ。

名前は彼女の持つていた携帯を見て把握した　と言つても携帯の電池は切れいで、裏側に張られた白いシールの上に書かれた名前を見たのだけれど。

「よし、いい子だ。実は今夜も少し用事があつて部屋を出なくちゃいけないんだけど、ちゃんとここで静かに寝ていられる?」

「……大丈夫。迷惑は、かけないから……」

宿舎近くで倒れていた彼女を拾い、部屋にかくまつたのは良いのだが、ここからが問題だつた。

「それで……何か、思い出せた事はない?」

彼女 久峰麗華は、記憶喪失だつた。

「……ごめんなさい、なにも……」

「いいよ、気にしないで。麗華ちゃんはここでもうへりへり思い出せばいいんだから、ね」

「……ありがとう……」

普通なら、記憶喪失の女の子を拾つたなんて時点で警察やら救急車でも呼ぶべきなのだろうけれど、目を覚ました彼女は一言、僕にこう言った。

『……お願い、助けて……』 と。

彼女を拾つたその日からすでに三日が経つている。

傷も塞がつてきているし、疲労も恐らく回復しただらう。

あとは彼女の記憶さえ戻れば、何事もなく彼女を元の生活に帰す事が出来る。そう思つていたけれど、どうやらその時を待つ事もなく事態は解決しそうだつた。

何にせよ、これで僕にもあの戦闘狂と会つて話す理由が出来たつて事だ。

今夜 あの戦闘狂との、一度目の邂逅。

それが恐らく全ての起点になるだらうと言つ事を、僕は薄々と勘付き始めていた。

久峰零次は、夜の街を一人孤独に彷徨つていた。

人気のない静かな川沿いの砂利道を、どこか辛そうな表情を浮かべながら、よろよろと右肩を左手で押さえながら歩いている。

「ちくしょう、あんの野郎……。一体どこに田を付けてやがるんだ、クソッ！」

その右肩から肘にかけてまっすぐに伸びる赤い筋　ぽたり、と地面に落ちたそれは、正真正銘の血だった。

久峰零次は、とある能力者との戦闘で負傷してしまったのである。この街に住む能力者ならば、ほとんどが知っている『殺人鬼』と呼ばれる能力者、それが久峰零次であり　　その呼び名通り、零次はこの街に住む能力者達と片つ端からの殺し合いをしている。

その圧倒的な力の前に、ほとんどの能力者は敗北し殺されるか、運良く逃げ出すかのどちらかだと言つても過言ではないのだが、今日、ついに久峰零次が敗北した。

相手はあまり名も姿も知られていない程度の駆け出し能力者だが、その強さは、零次が今まで出会つてきたそれらどれよりも格段と言えた。

（背後から、確実に気配を隠して近付いたはずだ。だって言つのにアイツ、振り向きもせずにこつちに気付きやがった。しかも、それだけじやねえ　　何なんだ、あの能力は？）

ぽたぽたと落ち続ける血液を、零次は力を込めて左手で止血し続ける。

だが、ここまでやつてくるまでもうかなりの時間が過ぎていたこのままでは出血多量で倒れてしまつてもおかしくはない。

（……チツ、柄にもなく妹の仇だなんて粋がるからこのザマだ。死んだ人間の敵討ちだなんて、オレはいつの間に正義の味方風情に成り下がつちまつたんだ）

久峰零次には、一人の妹がいた。

その名を、久峰麗華と言う。

今年で十九になる零次とは六歳も離れた十三歳の少女　　まだ中学生に入つたばかりで友達さえ少ない妹が、つい三日前に殺されてし

また。

殺された　とはいっても、零次自身が殺害現場を目撃したわけでもなし、死体を確認だってしちゃいない。

だが、零次は確かに聴いた。

携帯電話越しに聴こえる、妹の声を。

『助けて』という、麗華のただ一言の叫びを　聴いた。
通話が切れてからは何度も繋がらず、最終的には電池切れになつたのだろう　電波が届かない云々の機械音声が流れるだけだった。

久峰零次が生糸の超能力者であるように、妹の麗華もまた、しない超能力者だった。

零次がこの街で暴れているという噂はすでに町中に浸透していたし、その妹が見せしめに狙われるなんてのは、決して珍しくはないケースだ。

むしろ、力では敵わない零次に対する牽制として、その妹を狙つた　と、考えれば筋は通る。

その妹が生きてさえいれば、だが。

あれから三日経つた今でも、妹から何の連絡さえない　三日間の音信不通　それは、あまりにも残酷な現実を零次に突きつける。（……あいつ、笑つていやがった。やつてないとは言つていたが……あの顔は、このオレと同じ　殺しを楽しんでいるものの顔だ。今日は上手く逃げたが、明日……今度こそ、ケリを付け　）

久峰零次は、夜の街をその鋭い眼光で睨みつけながら　最後の力を失い、その場に倒れ込んだ。

棘薔薇文学園、その生徒達が一堂に会して暮らしているこの宿舎には、和風な作りの建物にピッタリの天然温泉がある。

建物の一階、その五分の二くらいのスペースを使用した大浴場は、

昼夜問わず宿舎で暮らす少女達にとつて憩いの場となっていた。

「うわつ、なんなのこの巨乳パラダイスはー？ あたしの居場所がまるでないよー！」

通称口リート 渋谷香奈が、真っ先に浴場を見回した感想がそれだった。

「いちいち毎度の」とく呼ばないでよ、香奈……。一応屋外なんだから、ヘンなとこまで聴こえちゃうかも知れないし」

僕 紅条焰は、友人の香奈と偶然居合わせた三姉妹に連れられて、夜の大浴場まで足を運んでいた。

さすがは口リートと言つべきか、ないとこには問答無用で皆無である。

仰向けに寝かせて横から見れば、恐らくそこには水平線が見える事だろう。

「……ま、かく言つこの僕もつるぺた同盟の一員なわけで」

「おー、つるぺた同盟！ いいねー、なんだかあたしの居場所が出来たみたいで心地が良いねー。どうせならこのあたしが入浴する時間帯はつるぺた同盟のメンバーのみしか入れない事にしちゃおつかー？」

「出来るものならどうぞ。僕としちゃ、別に胸が大きからうが小さからうが、どちらも同じようなもんだと思うけど。ってか、無いほうが楽そうじやない？ いちいち重いものを付けて歩くのって、凄く邪魔くさい気がするんだけど」

「なんとこうポジティブ思考……、ほむりゃんは間違いなく女じやないねー」

「悪かったね、僕だつてこれでも気をつけてはいるつもりなんだよ」「ん？ あ、いやいや。別に香奈ちゃんはそういう意味で言つたわけじゃないんだよー？」

二人、真っ裸で浴場のど真ん中に立ちつつ、他人から見れば何を話しているのか意味が解らないようなトークを繰り返していくうちに、一緒に来ていた三姉妹もようやく浴場へと姿を現した。

「あら。今日も見事なお子様つぱりね、渋谷さん？」

ゆつさゆつさとナイスバディを白いタオル越しにちらつかせながら、三姉妹リーダー・船橋由香利が香奈日掛けて先制攻撃を仕掛け る。

いつもの事だが、何の脈絡もなくケンカを売つてるとしか思えな いぐらいの発言をよく出来るものだ と、少し呆れを通り越して 感心さえしてしまった。

「むむむ、貴様は入つてくるなー。あたしと一緒に入つていいのは あくまでつるべた同盟団員だけなー」

「あら、胸が無いと女としてどんな得があるの？ 言つては悪いけ れど、大きいに越したことはないのよ、胸なんて」

ほらほら、と胸元を反らしながら、無駄にアピールを繰り返す船 橋由香利。

その度に口惜しそうな表情で、その揺れる果実を睨みつける渋谷 香奈。

「ああーっ、紅条焰！ いくら女子だけの場だからといって、仁王 立ちで素肌を晒すだなんて唯我独尊にも程があるので、不潔です っ！ うあ、そこのロリートもまったく同じ格好じゃないですか！ これは酷いです、見るに耐えない光景ですっ！」

次に一之瀬灯の登場である。

僕の姿を見つけるなり、いきなりフルネームで名指しつてのはど うなんだろう。

「別に、見られて困るのは付けてないつもりだけど？」

「な、ななな……！ 付けていない、とはどういう意味ですか！」

貴女はそれでも女の子ですか、この性犯罪者っ！」

「……うん、ごめん。今すごく聞き捨てならない言葉が聞こえた気 がする。えっと、何だっけ。僕が、一体何だっ……？」

「ひ……！ 食べられちゃいます！ 灯、食べられちゃうーっ！」

「くそ、どうして僕はいつもやつち方面のネタに持つていかれる んだ。この、待てっ！」

バスタオル一枚の小さな 香奈ほどではないが、なかなか幼さが残っている 少女を、真っ裸で追いかける僕。

あれ、もしかして結構ヤバいですか？

「おいおい、騒ぐのも控えめにしておきなよ。ここは共有の場なんだから」

最後の一人、佐久間飛花里さんがやつてきた。

彼女は長い青髪を下ろしていて、いつものポニーtail姿とはうつて変わった印象を受ける。

もちろんバスタオル は、何故か見当たらなかつた。

「あああああッ！ 飛花里、飛花里がバスタオルを付けてないですーつ！」

「ん？ ああ、遠目で見てたらなんだか面白そうだったんで、つい」

「……佐久間さん」

「おお、なんだ？」

「バスタオル無着用の僕が言つのもなんですが、そのスタイルでタオル無しは、ちょっと」

「拙いのか？」

不思議そうに首を傾げるその彼女は、覇眞目に見てもまさか十代だとは思えない程のプロポーションをしていた。

その高くスラリと伸びた身長にぴたりと合つ流麗なスタイルは、いくら同性とはいえ誰でも顔を真っ赤にしてしまいかねない代物である。

それをバスタオル無しで堂々とされてしまつては、皆が皆、目の前に困つてしまふに違ひなかつた。

「マズいっていうか、その。そういうのは、僕や香奈だからこそ出来る技というか。佐久間さんがやつちゃうと、裏技の域つていうか」「私としてはなかなか気に入つていたんだが……、たまにはこういうのも悪くはないだろ？ まあ……しかし、確かにこのままだと灯がうるさいからな。素直にいつも通りにしようか」

佐久間さんは眞面目な表情で頷き、咳きながら脱衣場まで戻つて

いった。

(あー、危なかつた。佐久間さんみたいな核弾頭クラスの人があんな行動に出ちやつたら、いくらみんな女だからって田のやり場に困るつて……)

僕としては、そもそも恥じらい云々の前に、僕自身の自覚の問題なんだけれど。

「おつと。おや、」の時間帯に来られるとは珍しい

ふと、脱衣場の方から佐久間さんの声が聴こえてきた。

「ええ、少し気が向いたもので。それより、中が何だか騒がしいようですが」

(……まさか、」の展開は)

「ああ、うちの身内が少し。あいつらはこの私でもそう簡単には鎮められませんので、好まれないのであれば、時間を改めたほうがいいと思いますよ。百瀬先輩」

ぺたん、と、誰かが浴場の石床を踏む音が響き渡った。

「構いませんわ。今日は少し用事もありますから」

(うわ、やつぱり……ッ！)

バスタオルを着用し直して浴場に戻ってきた佐久間飛花里の隣にいたのは、一年先輩で生徒会長、ついでに現在進行形でストーカー疑惑のある百瀬百合花その人だった。

ピンクのバスタオルを胸元に巻いたそれだけの格好で、堂々と腰に手を当ててその場に立っている。

恐らく大浴場にいる誰もが、生徒会長の登場に驚き、目を向けていた事だろう。

だが、彼女の視線は他の誰でもなく、」の僕へと向けられていた。

「……あ、どうも偶然で

「ああんつ、焰さん！」

「うわあ！ な、何なんだよもつっ！」

僕が返事をすると、百瀬百合花はこちらへ向かつて駆け出した。

ここが浴場である事など、まったく気にしていないと言わんばかりの猛ダッシュで。

「これで今日は三度目ですね。なんと言ひ幸運……わたくしは嬉しいですわ、焰さん」

「は、はあ」

僕が地面に尻餅を付いた状態で彼女を見上げていると、百瀬百合花は僕を見下ろしながら気持ち悪いくらいの笑みを浮かべた。

よく見れば、いつもつけている眼鏡がなく、髪も三つ編みではなく頭の後ろで丸めて止めている。

普段見ない彼女の素顔を真正面から見てみると、やっぱりとかか、かなりの美人だつた。もつたいない、という僕の得た第一印象は間違つていなかつたわけである。

「それにしても、焰さん？」

「……はい、なんでしょう」

「わたくしとしては、そのような格好ですと誘われていてしか思えないのですが、そのまま解釈してしまってもよろしいですかしら？」

「へ？」

そこまで言われて、ようやく僕は今の自分がどんな状態なのかを把握した。

「うわ、うわあ！ 僕は別にそういうつもりじゃ」

「……ほむりやん。まさかこんな大衆の目の前で堂々ヒー？」

船橋由香利との言い争いに負けたのか、口惜しそうな顔をして現れた香奈が僕の大膽不敵ポージングを眺めながら呟いた。

「へえ、紅条さんってやっぱりそっちの……」

「わわあ、紅条焰！ なんですかその全力開脚モードは一つ…」

香奈に続くように、隣に立つ船橋由香利と一之瀬灯が、それぞれ神妙な面で僕を注視する。

「いやあの、だからこれはですね」

「ああっ、焰さん！」

がばあつ！ と、百瀬百合花が僕目掛けてダイヴを敢行 この体制では避けきれず、僕は仕方なくそれを両手で受け止める。

瞬間 おおーっ、と言つ觀客の歓声が沸いた。

「ナイスキャッチですわ、焰さん」
何なんだよ、もづ。

大浴場の温泉は、宿舎建設当時に偶然この地に湧き出たと言われている、正真正銘の天然ものである。

突然の百瀬百合花の登場によるハプニングもなんとか落ち着き、僕はその百瀬百合花と二人、夜空の下で湯に浸かっていた。

「相変わらず最高ですわね、こここの温泉は」

まるで天国にでもいるのかと思えるくらいの心地良さそうな声色で、隣で湯船に浸かりながら夜空を見上げている百瀬百合花がそう言つた。

「……どいつもいんだけど、もうかれこれ三十分は浸かりっぱなしや。そろそろ出ないと、僕も百瀬先輩ものぼせちゃうと思つんだけど」

「百合花、ですわ」

「……はあ。名前なら知つてますけど？」

「くどいですわよ、焰さん。わたくしが名前で呼んでいると言つつのに、あなたはわたくしの事を名前で呼んでは下さらないのかしら？」

「いやでも一応、一つ上の先輩なわけだし」

「あら……、焰さん。あなた、本当にそう思つていますの？」

夜空を見上げていた百瀬百合花は、僕のほうへと田線だけ移し、まるで全てを見透かしているよつた瞳で僕を見つめながら ただ、それだけを口にした。

「それは」

「良いではないですか。わたくしがそう呼んで戴きたいといつだけ

のお話ですし。それに、好きな方に名前で呼ばれたいだなんて、乙女らしくて素敵でしょう?」

やはり、僕にはこの人の考えている事だけはまったく解らない。一体どこまでが本気で、どこまでが冗談なのか 何でも解りきつているとでも言いたげな言動は、本当はどこまで理解して口にしているのか 解らない。

「……解ったよ、これからは百合花さんって呼ぶ。それでいい?」「ええ、とても素晴らしい響きですわ。さん付けも無くなれば更に良くなるのですが、それは今以上に親しくなつてから と言う事にしておきましょう」

(やり辛いなあ……、「冗談だとは思えない所が特に……)

僕は元々バスタオルなんて着けていない状態でこの大浴場まで足を運んでいる その為、今でも全開の真っ裸で入浴中である。百瀬百合花はと言つと、バスタオルを付けたまま入浴するなんていう、行儀の悪さは覚えていないらしい 僕と同じく真っ裸で、バスタオルはすぐ傍に畳まれていた。

つまるところ、今の僕達は風呂場とは言え互いに裸で顔をつき合せているわけである。

それだけでも十分に親しい間柄のように思えるし、これ以上彼女との関係が親しくなるなんて事は、出来れば僕としては避けたいところだ。

「さて……人も居なくなつて來たところですし、そろそろ本題に入りましょう」「それじゃもしかして、ずっと僕を引き止めてたのは 」

「ええ、今夜の事についてのお話を。まだ詳しい作戦説明もしていませんでしたので」

三十分もこうして僕を連れて入浴していた理由はそういつ事だったのか。

それならそうだと先に言つておいて欲しいものである。

「 つて、ちょっと待つて。作戦、つて……最初から百合花さん

は戦うつもりがないんだろ？ それなら、正面からいけばいいだけじゃないか。少なくとも、僕はそうすると思つてたけど

「それは出来ませんわ、焰さん。何故このわたくしがあなたと共に連れて行く必要があるのか、お分かりですかしら？」

「それは、僕が久峰零次と面識があるから」

「いいえ。いざと言うときのボディガードになつて戴く為、ですわ」

「……まさか、向こうから仕掛けてくる、と？」

「少なくともわたくしはそうでしたから。それに、向こうはわたくしの姿を覚えているはずです。もしもわたくし自身に対し、この間に狙われた何らかの要因があるのだとすれば 前回同様、わたくしが標的にされる可能性だつて捨てられませんわ」

それは 確かに、有り得ない話ではない。

僕があの戦闘狂とやり合つた時は、どちらかといえば僕から先に仕掛けたようなものだつた と言つても、僕に彼女の姿は見えていなかつたし、あの廃工場へと入つていつた僕に彼女が気付き、その姿の見えないまま、

『……テメエ、敵か？ このオレに会いに来たつー事は、ようするにそう言う意味だよな？』

静寂な建物内に響き渡るその言葉が、戦闘開始の合図となつた。事前に久峰零次の能力発動条件について理解していた僕は、最初から相手の姿を見ようとしなかつたし、出来る事なら背後を取つての一撃必殺 それだけを狙い、後手に回つていた。

そして、結局はあのザマだ。

「……こいつ言つてしまつのも何だけど、僕じゃボディガードは勤まらないと思うんだけどな。正直、昼間にも言つた通り 僕じゃ、彼女に勝てるとは思えない」

「謙遜、ですわね。いえ、きっとあなたは未だに自らの持つ可能性に気付けていないだけなのでしょう。……大丈夫ですわ、今回は本当にただの保険として付いて来て戴くだけですから。もし自分の命の危険が迫つていると感じれば、その時はわたくしを見捨てて自ら

の命を優先して下さつて結構です

「いや、それは」

「とにかく、焰さんは万が一の事態に備えて下さればそれで良いのです。後はこちらでやりますし」

百瀬百合花は、怯えの一つも見えない不敵な笑みを浮かべながら、「このわたくしだって、あなたと同じ場所に立っている一人の能力者なんですよ?」

夜 九時半になると、この宿舎は消灯の時刻となる。

大抵の生徒は消灯になると自室で静かに過ごすのだが、ごく僅かにそのルールを守らない不良生徒達が存在していた。

「ねー、豪夜あ。ここ暗いしさ、早いトコ外いかねー?」

「うつせーんだよ、静かにしてろバカ。まだ消灯時間から一時間も経つてねーんだ、官僚のクソ共が見回りにきたらメンドクセーダーラーが。出るにはまだえーっての」

「ま、あたしは別にいつでもいいけどねー。こうやって暗がりの中でヒソヒソ話して過ぎすつて言つのも、それはそれでオツなものだと思つしー」

宿舎の中では、消灯時間後でもまだ開いている場所がある。

宿舎を數十分ごとに見回つている官僚がやつてくるという危険性もあるのだが、ここ、夜の食堂だけは、他と比べると比較的安全だと言えた。

何しろ隠れる場所が多く、その空間の広さもあってか、見回りが来たとしても大抵は適当に中を眺めてすぐ立ち去るパターンがほとんどで、厨房にいたつてはチェックさえされない始末である。

夜の十時 三人の不良少女達がそこに集まり、夜の街へと出かける為の時間潰しに暮れていた。

「それよりほりちんさ、今日お風呂入ったー? 何だか匂いますよ

ー？」

三人の中でも飛び抜けて背の小さい、ピンクのブラウスに短い紺色のスカートを履いた私服姿の少女 渋谷香奈は、隣で身を屈めている黒髪短髪の少女を見下ろしながら、細々とした小さな声で呟いた。

「入ったつづーの、このロリアマが。それと何度も言つてんだる、ほりちゃんはやめろほりちゃんは。普通に名前で呼びやがれ、ちん付けされると恥ずいんだよバカ」

香奈がほりちゃんと呼ぶ少女

倉坂濠夜

は、心底うつとうしそうな顔をしながらそう言った。

「恥ずかしいだつてさ、聴いた？　いいよー香奈、もつと言つてやれつ」

からかうように声を上げたのは、三人組の中でもつとも背の高く、短い銀髪に他の一人とは違つて未だに制服を身に着けている少女、二年の綾峰雫である。

「チツ、騒ぐんじやねえよクソバカ共が。見つかったら三年のオレがめんどくせ一日に合わなきゃいけねーんだ、ちょっとは自重しやがれ」

倉坂濠夜は、この三人組の中で唯一の上級生であった。

この宿舎で何らかのトラブルが起きた場合、基本的にはその原因であるものが複数であれば、その責任は全て上級生が負うルールとなつてている。

その為、特に三年生は滅多な事では面倒事に首を突っ込みはしないし、自ら何かをやらかそうなんて考えも起こさない。その為、下級生からしてみれば、それは結果的に模範となり、この宿舎は全体的に平和な風潮で落ち着いているのが普通であった。

だが、彼女ら三人のような不良グループと呼ばれる一部の生徒達に限つて、それは関係のない例外だ。

味方の少ないこの宿舎に、彼女達不良グループの居場所なんていふものは滅多に作れたものではない。少なくとも、香奈以外の二

人はそうである。

「つたぐ。見つかるつもりはねーし、責任取る氣だつてそりそりねーけどよ。万が一そうなつたら綾峰、テメエもつ絶交だなあ

「えつ……、それは嫌だつて、濠夜あ！」

「そんなら静かにしてろつての。……フン、来やがつたみてーだな」

「え？ と、濠夜の声に気付いて身を屈める一人が、厨房の隙間から食堂の入り口に視線を向けると

「……うわ、あれつて暮凪くれなぎじゃね？」

「スバルタで有名の美人眼鏡！」

「黙つてろつてんだる、カス。……しつかしヤベーな、よりにもよ

つてアイツか」

「ふーん。あたし知らないんだけど、あの官僚つて何かあるのー？」「ああ、アイツだけはこの食堂もしつかりチェックしていきやがる。まさか今日が当番だつたとはな

「策はー？ ほりちんの事だから、当然考えてあるんでしょー？」

「そりゃあるが……この三人じや、動くにしても音を立てずにつてのはさすがに無理だろ。チツ、このノッポバカがいなけりや、少しはマシだつたんだが

「うわ、ノッポバカだつてぞ。酷いなー、かわいそつだなー。ねー、しずちん？」

「……」

「しずちんー？」

「いつまでバカ相手に喋つてんだ、渋谷。……来るぞ」

懐中電灯を片手に、長い茶髪を靡かせ、教職員用の白い服を着た通称・美人眼鏡が、そのライトの光を厨房へと向ける。

「……いいか、出来る限り背を低くしろ。この厨房には出入り出来る場所が二つある。アイツは左側から来るはずだ、それに合わせてこつそり右側から出る。出来るな、渋谷。綾峰」

「オッケー、任せといでー」

「……」

「オイ、綾峰。解つたのか」

「…………」

まるで落ち込んだ子供のよう、膝を曲げて顔をうつ伏せにしたまま、零は返事すらしない。

もう時間がない 濩夜は、その肩を右手で思い切り揺さぶった。「何してんだよバカ、早くしないと見つかっちゃうだろーが。見つかったら絶交だつただろ、聞いてんのか綾峰！」

「…………だつて、黙つてろつて言われたんだもん」

「だーつ！ 解つたもう黙つてなくてイイから、とにかく今は逃げる事だけ考えやがれ！」

「…………うん」

「ヤバいよー、二人ともー。もうそこまで来てるよー」「チツ

」「こつん、こつんと靴の足音が響き渡る。

「誰か、そこにいるのですか？」

(マズいな、こりや)

倉坂濠夜は考える。

ここに自分達がいる事はもうバレている あとは自分達の正体がバレないよう、なんとか顔を見られずにここから逃げ出す方法を

(……やるしかねーか。チツ、出来る事ならあんまし使いたくなかったが、仕方ねーな)

濠夜は後ろにいる一人の少女を横目で見る。

「お前ら、オレがここはなんとかしてやる。先に行け」

「へ？ でも、それじゃほりちゃんは

「いいからいけよ、渋谷。テメエは解るだろ」

「…………なるなる。オッケー、あたしに任せとけー

「ちよつ、ちよつと待つて香奈。濠夜を放つて

「大丈夫よー、しづちん。ほりちゃんは最強だからねー」

香奈はそれだけ言って濠夜に一瞥をくれてから、零を連れて反対

側の出入口へと姿勢を屈めたまま走った。

「……？ 誰です、そこにいるのは！」
さすがに物音に気が付いたのだろう 官僚の美人眼鏡がそちらへと振り返る。

(させねーよ、クソ野郎！)
ガダン！ と物音がした。

香奈と雫は全力で背を向けて走っていた為、その物音が一体何のものなのか、その目で確かめる事は出来なかつたが
「な、なんですか、これは……っ！」

「わりーね、美人眼鏡の官僚さん。生憎ながら、こんな事でバレちまうワケにやいかねーんだよ、オレは」

食堂にあるテーブル、その一つが

「そ、そこにいるのは誰ですか！ 生徒ですね、名前を言いなさいっ！」

「アホかよ。バレたくねーっつってんのに、わざわざ自ら名前を言うワケがないだろ。ボケてんのか」

ピタリと、まるでそこにあるのが当たり前のようになつた。

「それじゃ、オレはこれで。お勤め御苦労様。ま、せいぜい夜の食堂には気をつけるこつた。何せ、ほら」

厨房の出入口 収容の奥側にある場所に立つている官僚と、もう一つある厨房の出入口 食堂から外へと出る扉の側に立っている豪夜。

まるで、互いを挟んで豪夜の姿を隠すように 食堂の長いテーブルが、彼女達の間に横向けになつて宙に浮いていた。

「オレみてーなのが出できまつから、な？」

ピシャリ、と言つ扉の閉まる音と共に、宙に浮いていたはずのテーブルはその場へと落下した。

「な、何なの……。コレ……」

スバルタで有名な美人眼鏡の官僚は まるで幽霊でも見たかの

よつな涙の溜まつた瞳で、威厳なくその場に崩れ落ちた。

「それじゃあ、行つてくるよ。麗華ちゃん」

僕 紅条焰は、布団ですやすやと眠つている少女・久峰麗華にそれだけ囁いて、静かに部屋を後にした。

扉を出て、ポケットから取り出した鍵を掛けた。

消灯後の宿舎 それも、深夜の零時前となるとすっかり暗闇に包まれていて、前せえろくに見えない深遠が廊下の向こうまで続いていた。

「さて、と。早いとこ百合花さんと合流しそう」

この宿舎は、夜の十一時まで官僚による見回りが定期的に行われている。

それを過ぎれば、基本的に宿舎内は静寂と闇に包まれただけの空間になり、怖がりの子となると、夜中にトイレに行く事すら億劫になるほどだ。

ちなみに僕は、そういうのは全然怖くないので無問題 どちらかと言えば、窓さえないこの廊下を歩く前の見えない不安感のほうが厳しい。

「ま、今田は備えがあるわけだ」

僕は鍵の入っているポケットとは逆のポケットから、一枚の紙を取り出した。

と言つてもただのノートから千切り取つただけのもので、何か特殊な細工をしているとか、暗闇で発光するとかそういう代物ではないが

(この紙の先端部分……よし、ここだけを)

物体発火。

僕の持つ超能力であり、対象が何であろうが触れるだけで燃やす事の出来る力。

僕は持つてきた紙の先端部分を指で摘んで、それを燃やすイメージを脳内で作り上げる。

その後、すぐに手を離し　　その紙は、先端からゆっくりと燃え始めた。

(全部燃え尽きる数秒までの間に、ここを突つ切りつつ)

廊下となるべく音を立てないように走つていくと、曲がり角が見える。

そこを曲がる直前、紙は燃え尽きて灰になり　　そして、灰でさえ残らず消えていった。

廊下の曲がり角を左折すると、その先に宿舎の出入り口が見える。僅かな明かりが照らしているその場所へ、僕はまっすぐに向かっていって、

「あれー？　ほむりやんじやん、どうしたのー。こんな夜遅くにー」
最悪なタイミングで、友人である渋谷香奈と鉢合わせてしまった。

「香奈、どうしてここに……？」

「もう、先に質問したのはこっちだよー。驚いたなー、まさか不良生徒のお仲間入りでもしちゃったとかー？」

不良生徒　　そうだった、香奈はその不良グループと仲が良かつたんだつけ。

「いや、僕はそんな香奈みたいに節操無しじゃないよ。ただ、ちょっと用事があるて

「用事ー？　ふふーん、それは香奈ちゃんも一緒に行つても大丈夫なレベルー？」

「大丈夫じゃないレベル」

「そつかー、それじゃあしうがないねー。そういえばさつき百瀬先輩と会つたけど、もしかして関係あつたりするのかなー？」

「百瀬先輩？　そつなんだ、全然知らな　　」

「あら、焰さんつたらこんな所にいましたの。もうとつぶく約束の時間は過ぎてますわよ」

「……ああ。それは、どうも……お待たせしました」

まさに狙つたとしか思えないタイミングで、宿舎の出入口からやつてきた百瀬百合花。

香奈はやつぱり、と言つた顔で僕を睨みつけた。

「あら、渋谷さん。またお会いしましたわね」

「どうもー、百瀬先輩。しづちんがお世話になりましたねー」

「いえいえ。たとえ数が少ないとはいえ、生徒会長として不良生徒達の指導を務めるのは当然の義務ですわ。とはいえる、あなたも本当に顔が広いですね。彼女もこの間とは違う方でしたし、たくしてさえ彼女達の事を管理し切れていない現状ですし、やはりここは委員会のほうにもご参加戴けませんこと?」

渋谷香奈は、普通の生徒・不良生徒問わずとして仲が良い変わるものだつた。

彼女がロリー^ト　皮肉にもHリー^トと言つ意味を含めてそう呼ばれているのは、何も頭が良いからという理由だけではない。

その人の良さは友達作りの才能と呼んでも過言ではなく、普通の生徒達ではほとんどが近付く事すら出来ないあの不良グループに何の気兼ねもなく近付ける少女　それが、渋谷香奈だ。

「んー、そつちはだから、もつ解つてると思つけどほむりやんとの日課がですねー」

「ええ。言つてみただけですわ、どうかお気になさらず!」……さて。それではわたくし、その紅糸焰さんと夜のデートがありますので

「うわ、ちょつ、バカ!　なに誤解を招くような事を

「へえ、そつなんだー。つまりほむりやんは百瀬先輩と一人つきりで夜のデートがしたいから、あたしに嘘まで付いて誤魔化そうとしたわけだー。なるなるー、香奈ちゃんはやつと解つたよー」

「……いや。あのさ、香奈。だから違つて

「いいよー、おやすみほむりやん。どうぞ!」やつくり!

ぱたぱたぱた、と駆け足で宿舎の中へと消えていく香奈。

してやつたり　みたいな顔をしながら、それを見送つている百

瀨百合花。

「…………今のはまつとやつ過ぎただと思つよ、西行花火」

「あら、わたくしは本当の事を言ったままですわ。それに、これ以上付きまとわれて時間が食いつのは、あなただって本意ではないでしょ？」

「それは、そうだけど」

「渋谷香奈。彼女があなたの事をどこまで知っているのかは解りませんが、まさか噂の殺人鬼に会いに行くなんてさすがに言えませんでしょう」

「彼女は僕の事など何でも知ってるよ」

「……………」

「うーう意味で言え、今の母王いらー上うらじんが、さから

その事についてはもうひとかくは言わないよ、百合花さん。でも

2

田 健がこころで語るが悪い現田

10

「……こんな言い方、本当はしたくはない。でも、駄目なんだ。香奈だけはダメなんだよ、百合花さん。僕は香奈だけは手放せない。香奈より優先するものなんて何もない。もしこれが僕を主人公とした物語と例えるなら、香奈がヒロインでなければならぬんだ」

百瀬百翁花口を開かなし

ただ、僕が何を言つてゐるのか解らない
べたような表情で、ただそこに立つてゐる。
そんな疑問符を浮か

「だから

僕は、言わなければならない言葉を
なかつた言葉を、紡ぐ。
出来る事なら言いたくは

「」の一件が片付いたら、もう僕に付きまとうのは止めて欲しい

驚いた、のだろうか。

田の前の少女　百瀬百合花は、田を見開きながら無言で僕を見つめていた。

僕の事を　本気がどうかは解らないが　好きだと言っていた少女。

こんな最低な突き放し方、正直したくはなかった。だが、それでも。

僕にとって、香奈以上に優先すべき事なんてものは、何もない。「…………そうですか。理由をお話しては……下さらない、みたいですね」

「ごめん」

「いえ、謝らないで下さい。元はと言えばわたくしが押し付けたようなものですわ。何もかも…………この一件にしても、告白の事だって

」

今更になつて胸が痛む。

僕には、彼女を突き放す権利などないと言つたのに。

「解りましたわ。今回の件が終われば、わたくしは以前と同じあなたと出会わなかつた時と同じように戻ります。約束の事も、上手くいけばきちんと取り計らりますわ。それで宜しいかしら？」

「うん。お願いするよ」

それだけ言つて、百瀬百合花は僕から田を逸らし　呟く。

「…………あの、焰さん」

「何？」

「もし、これで最後になるのでしたら、その……わたくしの最後の願いを、聞いては戴けませんかしら」「最後の……？　僕に出来る事なら、善処するけど」

「それでは、こちらまで来て下さい」

百瀬百合花に言われるがまま、僕は彼女の傍へと歩み寄る。外へ出ると、満月が綺麗に輝く夜空が広がっていた。

「紅条焰さん。わたくしは」

百瀬百合花は、眼鏡を外して髪を解く。

彼女は月の光に照らされ、まるでこの世のものとは思えないくらい綺麗な姿をしていた。

「わたくしは、あなたの事が好きです」

ただその光景に入っている僕は何も出来ず、何も言えない。

「これは冗談でも、嘘でもない、わたくしの本当の気持ちですわ。わたくしは、あなたに出会い、あなたを知ったその時から、あなたが事だけを、世界の誰よりも、愛しています」

そうして。

いつの間にか触れていた彼女の唇も、また、いつの間にか離れていた。

「……百合花、さん」

「すみません。ですが、これが最後ですわ。これぐらいの我わがまま僕は、させてくれてもいいでしょう？」

「どうして、そんなに……僕を？ だって、僕は

僕は 女なのに。

「本当にそう思っていますの？」

「え」

「……今だから話しましょ。わたくし達は超能力者です。だからこそ、持ちたくないでも持たなくてはならないものがある。……わたくしはね、焰さん。男性を認識することができないのです」

（な……まさか 精神障害？）

僕達、超能力者には必ずそれぞれ精神障害というものが存在する。逆に言えば、超能力者とは精神障害を持たなければなる事が出来ない存在であり、その精神障害をそのまま外的要因へと変化させたものが超能力である。

「男性を認識出来ないから、女性を愛するしかない などと云つて考えを持っているわけではない、という事だけは先に弁解させて戴きますわね。どちらかと言えばわたくし、人を愛する事を放棄しよう

うとしていましたから」

「人を愛する事を、放棄……」

「ええ。女は男を愛するもの、それが世の常ですわ。だからこそ、わたくしはもう人間として生きていく事は出来なくなつた。……いえ、女として生きていけなくなつた、が正確でしうが ものはどちらでも同じ。結局、わたくしはその時点での普通の人間ではなくなつたのですから」

普通の人間ではなくなる。

それは、まるで

「超能力者というものは、少なくとも必ずそういう『人と違う部分』を持つていますわ。ですから、同じ超能力者であるあなたに共感した と言う理由も、なくはありません。しかし、それはわたくしにとつて他の超能力者に対しても言える事。別に、それがあなたを好きになつた理由などではないのですわ」

「それだつたら、どうして

「簡単ですね。あなたは、自分を一度たりとも女性だと思ったことがありますかしら？」

「……ッ！」

なるほど 彼女は、本当に何もかも見透かしていたつてわけだ。今までの解つてたような言動も、嘘のように聴こえた言葉も、出まかせにしか思えなかつた行動も。

全て承知の上だつた、そう言つ事か。

「さあ、どうなのですか？」

「……お手上げだよ、百合花さん。確かに僕は、今まで自分を女だと思ったことはない。だからつて同性が好きとかそんな話にはならないし、その程度のものでもないけどね」

「そうでしょうね。ですが、あなたがどんな心構えを持つて女性であるのだとしても、わたくしにとつては事実が全て。このわたくしに唯一見える光、それがあなただつたのですから」

「でも、言つておくけど、これは僕が持つ超能力とはまったく関係

のない精神障害だ。僕が自分で引き起こした、僕の所為で作られた、

僕自身の拭い切れない精神障害に過ぎないんだよ。だから事実、僕は女だし　それ以外の何者でもない」

「ええ、それくらいあなたの能力を知れば解りますわ。ですが、そんな事は関係ないです。あなたが女であろうとなからうと、男性を認識できないと言う異常を持つこのわたくしにしてみれば、そんな事はなんて関係ない　あなたが見える、それが重要なのです。それに超能力者は精神で通じ合うもの　わたくしはあなたと出会い、あなたを知ったその時から、あなたを愛すると決めたのです」

それが、百瀬百合花が持つ精神障害を乗り越える、唯一の方法つまりはそう言つ事なのだろう。

なるほど、確かに異常者らしい。

「それに　それが決定打とは言え、何もそれだけではないのですわ。わたくし、焰さんみたいな方は元々、好みですし」

「へえ。それってどんな部分が」

「ええ、お恥ずかしながらわたくしども生糸のSのようですね。焰さんとの相性は、勝手ながら最高だと自負していますわ」

……、そうきたか。

渋谷香奈は、寂しげな表情を浮かべながら宿舎の暗い廊下を歩いていた。

この宿舎は四階建てであり、一階には教職員と官僚専用の各部屋、管理人室、食堂、大浴場が存在する。

香奈は一階の廊下　ちょうど大浴場の入り口付近を通りかかったところで、廊下の先にある一つの部屋の扉が開けられている事に気が付いた。

そこから薄らと光が漏れている為、この暗闇の中でも特に目立つて見えたのである。

(あそこ、確かセンセーの部屋じゃ？ こんな時間に誰が)

すでに時刻は零時を過ぎている。

こんな時間に起きているような人間は、この宿舎では滅多にいない
それも教職員となれば尚の事で、部屋の扉が開いているだけ
でも不思議だというのに、その中には明らかに明るい光が照らされ
ている。

誰かが起きている証拠だ 香奈はそう思い、咄嗟に身を隠そ
と近くの柱の影へ隠れる。

これだけの闇の中であれば、扉から漏れ出ている光程度では、自
分の姿は見つからないだろう 今ここで見つかると、あの百瀬百
合花に見つかる程度では済まない。

(なんだかんだ言って、百瀬先輩は生徒の味方だしね……。おつ
と、誰か出てきた)

香奈は身を隠しながら、誰がそこにいるのかを確かめる。

そこにいたのは あのスバルタで有名な、通称・美人眼鏡こと、
くねきはるみ
暮凪遙診ばるみだつた。

もつとも、香奈にとつて彼女に対する知識はあまりない 厳し
い指導で有名の、三年の美術教師であると言つ事だけが記憶にある。
食堂の一件で初めて知つたが、まさか官僚まで勤めているとまで
は知らなかつた。

(何してるんだろー……)

暗がりであまりよく見えないのだが、どうやら誰か他にも人がい
るようで、何かを言い争つてゐるらしい。

その部屋は彼女の部屋なのか それは解らないが、少なくとも
彼女は扉の外に出ており、中にもう一人、姿の見えない人間がいる。
(教師同士の揉め事かなー。うーん、でもこんな夜更けにやる事で
はないし。ま、あたしも人の事は言えないけどー)

この位置からでは、何かを言い争つてゐる と言つ事だけしか
解らず、会話の内容までは聞き取れない。

いくら静かだとは言え、その場所まではまだ結構な距離があつた。

気付かれないよつ、少しだけ近付いて聴いてみよつ　香奈がそう思い、身を乗り出した瞬間だつた。

「……は？」

思わず声が出てしまつた。

一瞬、何が起つたのか解らず、まるで電池の切れたロボットのように香奈はその場で硬直した。

ふしやあ、と、何か赤いものが光にまぎれて飛び散つている。

扉の前に立つていた暮凪遙診は、一瞬で全身をバラバラにされたいた。

悲鳴などあげられるはずがない。

真つ先に飛んだのは、言つまでもなく　その首だつたからである。

(え　ちよつと……、なに……？　待て待て、落ち着け、香奈
)

硬直した身体が動かない。

恐怖とかそう言つもの以前に、香奈は未だに何が起つたのか理解出来ずにいた。

田の先にあるのは、完膚なきまでに身体をぐぢやぐぢやに撒き散らした暮凪遙診の肉片と、廊下に広がる赤い血だまり　そして。ぐぢや　と、まるでそんなものなどハナから眼中にないとばかりに、扉の中から出てきた一人の少女が、廊下に飛び散つたそれを踏みつけた。

腰辺りまで伸びた髪を靡かせながら、返り血まみれになつた顔で

　　その少女は、立ち竦む香奈へと視線を向ける。

心臓が、破裂しそうだった。

　　ペたりペたりとこちらへ歩み寄つてくるおぞましい少女に対し、

香奈は何も出来ない。

足は攀り、指は震え、瞳はその少女を凝視して離せない。

関わるな、逃げろ　心中でそう思つても、動けない。

「……あなた、見た？」

ほんの数メートル　その少女は、駆ければすぐに手の届く程の場所までやつて来ると、香奈を見つめ、問う。

どうしていいのか解らず、何と言い返せばいいのか言葉を考えられないまま、香奈は震えた声で問い合わせた。

「き、キミは……誰？」

「久峰麗華」

即答だった。

普通、自分の犯した殺人現場を田撃されたなら、名前なんて答えるわけがない。

この子がやつたのではないかとも知れない　　そう思いたい一心で、扉の前に散らばっている死体を見つめながら、香奈は再び問い合わせる。

「アレ……キミが、やつたの？」

「そうだけど？」

またしても　即答。

まるで、香奈に知られたところで関係ないと言わんばかりに。

「それじゃあ、本題」

少女　久峰麗華が言う。

血塗れ汚れた白い頬を舐め取るよう^に、綺麗な赤い舌をペロリと出して。

「あなた、わたしが殺^やつたの見てたみたいだし。面倒だから、ここで死んでくれる？」

深夜、零時半を過ぎた頃。

僕　紅条焰は、今日一日限りのパートナーである能力者仲間、百瀬百合花と共に、街外れの廃工場へと再び足を踏み入れた。

この街はどちらかと言えば田舎よりで、棘薔薇文学園のある区画から大体徒步で三十分程度の場所にその廃工場は存在する。

昨日あの戦闘狂と対峙したこの場所は、久峰零次がターゲットとの戦闘に欠かさず使つてゐるらしく、確かに人気のない場所だけあつてその選択は納得出来るものがある。

「……人の気配を感じるね。それも、遠くから何か聴こえるような

」

「本当ですか？まさか、先客がいるのでしょうか？」

「解らない。でも、確かに何か聴こえる。……行ってみよう、百合花さん。何か嫌な予感がする」

「ええ、解りましたわ」

この空間は、広いと言えど密閉空間である。

遠くに誰かがいる それは、この建物の中へと脚を踏み入れた瞬間から、ひしひしと肌に感じられていた。

僕を先頭に百合花さんに背中を預け、神経を張り巡らせながらゆっくりと残骸の間をすり抜け進んでいく。

次第に音がはつきりと聴こえてくる 間違いない、足音や何かがぶつかる金属音だ。

「……こりや、來るのが少し遅かつたみたいだね」

「そのようですね」

僕は横倒れた車の残骸に隠れつつ、その場で起こっている光景に目を向けた。

(あいつは……)

そこにいたのは

「誰だ」

「ゴガンツ！ と、車が宙に跳ねる。

瞬間、百合花さんの身体が衝撃に巻き込まれ、その場から吹き飛んだ。

「さやつー！」

「百合花さん！」

地面に転がる百合花さんへと駆け寄る 暇などはない。

僕はせめて百合花さんの盾になるように、その場に立ち上がる。

「ひらの存在に気付き、声を上げたのは

「……テメエ、昨日のヤツか？」

「一日ぶりだね、戦闘狂さん」

あの戦闘狂がそこにいた。

「チッ 何しに来たのかしらねーが、今はテメエに構つてる余裕はねーんだよ。ちつと隅で静かにしとけ！」

それだけ言い放ち、戦闘狂はその場から駆け出した。

状況は恐らく、僕の知らない能力者との戦闘の真っ最中、といった所だろうか。

何にせよ、彼女に今こちらを相手しているほどの余裕はないらしい。

僕は後ろに振り返り、倒れている百合花さんの下へ今度こそ駆け寄つた。

「しつかりして、百合花さん。こじまびしあり予想以上に危険らしい。とりあえず、今のうちに離れよう」「

僕が肩を抱き身体を起こすと、百合花さんは田蓋を開き、ひらりを見た。

「彼女は、戦闘中……なのですわね？」

「みたいだね。それも、敵はどうやらかなりの手馴れみたいだ。彼女があそこまで余裕のない表情をするなんて、一度やり合った身としては驚きだよ。とにかく、今はここから逃げよう。さつきみたいに巻き込まれたら元も子もない」

「なるほど……。状況は解りました」

どこか痛むのだろうか、百合花さんは少し辛そうな表情を浮かべながら立ち上がった。

「それならば逆にチャンスですわ。こじまひとつ、彼女にいらない恩を売つて差し上げましょウ」

久峰零次は、廃工場の中を駆け回りながら必死に思考を回転させていた。

(危ねえ危ねえ。絶妙なタイミングで邪魔が入ったが、そのお陰で助かつたとも言つべきか。にしてもあの野郎、一体どこから攻撃を仕掛けてくるのか解つたもんじやねえ。オレのような視覚認識タイプなのか、またはまったく別のものか……。やっぱ考えたところで答えが解るわけねえか。今はこのオレに流れが向いているなら、それを生かすしかねんだろうがよ……！)

この廃工場というフィールドは、久峰零次にとつて絶好とも言える狩り場である。

物が多いとなると、じつした鬼^{ハリ}になつてしまい、はたから見れば不利のようにも思えるが 実際のところ、零次にはその方が好都合とも言えた。

サイコネシス
物質操作 自分の目で視覚・認識したものを、思い通りに『動かす』事の出来る超能力。

対象となる物が多ければ多いほど、その能力を有効活用する場面が多くなる。

つまり、この廃工場 元々は車を生産していた場所だと聞いている ならば、その能力は実質最強だとえた。

敵が物に隠れようが関係はない。

ようは、その物質^{こと}吹き飛ばせばいいだけの話だった。

だが

(しかし、なんだあいつの能力は……？ まるで鏡でも見ているようないや、そうじゃない。まさか、このオレと同種類の能力を持つていやがるのか？)

物陰で息を潜めながら、零次は考える。

(解らない。確かにオレの能力とは似てゐるようだが、何かが違う。発動条件もそうだが、それだけじゃない。もつと本質的なところで、何か決定的な違いがあるような気がするが やっぱオレに考え事は向かないらしい。ここで麗華がいてくれりや、すぐにでも看破し

てくれたんだろうが……な。無いものねだりをするのは性に合わねえ。次だ。次で全て終わらせてやる……！）

右手を握り締め、零次は立ち上がる。

足音は聞こえない。

恐らく敵も同じように身を潜めているのだろう、仕掛けるならば今しかない

僕 紅条焰が与えられた指示は、戦闘狂と対峙している敵を倒す、ただそれだけであった。

敵の居場所は、すでに突き止めている。

後は、気付かれずに近付くだけ なのだが。

（敵の能力の詳細が解らない以上、迂闊に動く事は出来ない。だとするなら、やつぱり背後まで気配を隠して近付く事一点に集中すべきなのだろうけど……）

何せこれだけ物が多い場所である。

大きい物だけではなく、部品やら小さな物が様々に転がり落ちているこの場所で、何も物音を立てずに動くのは至難の業と言えた。（にしても、戦闘狂の方を任せちゃって大丈夫だったのかな。これ以上邪魔するとキレそうだからなあ……あの戦闘狂……）

百合花さんは『なんとかなりますわ』と言っていたものの、やはり心配なものは心配である。

何の為のボディーガードでパートナーなのだろう、と少し自分の存在意義を疑問に思いながらも、不測の事態への対処としてはこれが適切とも思えた。

ここ一番で逃げ出さなかつたところが、あの百瀬百合花らしいと言えるだろう。

第一、今日ここへ来た目的を果たしたいのならば 確かに、これが最善である。

ならば、僕は『えられた仕事を全うするだけの話だ。

(……さつさと全て終わらせて、早く帰つて香奈に謝ひ。それで、明日からはいつも通りの日常を過ごすんだ。こんな死と隣り合わせの空気は、吸つていいだけでおかしな病に犯されてしまいそうだから)

敵との距離はそう遠くはない。

触れるだけ、それだけで決着はつく。

視覚で認識するのに何秒必要だとか、そんなものは僕にはない
触れる事さえ出来れば、後は念じるだけで何もかも燃やし尽くす事が出来る。

(……男、か。うーん、なんだろう、凄く久しぶりに見るなあ……)
実際、僕は文学園暮らしが続いていて、その間は外にも出た事がなかつた　あの百瀬百合花と出会うまではだが　からか、男を見るのは久しぶりだつた。

(あれが戦闘狂と殺り合つてる『敵』か。ふうん、大体二十歳近くつて所か……どうして彼女と殺り合つてるのか、事情は知らないけど……少なくとも『殺意』を持つて対峙しているつて事に変わりは無いわけで。うーん、やっぱりやりにくいな)

殺す、と言う行為には理性を無くす必要がある。

人間には必ずしも理性があり、普段はそれが誰しもに秘められた破壊衝動を押さえ込んでいる。

だが、理性を無くした人間は、普通の人間では手に負えない。

僕自身、殺害という行為に対しても少なからず抵抗がある　実際、昨日も本気での戦闘狂を殺すつもりはなかつたし、むしろああやつて話し合いで解決出来た事は僕にとつて本望だつた。

殺せと依頼されたとは言え、どちらかと言えば『能力者として殺す』と言う意味合いが強い　ようは、生命を奪うまではせずに、能力を使えない程度までに痛めつける　そう僕は解釈していたし、実際そうやって解決させられれば一番だと思っている。

(それに相手は男だ、僕の身体じゃとても力で敵うとは思えない。

決めるなら一発勝負、確実に仕留めなければやられるのは僕、か）理性の有無、力の差、そして能力の違い、どれを取つても僕に有利な面は見当たらぬし、どうあがいた所で勝ち目が薄い事は目に見えている。

だが、それでもやらなければならぬ事に変わりはない。
どの道、僕に取れる選択肢はないのだから。

（まったく、こんな分の悪い賭けに乗るなんて。僕らしいんだか、らしくないんだか）

時間が惜しい。

決めるのなら一瞬 敵に余裕を与えず、一気に詰めに行くしかない。

（距離は数メートル、相手はまだ僕に気付いていない。ならば ）
その時。

物陰に隠れている敵が、動きを見せた。

百瀬百合花は、戦闘狂の下へと向かつていた。

数多く散らばっている大小様々な残骸の間をすり抜けながら、しかし着実に。

（場所が解つてゐると言うのに、こうも歩き辛いのでは少しばかり面倒ですわね……。それに、先程の攻撃で左足をやられましたし。歩けはしますが、これでは先に動かるとまたフリダシ……ですわ。早くしなければ ）

がくがくと歩くたびに崩れそうになる左足を引きずりながら、百合花は遠くに見える戦闘狂の姿を離さない これだけの残骸が自分の周りにあるとは言え、それは彼女にとつて何の障害ですらなかつた。

クレアボヤンス
透視能力

百瀬百合花は、全ての物質を通してその先にあるものを見る事が出来る。

その効果の範囲はそこまで広くはない、自分を中心にして一定の距離までしか見えないものの、戦闘狂との距離は初めからあまり遠くはなかつた為、すぐに捕捉する事が出来たのである。

超能力とは、その人間が持つ精神障害^{トライツマ}によって生まれるものである。

過去、とある事件によつて男性に対する嫌悪心を持つてしまつた彼女は、男性を拒絶する という、心に出来た一種の精神障害によつて、一つの超能力を自覚させた。

それが透視能力と呼ばれる超能力であり、彼女は男性を心のどこかで無自覚に拒絶する事により、男性と言う存在、その姿を全て無意識に透視しているのである。

(……それにしても。まったく、上手く噛み合わなかつただけのお話だとも言うわけですの？ 事実は小説よりも奇なり、とは良く言つたものですね。…… ですけれど、そうなるとやはり焰さんが対峙している『敵』が と、言つわけですかしら。予想はしていたとは言え、ある意味これは好都合ですわね。驚きはしましたが……まあ、いいでしょ。当初の目的は何も変わりはしないのですから)

歩きつつ、戦闘狂の姿を確認しながら 思つ。

(力を貸す事を彼女は望んではいなでしが、こういったトラブルは常に付き物ですよ。それを、身を持って味わつて戴くと致しましよう)

百合花の能力は、決して戦いに向いた能力ではない 少なくとも、単身で戦う分にはまるで不向きな能力だった。

だからこそ、百合花は話し合いで全てを解決させるつもりでいた。あの戦闘狂だけは、言葉で理解させなくてはならない。

紅糸焰のいない今 彼女にとって、頼れる武器は口の口先のみだった。

(捕まえましたわよ……！)

じやり、と、何かを踏み付ける音がした。

それに気がついたのだろう すぐ近くで身を潜めていた戦闘狂

は、百合花の立っている方向へと振り返り、

「お待ち下さい、わたくしは戦いに来たわけではありませんわ」

先手を取ったのは、百瀬百合花だった。

「テメエ、さつき吹つ飛んでやがつた」

姿を現した百合花は、嘲るように薄らと笑みを浮かべ、戦闘狂の

前に立つ。

「……オイオイ、遠田だったから気付かなかつたぜ。まさかテメエ
だつたのか」

一人が向かい合ひ、互いに笑みを浮かべ合つ。

「こんばんは、今宵も星空が綺麗ですわね。そつは思わないかしら、
倉坂濠夜さん？」

「チェック・メイトだ、殺人鬼」

僕 紅条焰は、敵の背後からその右腕を掴んで言つた。

「な、お前……なにを」

「おつと。こっちを振り向かれると、僕は君をこのまま焼き殺さなくちゃいけない。そういう乱暴なのは好みじゃないんだ。出来れば従つてもらえると嬉しいな」

腕をキツく握り締めてそれだけ言うと、敵は大人しくなつた。

僕の隣には、炎上し、今にも灰さえ残さず散つていこうとする車の残骸がある。

「……お前、何者だ？ その力、まさかオレと同じ超能力者か

「うん、そうだね。もっとも、僕の場合は君みたいに視覚で認識するタイプじゃなくて、こうやって触れているものに対して作用する超能力でさ。バイオネシス物体発火、って呼んでるんだけど ま、その効力のほどは、そこで燃え上がってるヤツを観てくれれば解るよね？」

「チツ、厄介な奴に絡まれたもんだな。お前、何が目的だ。あいつの仲間か？」

「まさか。僕にはあんな物騒な女の子と仲良くなれる甲斐性はないよ。ただ、君にもう彼女を狙う事を止めて貰おうって、それだけの話さ」

「なんだと？……残念だがそれは無理な注文だな、女。オレにはどうしてもあいつを殺さなきゃいけない理由がある」

「理由ね。それってさ、君の妹の事だろ？ 殺人鬼　いや、久峰零次と呼んだほうがいいかい？　君の妹、久峰麗華の事だよ」

「な」

ピクリ、と、僕が掴んでいる腕が微かに震えた。

「図星……みたいだね」

「どうしてお前がその事を知っている？　まさか、お前が本当の」

「ちょい待ち。それは早計だよ、久峰さん。僕は君の妹を助けた命の恩人なんだよ？」

「なん……だと……？　まさか、麗華は生きているのか？」

「生きているか、だつて？　やつぱり死んでいるとか勘違いしてたのか。まったく、どうも短気が過ぎるようだけど　生きているんだよ、君の妹さんはね」

百瀬百合花は、事のあらましを倉坂濠夜に説明していた。

棘薔薇女子園の同級生であり、クラスは違えど互いの存在程度は知っている一人であるからこそ、話し合いの成立　焰に対する根拠のないように見えた自信は、つまりこういう事だった。

「よーするに、オレは殺人鬼ヤローにありもししねー罪を負わされて、勘違いで命を狙われてたつーのかよ？」

「そう言う事ですわね。焰さんが言うには、久峰零次の妹は生きて

いるそうですし、あなたも心当たりはないのでしょうか？　ならば、まったくの勘違いで起きた争いと言う事になりますわね」
「つまり相手の殺意はオレに向いていて、真実オレに向いていなかつた　つづーことか。うつわ、最悪じゃねーかそれ。なんだよクソ、殺る気失せたつづーの」

濠夜は心底つまらなさそうな表情でそう吐き散らし、

「……って、オイちょっと待てよテメエ。まさか、昨日あの紅糸とか言う女をオレンとこへ勘違いでよこしゃがつたのは　」

「ええ。お恥ずかしながら、完全に情報不足と擦れ違いが重なつただけの結果、と言う事になりますわね」

「だあッ！　なんだそれ、胸糞悪いにも程があんぞ！　結局オレはこの一日間、無駄に勘違いヤローーどもに付き合わされただけ、單なる無駄骨じやねーか！」

「まあまあ。ですがどちらも無駄な死者なく解決しますし、良いではないですか」

「ちくしょう。せつかく有名なあの殺人鬼と一度も殺り合える、つてはりきつてたのに、ただの勘違いヤローーだったなんて……幻滅もイイとこだぜ……」

すっかり落ち込んでいる様子の濠夜を横目に、百合花は無事に済んで良かつたという安堵を感じつつも　もう一つの問題が解決しているかどうか解らない、と言う不安を感じ始めていた。

紅糸焰と久峰零次　少なくともその二人は話し合いに持ち込むまで、何らかの衝突は避けられないはずだ。

その時、焰に勝ち目があるのかどうか　それが解らない。

久峰零次は男である。

百合花が一日前に彼の姿を確認出来ず、性別を判断出来なかつたのは、何も逃げていたからと言つだけではない　単純に、その姿が見えなかつたことも理由の一つに当てはまる。

どうして百合花自身が命を狙われたのか、その時には理解出来なかつたが　焰の話を聴いた上で、ようやく理解する事が出来た。

行方不明になつた妹、それを拾い助けていた紅糸焰。

いなくなつた妹を探しても見つからないとなれば、命を狙われた
と思考するのは間違つてはいない。

ならば、命を狙われるとするならば誰に狙われるのか そこま
で考えれば、後は解り切つていた。

久峰零次は、この街の能力者にとつて畏怖すべき存在と言われて
いる。

能力者が次々と殺されているこの街の裏で起こつてゐる事件、そ
の主犯である久峰零次は、十分に能力者達に弱みを狙われる理由が
存在しているのである。

「しかし、テメエはどうしてそれが久峰零次だつて解つたんだよ？
大体は話を聞いて理解できたが、その一日前 テメエが襲われ
たつて言つたが、その姿も確認出来ずにどうしてそれが久峰零次だ
と割り出せた？」

「あら、そんな事は簡単ですわよ。このわたくしを百瀬百合花だと
知つておきながら、襲い掛かつてくる馬鹿は久峰零次という殺人鬼
以外に考えられませんもの」

「……は。ま、テメエに刃向かおうなんてヤツはいねーだろうけど
よ。それにしても、それが本当だつたとは言え もし違つた場合
はどうするつもりだつたんだ？」

「あら、それをわたくしに聴くのですか？ まあ、そうですわね。
そろそろこの街の能力者の数を減らされるのは癪に障つっていたとこ
ろですし、勘違いで死んでもらつても別に問題はありませんでした
わね」

「くはは、良く言つぜ！ 言い切つてやろうか。テメエ、襲われた
なんてのは口実だろ。本当は、別の目的での野郎を追つていやが
つたな？」

解りきつていると言いたげな皮肉を込めた笑みを浮かべ、口の端
をつり上げながら倉坂濠夜はそう言い放つた。

「……まったく、あなたの洞察力には敵いませんわね。お察しの通

り、わたくしが焰さんに久峰零次の殺害を依頼したのは　ここ数日の中、この街で今までに見ない勢いで能力者達が久峰零次に狙われ続けている、と言う噂を耳にしたからですわ」

久峰零次は、基本的にそれほど害のない能力者相手には手を出さない、どちらかと言えば通り魔ではなく計画犯的な動きを見せる殺人鬼だったのだが　恐らく彼の妹が失踪してからだろう、その対象に見境が無くなり始め、ついには百合花までが狙われるハメとなってしまった。

百合花は、これ以上に街に住まう能力者達の被害を食い止める為、これまで見放していた殺人鬼の対処を決めたのである。

もつとも、彼を放置していたのは、単純に力の差があつたからと言つ理由もあつたのだが

「そこで出会つたのがあの女……紅条焰、つてわけか。一体何モンだ、あいつ？」

「わたくしにとつて唯一愛することの出来る人、ですかしら」

「そうじやねーよ。つーかなんだそれ、テメエのいつもの冗談か？」

「あら、冗談などではありませんけれど。……そうですわね、彼女は」

百合花は、まるで自ら誇らしいものでも語るかのような態度で、

「この世界で唯一、最高傑作と呼べる超能力者の一例ですわ」

僕　紅条焰は、大体のあらすじを久峰零次に説明し終えていた。話を聞き終わると、久峰零次はまるで予想外だったとでも言いたげに鼻笑いをすかして、

「なるほどな、大体話は理解出来た。全てはオレの勘違いだつた：つてわけか。で、今その麗華はどうしてる？　出来る事なら、今すぐにも返して貰いたいんだが」

「その前に、一つだけ僕の質問に答えて欲しいんだけど、いいかな？」

話し合いの場となりある程度の和解を得た今でも、僕はその殺人鬼の腕を握りしめたまま　問う。

「なんだよ」

「妹さんを探している間、色んな人達を無意味に襲つたらしいじゃないか。君は……誰か、一人でも殺したの？」

「……なんだ、そんな事か。何を言い出すのかと思えばその程度、お前はオレの事を勘違いしてるようだから先に言っておくが、オレは殺人鬼だぜ？　この街でくだらない能力者どもを殺して回る、有名な殺人鬼だ。そいつを目の前にして、誰かを殺したか……だつて？　そんな質問はな、意識が正常なヤツにだけ言ってくれよ。吐き気がする」

異常　そんな言葉が僕の脳裏を駆け巡る。

超能力者とは異常者の集まりだ。

そんな事は百も千も承知だし、今更それについてとやかく疑問に思つたりはない　かく言う僕もその一人なのだから。

だが、それとこれとは話が違う。

「そう。それじゃ最後に、差し支えなければ君の精神障害シキジヤクつてヤツを聞かせてくれない？」

「質問は確か一回までだったな？　それならその問いには答えねえよ、却下だ。ほら、解つたならさつさと麗華の居場所を　」

腕を握る力を　強くする。

もしこれがか弱い少女の腕ならば、千切れてしまうのではないかと思つくらいに、強く。

「オ、オイ。お前　」

「……言いたい事はそれだけ？」

顔が熱くなる。

頭に張り巡らされた血管のひとつが、今にも破裂してしまうそつな程に

「良く聞いておくことね、クズ。貴方みたいな理性も知らない奴がいるから、平氣で何の罪もない人を殺せるような奴が存在するから世の中はこんなにゲロ臭いのよ。失望させないで、下種。私はね、貴方みたいな奴にはこの世の空氣すら吸つて欲しくない」

もう、限界を超えていた。

「……なるほど。結局、お前はオレとやり合いたいってわけか。ハツ、その物言いといい　お前、オレと同類の匂いがブンブンしてくるぜ？」

「黙つてなさい、負け犬。それに、私は貴方とやり合おうだなんて一片たりとも思つてない。これはね、一方的な敗北のプレゼントなのよ」

無意識の内に、手のひらに力を込める。

次第に遠のく意識の中　目の前には、顔面を焼き尽くされ、もがきあげく男の姿があつた。

倉坂濠夜と百瀬百合花は、廃工場の中を探し回り、ようやく一人の少女の姿を見つける事が出来た　とは言つもの、百合花の透視能力によつて存外簡単に見つけ出す事が出来たのだが。

「殺人鬼のヤローがいねーな。……まさか負けたのか、こいつ？」

紅糸焰。

赤と言つよりはオレンジに近いセミロングの髪を茶色のリボンで纏め、前髪の左半分をリボンと同じ茶色のヘアピンで留めている。

服装は外出用の私服　可愛らしい白のブラウスを薄い黄色のキヤミソールの上に胸元を開くように着ていて、デニムのマイクロミニスカートに茶色の皮ベルトを巻いている。

その細い脚を黒のオーバーニーソックスに通していて、靴は動きやすそうな白のスニーカーを履いていた。

分解され、もはや使いものにならないであろう中型車の一部分に

もたれかかるように、焰は目を閉じて倒れていた。

「負けたのでしたら殺されているはずですし、恐らくは相打ちか……あるいは」

百合花が焰の胸元へ耳を寄せ、その心臓の音を確かめながら囁く。すう、と言ひ呼吸音が目の前から聞こえ、思わず百合花はどうきりとした。

「ま、生きてるみてーだしイインじゃねーか。とりあえずこいつ、宿舎まで運ばねーと。この様子じや、当分起きそうにねーし」

そんな様子を見ていたのかいないのか、濠夜はすっかり落ち着いた口調でそう言った。

百合花はそれが意外だったのか 少し赤く染まつた顔を焰の胸元から上げ、濠夜へと珍しいものを見るかのような表情で振り返る。

「あら。倉坂さん、案外お優しいのですわね」

「あ? ま、こいつとは知らねー仲じゃねーし。あの渋谷の親友なんだろ? あいつは顔は広いが、そこまで他人と深い親しみを持つようなヤツじやねーからな。そんな渋谷の親友だつてんなら、オレだって興味も出てくるぜ?」

「そうですか。でしたら、焰さんはよろしくお願ひ致しますわね。ちょうど、わたく少し負傷してますので……この脚では担いで帰るのは不可能ですから。ありがとうございます」

言いながら、どこか含みを込めたような目線で濠夜を観る百合花。それにようやく気付いたのか、濠夜はマズいと言わんばかりの焦った表情で、

「あ……もしかして、あの時ふつ飛ばした時のか、それ?」

「ええ、そうですわ。突然ですから受身も取れず、『ご覧の通り左足がやられてしまいまして。ああ……傷なんて負つたのは、どれくらいぶりですかしら……』」

百合花は口調こそ自然だが、濠夜はその言葉の内に秘められた感情に感付いていた。

「ああ、いや……その。悪かった、もうしねーから。あれだ、許し

てくれ

「もちろん、事故ですし。焰さんを連れて帰つて下さるとも言つま
すし、それでチャラにして差し上げますわ」

「……それは、どーも」

濠夜は内心で安堵しつつ、同時に百瀬百合花とこの少女の恐ろし
さを再確認していた。

元々、濠夜と百合花はそこまで親しい間柄ではない　だが、濠
夜にとつて百瀬百合花という存在は、学園の中だけで言えば一番の
脅威と呼べる程の相手なのである。

生徒会長を務め、実質この学園の創始者とも呼べる人物　同じ
能力者でありながら、この街のほぼ全ての能力者を管理する『組織』
のリーダー、それが濠夜から見た百瀬百合花の実態でしかない。

学園では不良生徒として生活している倉坂濠夜にとつて、これだ
けの条件を重ね合わせた人物と言つのは、相手をしていて非常に厄
介だつた。

「んじゃ、帰るか。……ああ、そうだ。生徒会長さんよ、一つだけ
聴いといてもイイか

「はい。何ですかしら?」

「あの殺人鬼、今度見つけたら殺つといてもイイか?　オレから殺
りに行くのつて基本的に性に合わねーんだが、今はそうして一氣
分なんだよな」

「別に構いはしませんが……出来れば半殺しで、こちらで預かると
言つのが理想ですわね」

「あい、んじゃそーするわ

そう言つてから、濠夜は地面に倒れている焰の身体を抱き起こし、
それを背中に担ぐ。

その光景を眺めていた百合花が、一つ浮かび上がった疑問を口に
する。

「ところで、何故そんな事を?」

あ?　と、どうでも良さそうな表情で振り返つた濠夜は、

「いや。昨日今日と殺り合つて氣付いたんだが、あいつオレとキヤラ被つてんだよ」

棘薔薇学園　その敷地の入り口に、一人の少女が立っている。徒步で帰路に着いていた百瀬百合花と倉坂濠夜は、その場所で待ち受けている少女の姿を遠目から視認すると、互いに顔を見合わせた。

こんな夜遅くに生徒が外に出ている事は、基本的には有り得ない。百合花と焰はあくまで仕事と言う名目だし、濠夜はあくまで不良生徒なのである。が、そこにいる人物は、一人も良く知る人物であった。

濠夜は、焰を背中に担いだままの格好で言う。

「オイオイ、ありや綾峰じやねーのか？」

「そのようですね。きちんと指導したはずですが……あんな所で何を？」

二人はそれぞれに疑問を抱く。

濠夜は

(あのノッポバカ、オレがいねー時ならまだしも、オレがいる時に見つかるような真似はするなつつてんだろ　それにあんな場所で、まさかオレを待つてたってのか？)

百合花は

(渋谷さん同様、宿舎の方へとお帰り戴いたはずですが。わたくしが出かける事は知っているでしょうし、あんな所にいってはいざれわたくしに見つかる　それくらいは彼女も重々承知では……いえ、まさか　わたくしを待つっていたとでも？)

濠夜と百合花は、互いに意識の違いがあるとは言え　何か尋常ではない事態が起きている、そんな予感を抱き始めていた。

やがて、二人が近付いてきている事に気がついたのだろう　学

園の敷地、その入り口付近で誰かを待つように立っていた少女、綾峰雫は、まるで錯乱しているかのような落ち着きのない様子で、二人の下へと走り寄つて来る。

「濠夜あ！　た、大変だよお！」

「綾峰、テメエ何のつもりで　」

濠夜がそこまで言いかけ　百合花が、人差し指を彼女の口元に当てて制した。

「……綾峰さん。何か　あつたのですね？」

「あ、ああ。あたいの携帯……これ、見てよ」

雫がポケットから携帯を取り出し、その画面を一人に向ける。

それはメールの受信ボックス　その中にある、一通のメールの内容だった。

『助けて、殺される』

送信者の名前は

「渋谷……だつてのか？」

「そ、そなんだよ。もう寝ようと思ってたら、いきなり携帯が鳴つたんだ。濠夜のところには来なかつたの？」

「ああ、オレは基本的に夜は携帯切つてあつからな……しかし、何なんだそのメールは。まさかあの渋谷が、こんなくだらねー冗談を言うとも思えねーし」

ふと、そこで濠夜が何かに気付いたような素振りを見せた。

「……オイ。こうしてテメエが外でオレ達を待つていた、って事は」「うん……」じめん、濠夜。手遅れだつた

「な」

手遅れ　それが、一体どんな意味を持つのか。

「綾峰さん、委員会はすでに？」

「ああ。いなくなつた香奈の捜索と、一階の部屋の前にあつたバラ死体を処理してゐみたいだつた」

「バラバラ死体　だと？　オイ、何だよそれ」

「詳しく述べ知らないけど、死んでたのは香奈じゃなくて……あの、

暮凪らしいんだよ

「暮凪先生が……？ こんな一大事、どうしてわたしの携帯に連絡の一つさえ」

百合花はイラつきながら、スカートのポケットから携帯を取り出して、

「……これ、壊れますわ」

「チッ つたく噛み合わねーな。で、渋谷がいなくなつたってのはどういう事だ、綾峰」

「あたいにも解らないよ……！ メールを見て、すぐに部屋まで行つたらいなくてさ。すぐ皆にも頼んで宿舎の中探し回つたけど、見つかつたのはあの死体だけで」

「殺されたと書かれたメール、そして失踪した渋谷香奈 まさか、帰つてきて早々こんな事件が起きているとは……予想外にも程がありますわね」

ガンツ！ と、濠夜はコンクリートで出来た壁を左手で殴りつける。

「クソ！ 一体何がどうなつてやがる……！」

「ハつ当たりをして仕方ありませんわよ、倉坂さん。今はとにかく、宿舎の方へと戻りましょう。綾峰さん、あなたは部屋に戻つて下さい」

「そんな……！ あたいも一緒に」

「これは生徒会長としての指示ですわ。渋谷さんは、わたくし達が何としても探し出します。ですから、今日はもうお休みになつて下さい。いいですね」

「……解つたよ。行こう、濠夜」

口惜しそうな、しかしどうじょうもないと言つた表情で 霊は俯き、濠夜に促す。

だが、濠夜はその場から動こうともしない。

「濠夜？」

「テメエは先に帰つてろ、綾峰。オレにはまだ、やれる事がある」

「ちょっと、何言つて」

「オイ、百瀬。テメエの話、引き受けたやうつとは正直思つてなかつたが 気が変わつた。イイぜ、テメエの仲間とやらになつてやる」

廃工場からの帰り道 百合花は、今回の目的を濠夜に話していった。

女性能力者を集め、仲間として引き入れている百瀬百合花の話は、濠夜も当然耳にした事はあるし むしろ、何度か誘われた事もあつた。

だが、そのたびに濠夜は必ず断つていた。

今の彼女にあるもの この学園や、夜の街での楽しみ それを失わない為に。

「ええ、そう言つて下さると信じていましたわ」

「ちょっと、濠夜……あんたまさか」

「わりーな、綾峰。しばらくはテメエに付き合つてやれねえ。その代わり、渋谷は絶対にオレが助け出す。だから安心しどけ」

「濠夜……」

この時 綾峰雲は、自らに何の力もない事を心底悔やんだ。

百瀬百合花やその仲間 そして、倉坂濠夜のよつな『特別な力』を何一つ持たない自分は、所詮ただの一般人 仲の良い友人でさえ助け出す事も出来ない、非力なただの人間なのだと。

メールを受け取ったのは、他の誰でもない自分だと叫ぶのに。結局、助けてと伸ばされた手を掴めないまま

「お気持ちは察しますわ、綾峰さん。ですが、これは普通の人間では手に負えない事態なのです。あなたに出来る事は、渋谷さんの無事を祈る、ただそれだけです」

「それぐらい、あたいだつて解つてる。そんなありきたりな慰めは、いらないよ」

「ですか。では、各自部屋へ戻つてください。倉坂さんは、焰さんを部屋に連れていった後、宿舎前までお越し下さいな」

「ああ。解った」

そうして、三人は解散した。

雲は何も言わないまま、濠夜に背を向けて宿舎へと戻っていく。

そんな後姿を、しかし濠夜は安堵したような表情で見つめていた。

「……さて、と。何だか厄介な事になりやがったが、とにかくこいつを部屋まで連れてかねーと」

紅糸焰 渋谷香奈の親友だと云つこの少女が、この事を知つたらどうなるか。

濠夜は、そんな不安を頭の中で巡らせながら、

「出来る事なら、こいつが起きる前にすべて片付けていられりゃイ

イんだが、な」

彼女達の夜はまだ終わらない。

次の日が昇るまで、決して終わる事なく続していく。

第一章／能力者達の交わる夜（下）

久峰麗華。

彼女の兄、久峰零次はこの街でも有名な殺人鬼であり、麗華は彼の事をいたく慕っている といつても一人は兄妹である為、あくまで恋愛感情などではない。

殺人鬼の噂が流れる以前 超能力者と呼ばれる存在である零次に憧れ、麗華は自分自身も超能力者になりたいと強く思うようになつていった。

憧れ、羨む程に、彼女のそんな気持ちは次第に大きく成長していく。

麗華が超能力者として覚醒したのは、ほんの一ヶ月前の出来事である。

きつかけは、本当に悲惨な出来事だった。

『な、何をするの麗華……！ やめなさい、そんなものを振り回さな ぐぎい』

ぶちぶち、と田の前で解体されていく自分の両親を、麗華は狂うように笑いながら次々に切り裂き、バラバラにしていく 彼女の手に持たれたチェーンソーが、耳を壊すような凄絶な音を立てながらその母親を死に追いやった。

『あは。怖い、怖いよお。おかーさん うるさい音だ 麗華がチェーンソーを持つて、最初に得た感想がそれだった。

彼女の母親は、一番初めに腹部を両断された時点ですでに絶命している いくら話しかけても返事など返つて来るはずがない。何故こんな事をしたのか この行為には特に意味などなかった。母親は別に嫌いではなかつたし、むしろどちらかと言えば優しく

良い母親だつただろつ だが、麗華にとつてそんなものは虚像に過ぎなかつた。

『……すごい。血だ、血がいっぱいだよ。おかーさん』

死んでいる、そんな実感は特に感じない。

自分が殺した そんな感触さえ、ない。

『おかーさん?』

返事がない、その一瞬で 麗華は我に帰つたかのよつて、現実を直視する。

足元で自分の母親がバラバラになり、肉片となつて散らばつているその光景を。

チヨーンソーが、音を止める。

回転していた刃は静かに停止し、こびりつく血と肉を撒き散らしながら床に落ちた。

『何これ、臭い。気持ち悪い』

げし、と、床に落ちてゐるモノを蹴り飛ばす。

同時に血が飛んで、麗華の頬に赤い筋を作つた。

こんな光景を、もし父親に見られてしまつたら そこまで考え、しかし麗華はそんな事など取るに足らないと言つ結論に至る。

だつて、そいつも殺せばいいんじょ?

深夜の一時半を過ぎた頃、宿舎内はひとときの静寂に包まれていた と言うのも、百瀬百合花やその率いる委員会のメンバーによる事態の鎮圧が行われた為、暮凪遙診くれなぎはるみが殺害された事による騒動も一瞬のうちに収まつっていたのである。

一方 紅糸焰をその自室へと運び終わつた倉坂濠夜は、百瀬百合花に言われた通り宿舎入り口前へと姿を現していた。

「え……? あ、あれって」

「三年の倉坂さんじゃない？ どういう事かしら。まさか、こちら側に協力するとでも言つの？ あの不良生徒の間でも有名な彼女が」

「む。もしや、百瀬先輩が……？」

委員会のメンバーの一員である、三人の少女達 突如として現れた予想外の人物に対し、彼女らは驚きを隠せない。

倉坂濠夜といえば、一部の生徒にとっては恐怖の対象とも呼べる、不良生徒グループを統率しているリーダー的存在である さらに言えば、この学園に存在する能力者達、その筆頭とも呼べるほどの実力も持ち合わせている という話を、特に委員会の人間は百瀬百合花から何度も聞かされていた。

同時に、委員会への参加を求めて、幾度としてそれを拒否し、一度たりとも協力姿勢を見せたことがない と言つ事も。

その倉坂濠夜が、これから活動を開始する委員会メンバー達が集まっている場所へとやってきた これはどういう事なのだろう、とその場にいる誰もが思う。

「お待ちしておりましたわ、倉坂濠夜さん」

ふと、彼ら委員会メンバーを代表するかのように、先頭に出た百瀬百合花が、濠夜の元へと歩み寄つてそう言つた。

「……ああ。にしても、何だこりや。まさか、これだけの人数で搜索するつもりかよ？」

濠夜は軽く会釈して、すぐさま周囲に佇む委員会メンバー達の顔を眺め回す。

しかし、そこには片手で数えられる程度の人数 三人、いや、四人の少女達のみだった 百百合花と濠夜を合わせれば、六人という事になる。

「ええ、活動班はこれだけの人数ですわ。学園の出入口、宿舎の包囲を考え、そちらに人数を回しましたから」

「ふうん。ま、動くなれば少なくて問題はないんだが……宿舎の包囲だの、学園出入口の封鎖 そこまでしているつてことは、犯人や渋谷はまだこの敷地内にいると見て間違いないんだな？」

「それは監視班からの確かな情報ですわ。監視体制は二十四時間、隙間なく万全に行っていますので。残念ながら、犯人の姿までは解りませんし、どこへ向かわれたのかも皆目検討がつかない、と言つ状況ですが……渋谷香奈さん、そして、今回の殺人事件の犯人は確實でしよう。それが生きているのか死んでいるのかは別として「だったら急がねーとマズいぜ。渋谷がまだ生きていると信じるなら、早く見つけ出すに越した事はない」

「ええ、承知の上です」

ぐるり、と濠夜に背を向けた百合花は、四人のメンバー達と向かい合ひ。

「さて、皆さん。聞いての通り、自体は一刻を争います。今回の作戦目的は、まず第一に渋谷香奈さんの保護。そして、それを完遂した後、殺人事件の犯人を捕らえます。あくまで重要なのは、今生きている人間をなんとしてでも助け出すこと。それだけを考え、各自行動を開始して下さい」

「はいっ！」

一斉に散り行く委員会メンバー達　しかし、その中で一人だけが、そこに未だ立っていた。

「……どうしましたか、有栖川さん？」

「いえ、あの……」

有栖川京。

黒いおかつぱ髪、小さい横長の眼鏡をかけ、肌はこれ以上ないくらいに白い　どう見てもインドア系である彼女は、どうして自分がここに呼び出されているのか理解出来ないといわんばかりの表情をしていた。

そして、当然のように百合花はそれを見透かしていた　彼女が

不思議そうな表情でそこに残り、何かを聞いたがっている事も。

「あなたが何を言いたいのか、わたくしには解りますわ。何故、自分がこのような場に出てくる必要があるのか……あなたはどちらか

と言えば、活動班ではなく、監視班や戦術班向きですもの。その気持ち、いたく理解しますわ」

「そ、それでしたら、どうして……？」

「そうですね。話す時間もあまりなかつたので、自分の目で確かめて戴きたかつたのですが……いいでしょう、手短にお話致します百合花は仕方がないと言うように、

「あなたには、確かに妹さんがいますでしょう。ええと、確かに二つ下の」

「えっ？　はい、いますけど……それが、何か？」

「最近、妹さんとお会いしているかどうかは知りませんが、その妹さんのお友達……久峰麗華さんですわね。彼女が、今回の事件の犯人である可能性が高いのですわ」

「ええ……？　ど、どういう事ですか……？」

「有栖川さん、その麗華さんと面識がありますでしょ？」

「はい……。妹が昔、まだ私が実家で暮らしていた時に、何度も連れえてきた事があります。妹の親友だ、って聞いていますけど……」

「でしたら、この場で彼女の顔を知っているのは、あなただけという事になるのですよ、有栖川さん。あなたが唯一、犯人の手がかりを握っている」

「な、なんですかそれっ！　ま、まさかあの子がこんな……！」

「その可能性がある、と言うだけのお話ですね。もちろん、眞実はそうではないかも知れません。ですからこそ、久峰麗華さんの顔を知っているあなたが動くべきなのです。違うか違わないか、それを自分自身の目で確かめて下さい」

百合花のその言葉に、京は驚いたようで、ただ静かに頷いた。

「……解りました。すみません、貴重な時間を割いてしまいました

……」

「いいえ、いいのです。疑惑を持つたままでは、作戦行動にも支障をきたすでしょう。それでは宜しくお願ひしますね、有栖川さん」

「おっと、ちょい待ちな」

ふと、百合花の後ろからやってきた濠夜が、一人の話に割り込んでくる。

「なんですか？ 倉坂さん」

「ああ、そいつ使えると思つてさ。有栖川……つたつけ。テメエ、オレと組めよ

「は……？」

「は、じゃねーよ。オレ自身、渋谷を助けてーのは山々なんだが、その久峰麗華とやらに命を狙われてんだとすれば、そいつを叩くのが先決だと踏んでる。さっきの三人がどれだけ強いのかは知らねーが、少なくとも、そいつらが渋谷を保護したとして、守りきれる保障はどこにもない。オレなら絶対負けねーし、それなら、渋谷の保護はある三人に任せて、オレと有栖川はその犯人探しをする そつちのほうが効率がイイんじゃないか？」

なんという自信だらう と、百合花は、その言葉に頼もしさを感じていた。

「いいでしょ。でしたら、有栖川さんは倉坂さんと二人で行動して下さい。わたくしは全メンバーの指揮がありますので。何かありましたら、前もって伝えておいた連絡先までお願ひしますわ」

「え？ あの、私が……えつ？」

「オイオイ。しつかりしろよ、おかっぱ眼鏡ちゃん。オレについてくるつてんだ、それなりの度胸はして貰わねーとな」

「おかっぱ眼鏡……つて、いやあの、そうじやなくて……！」

濠夜、百合花の両名にそう言われ、自分が未だにどうすればいいのか理解し切れず動搖する少女 有栖川京。

かくして、彼女と倉坂濠夜の異種タッグが結成された。

別動班 三人の少女達は、棘薔薇学園校舎内へとやってきていた。

三人組の一人、金髪ロングに黒のカチューシャを着けた少女

船橋由香利は、校舎の昇降口に立つと、おもむろに周囲を見回した。
「うーん、やっぱり人物像が浮かばないと無理ね。少なくとも、犯人のほうはまったく掴めないわ」

「やっぱりですか。由香利の予知能力は頼りになると思つたんですけど」

難しい表情で目を細める由香利に答えたのは、三人組の一人であり、桃色ショートヘアの若干口リ少女、一之瀬灯である。

「渋谷さんのほうは、それなりに掴もうと思えば掴めるのだけれど……何故だか、イメージし切れないよね。こう、フィルターが掛かっていると言うか……あー、もう！ こんな時に限つて役立たずな能力なんだから！」

フューチャーサイト 未来予知 それが、船橋由香利の持つ超能力の名称である。

物事の規則性を把握し、それらを、イメージの中で再現・予想・構築する事による未来の予知 超能力とはいえ、どれだけ先を把握する事が出来るかは限られていて、良くて三分から五分程度が限界だった。

例えば、とある人物をイメージする その人物の性格や動向、癖などを瞬時に把握できるのが彼女の特性の一つであり、さらにそれを踏まえた上で、対象の人物がこれから行う行動、即ち未来を予測する 彼女の持つ超能力、フューチャーサイト 未来予知とは、単にそういう『出来そうで出来ない』事を、普通の人間には備わらない発達された機能を使い、実現する そういう類の物であった。

もちろん、そうなると『確実性』というものが薄れてくる 今回の件についても、彼女の予知能力には調子の良し悪しがあった為か、どうしても完璧な未来のイメージを作り上げる事が出来ない状態だった。

「……ふむ。だが、それなりにイメージは出来上がっているのだろう？」

三人組最後の一人である、背丈の高い青髪ボニーテールの佐久間

飛花里が問うた。

「とは言つても、良くて二十パーセントくらいよ？ なんだか霞んでる感じで、よくは解らないんだけど……まあ、少なくとも、今はまだ生きている って事は確かね」

「まだ生きてるですね？ ならそれで十分ですよ、由香利。この敷地内にいるって事は解っていますから、後は探すだけですっ！」

「そうね。……はあ、まったく。どうしていきなりこんな事になつたのかしら」

「ぼやいてる暇はないですよ！ 早く探し出さないと、五分後には香奈が死んでるかもしねないんですからー！」

「どこか焦るように、灯が言う。

そんな少女の姿を眺めながら、由香利は微笑みとも嘲笑とも取れる笑顔を作り、

「ふうん。やつぱり心配なんだ？」

「当たり前です！ もし香奈が死んだら、紅条焰が悲しむです！」

「はいはい、素直じゃないんだから。……ううん、素直のかしら？ ま、そんな事はどうちでもいいとして。じゃあ、二人とも。ここからは別行動にしましょう」

「……本気か？ いや、確かにそちらの方が効率が良いと言う事は解るのだが……いくら何でも危険だろ？ 渋谷を保護するだけならば問題ないが、もしも犯人と出くわしてしまったらどうする？」

由香利の一見無茶のような提案に、飛花里がすかさず指摘した。だが、言い出した本人である由香利は、そんな事など問題ないとでも言いたげな態度で答える。

「大丈夫よ。これはわたしだから言える事かもしれないけれど、良く考えてみて。例えば犯人が渋谷さんにその犯行現場を見られ、口封じの為に殺そうとする。でも、そこで彼女に逃げられ、この校舎へと逃げ込まれた。……そうなつた場合、まさか犯人はこの校舎まで追つてくると思う？ わたし達の暮らすあの宿舎から、この学園校舎へは基本的に一本道。 だけど、その間にある中央広場から、

この校舎ではなく出口へ逃げる事だつて出来るわ。でも、監視班の情報では、この敷地内から外へ出た人物は存在していない……といふ事は、わたしの予測だと犯人は未だ宿舎内にいる。普通ならすぐに出す機会を覗つているのよ。そんな人間が、わざわざ一人の生徒に顔を見られた程度でうろうろと動き回るわけがないでしょう

「……成る程。一理あるな」

「え、えっと。つまり、犯人はこの校舎にはいないんですか？」

「いない、とまでは言い切れないわね。まあ、渋谷さんが死んでないと確信できる以上、犯人が未だに彼女を追い続けている可能性は極めて低いってこと。ようはリスクリターンの問題よ。わたし達は、出来るだけ早い内に渋谷さんを見つけ出さなければならない。これが最優先事項なのだし、見つかれば後は犯人捜索に力を注げばいいだけだしね。と言つ事は、ここは予想できるリスクを考えて、リターンを求めるいく……そういう場面よ。リスクって言うのは、万が一、犯人に出くわした場合、その危険性。その可能性の低さから見て、わたし達が手分けして行動する事による、渋谷さんの早期確保

そのリターンを考えれば、十分に実践るべきレベルよ。危険性がないとは言い切れないのが予知能力者としては少し歯痒いけれど、ね

由香利の意をつくような予測内容に、灯と飛花里の二人は、いつもの事だが、これ以上ない頼もしさを感じていた。

これこそ、船橋由香利が、委員会直属メンバー活動班第一チーム『三姉妹』フューチャーサイトのリーダーである所以である。その頭の切れに加え、未来予知による作戦の予測・提案・指揮などの能力は、あの百瀬百合花でさえも一日置くほどのものだった。

来年の時期生徒会長、いわば委員会の次期リーダーでさえ、彼女に委ねられると言う噂さえ存在している。実際、百合花は彼女の事をいたく気に入っている上、委員会メンバーの中では取り分け待遇がいい。差別だからと本人は断っているのだが。

「というわけで、ここは別行動で渋谷さんを探すのが適切だと思うのだけれど。どうかしら、二人とも？ まだ何か意見はある？」

「ありませんです。由香利に任せますですよ」

「ああ、そうだな。これ以上この場で議論していくと時間が惜しいだけだろう。ここはひとつ、その提案に乗るとしようじゃないか」

「ありがと。何だから言つて、一人ともちゃんとついて来てくれるから好きよ」

由香利はそれだけ言つて、仲間である一人の少女へと目を合わせ、軽く頷く。

それを合図に、三姉妹、三人の少女達がそれぞれ行動を開始した。

倉坂濠夜と有栖川京の一人は、宿舎の中を歩き回っていた。

他の活動班である三人組が学園校舎へ向かつたと考えれば、至極妥当な選択である だが、京は決してそうは思っていないようだった。

「あ、あの……本当にこっちでいいんですか？」『三姉妹』は校舎の方に……

「あん？ 三姉妹、つづーのはあの三人組の事か。なら心配ねえよ、あつちに敵はいねーだろうからな。そいつらもバカじやねーんだから、わざわざ敵のいる場所まで向かつたりはしねーだろ。百瀬の言つていた言葉、忘れたのかよ？」

「……優先事項は、あくまで渋谷さんだと言つ事ですよね？ それなら私も解りますけど……でも、もし犯人が校舎側にいたら、どうするんですか？」

「それならとつぶに捕まってるか、見つかってるだろうが。良く考えてみる、監視班なんていう大層なものがありながら、まさか今まで、犯人の姿さえ見つけられなかつたなんて、おかしな話だと思わねーか？」

「それは……確かに。プライベートスペースである宿舎には、基本的に監視カメラはありませんが……この学園の敷地の外側、いわば

入り口付近や、出入り出来そうな場所には常に設置されています。基本的に外部からの侵入を防ぐことが目的ですが……」

「事件はあくまでこの宿舎内で起きた。なら、こつから探すのが常套手段つてもんだろうがよ。委員会による騒ぎの鎮圧が行われたらしいが、逆に言えば、その騒ぎに便乗して隠れた可能性だって有り得るぜ。何にしたって、その監視班つ一人のが報告した内容が事実なら 敵が外へと出てないのなら、まず間違いなくこの中に潜んでいる。それは確実だろうな」

片手に懐中電灯を持ちながら、暗い廊下の道を歩く一人。

京はおどおどしながらも、なんとか濠夜の後ろに付いていた京は軽度の暗所恐怖症であつた為、辺りをちらちらと見回しながら、肩を震わせていた。

「この宿舎廊下には監視カメラが設置されていない、その事実だけでも十分だろ。敵がそれを把握しているかどうか、そこまではオレにだつて解りやしねーが……恐らく、敵はこの宿舎に潜んで、逃げ出す機会を覗つている。そう考えるのが妥当だな」

「これから、この宿舎に暮らす人間の犯行だとは考えないんですか？」

「その可能性もあるだろーよ。だが、紅条つて奴が外部の人間を匿つていたつつー事実がある。さらにそれがあの殺人鬼・久峰零次の妹で、決定的なのは、その妹である久峰麗華が、匿われていたはずである紅条の部屋に居なかつた、つつー事だ。それは、このオレが直接部屋まで行つて見てきたんだから間違いねーよ。と、なると……一番疑わしいのは、その居なくなつた久峰麗華、つて事になるわけだ」

「……でも、まだ私には信じられないです。私の知ってる麗華ちゃんは、いつも舞と一緒に楽しそうに遊んでただけの普通な子で……」「へえ。で、それはいつの話だ？」

「えっと、私がこの学園に入る前ですから……一年くらい前です」
「二年か。ふん、十分じゃねーかよそんなもん。テメエも能力者なんだつたら、ちょっとは理解しとけよ オレ達の持つこの力は、生まれた時から持ってるもんじゃねえ。ある日突然、おかしなトラウマを擦り付けられて生まれた力……それがオレ達の持つ超能力ってモンだ。二年前にそいつがどうだつたのかは知らねーけどな、十分すぎるんだよ。そいつがそいつでなくなるのに必要な時間なんて、あつという間だ。二年なんて歳月がありや、人間は変われちまうんだよ」

「それは……でも……」

京の言いたいことは理解できる濠夜ではあつたものの、これ以上の問答は無意味でしかない 与えられた使命さえまつとうできない人間など、ただの足手まといでしかないのである。

「ま、とにかく今は犯人をとつとと見つけ出しちまうことが第一だ。あんま難しい事考えてんじゃねーぞ、おかげば眼鏡ちゃんよ」

「……はい、解っています」

百瀬百合花は、司令室を兼ねてている宿舎の総合管理室へと訪れていた。

部屋の中には数名の『委員会』メンバーの少女達が、とある者はヘッドフォンとマイクを使用しながら何かを口にし、またある者はコンピュータを行い、監視カメラの映像であつて この敷地内の様々な風景を切り取られたパズルみたいに並べられた画面を通して注視したりと、深夜帯にも関わらず休む暇ないとばかりに忙しそうに振舞っていた。

「捜索班、未だに犯人と生徒・渋谷香奈は発見されていないのですかしら?」

百合花は全体を見回しながら、通常よりも少し大きめな声でそれ

ぞれの少女達に問い合わせる。

すると、代表なのだろう 一人の少女が立ち上がり、百合花のもとへと歩み寄ってきた。

「報告します、リーダー。現在のところ両名とも発見できず、校舎内部を『三姉妹』が手分けして捜索を開始したとの事です」

「有栖川さんと倉坂さんは？」

「わかりません。報告がないのですが、恐らくこの宿舎内を捜索しているものかと」

百合花は、そこで初めて、今まで見せなかつた焦りの表情を浮かべる。

「……監視力カメラに何も記録がない以上、この宿舎内部に犯人や渋谷さんが未だに残っている可能性は一番高い……。戦闘能力の低い『三姉妹』が校舎側へ向かつた事は良しとしても、この宿舎で新たな騒動が起きる可能性は否定できないですわね。今、他に活動できる人材はいないのでですか？」

「外部に回している監視班を回せば、なんとか。ですが、収集には數十分と掛かりますし、外を固めなければ、いつ犯人が隙を見計らつて逃亡するか解りません」

「苦しい、ですわね……。こちらにはあの倉坂さんが付いていますし、まだ不安要素はそこまで多くはないのですけれど……。問題は、宿舎に住まう他の生徒達、ならびに教師、官僚の人々が被害を被る可能性がある、という事ですわ」

親指の爪を噛みながら、渋い表情を作る百合花。

元々『委員会』のメンバーはそこまでの人員を持っているわけではない せいぜい二十数人といったところだろう 為か、現在のこの状況に対処しきれるだけの人員をこの宿舎へ集める事は無理難題……事実、これが精一杯の処置であつた。

搔き集めても足りず、これ以上増やす事さえ出来ない そんな状態で、とてもではないが、現状の問題を解決するのは不可能と言つても良い。

だが、それを認めると言つことは、すなわち宿舎内に住まう人々に多少、もしかすれば多大な被害を「見てしまつことを自ら肯定することになつてしまつ。

何よりそれが、百合花にとつて耐え難い事実なのである。
「やはり、焰さんを……。いえ、今の人を起こすのは最善ではない」

紅条焰　彼女が今、戦力になつてくれるのならば、どれだけ頼りになるだろう。

そんな事をぼそりと口に出してしまつた自らの愚かさを、百合花は頭を振つて後悔する。

紅条焰は今、恐らく過労によつて倒れていた。
そんな彼女を無理やりに起こしたといひで、一体どれだけの力になるというのだろうか。

さらに彼女の性格を考えれば、渋谷香奈が窮地に陥つていると知れば、例えどんな身体であろうとも無茶を通そうとするだろう。それだけは、百合花にとつても不本意なことでしかない。

だからこそ、今、ここでの彼女に頼ることはできない。

「……頼りになるのは、やはり倉坂さん……ですわね。上手くやつて下さる事を祈るしかありませんが……」

倉坂濠夜　彼女には少し、厄介な点がいくつかある。

それを踏まえての戦力投入だということは、誰よりも自分自身がよく解つていると百合花は思う　が、不安要素が拭い切れることはない。

百合花は、自分にできる最善の行動を取る。

それこそがリーダーであり、『委員会』メンバーを導くものとしての責任だ。

ここで指示を取ることが一番だとは理解しているし、それが自らの役目だということを把握している　だといひのに、身体は疼いて止まらない。

自分の力がこんなにも役に立たないことに、歯切りする。

「…………リーダー、私達に構わず行つて下さい」

考えふけつてゐる百合花に、ふと報告係の少女が口を開いた。

「え……？」

彼女だけではない 部屋の中にいる少女達、『委員会』のメンバー全員が、顔を揃えて百合花へと視線を向けていた。

「私達は大丈夫です。ある程度なら、リーダーがどこでどういった指示をするのか……なんて、大体把握していますから。何て言つたつて、リーダーの透視能力^{クレアボヤンス}は人物捜索に関して言えばトップクラスの性能じやないですか？」

「ええ、それはそうですけれど……。ですが、わたくしは

「気にしないで下さい。これも連携、チームワークのひとつですよ、リーダー。リーダーの指示が必要ないとは言いません。ですが、今この状況をどうにかしたいと思っているのは、他の誰よりもリーダーのはずなんです。そうでしょう？」

百合花は 思わず自らの手を疑つた。

そこには、いつも以上に頼もしさを感じさせる『委員会』のメンバー達 自分が必死に呼びかけ、仲間として集めた少女達の心強い眼差し。

そして、何よりも疑つたのは、自分の心。

行わなければならぬ義務を放り捨て、自らが戦場に赴くことに

対する高揚感。

これが本当に自分なのか、百合花はそう確かに感じていた。

「…………ありがとう、皆さん」

だから、否定はしない。

それが正しいのかどうかではなく、ただ今どうしたいのか、自分の心を偽らない為に。

「今回のこの騒動……必ず平穏無事に収めなければなりません。皆さんには苦労をかけるでしょうが、わたくしも死力を尽くしますわ。ですから、この場はお任せします」

百合花がそれだけ言うと、もはや誰も返事はしなかつた。

ただ一つ頷いて、各自の作業へと向かい戻していく。

これが、自分の作り上げた、掛け替えの無い『チーム』なのだと、百合花は笑みを浮かべながら感じ取り 即座に部屋を後にした。彼女の本当の戦いは、ここから始まるのだから。

三姉妹 その一人である一之瀬灯は、外面では強がって見せるものの、その実、内心はかなりの怖がりである その事を知っているものは恐らく誰もいないし、三姉妹の残り一人でさえ知らないはずだ。

そもそも灯は、能力者ではない。

三姉妹リーダーである船橋由香利のような力を、彼女は一切持ち得ていなかつた。

それでも、いつもこうした場所に恐怖しながらも立つてゐる理由は、由香利や飛花里への信頼と、厚い友情があるからに違ひなかつた。

しかし、今回はそれだけではない。

灯には 一人の想い人がいた。

想い人、と言つても、相手は自分と同じ女性だ その想いが成就するはずもないし、するとも思つてはいない……ただ、由香利や飛花里への友情とは違う、何か別の「気持ち」が自分の中に存在している ということだけははつきりとわかつっていた。

その想い人に辛い思いをさせるわけにはいかない 今回の騒動において、灯の持つ一番の行動理由はそれである。

「……うう。でも、怖いものは怖いんですよ……」

灯は今、深夜の学園校舎内を徘徊していた。

共に訪れた仲間である由香利と飛花里とは別行動 つまるところ、彼女は今、一人なのである。

別に暗いところが怖いというわけではないが、彼女にとつて、何

よりも怖いもの　　それは、孤独だつた。

由香利はそのことを知らないし、知らせんつもりもない灯は、当然今回の作戦において、それを理由に内容に意見を言つことも出来なかつた　だからとは言わないが、こうして一人で校舎内を徘徊する灯にとって、今の状況は最悪に等しい。

由香利が悪いわけではないし、実際、この作戦は良い提案だと踏んでいる　だが、それ以上に孤独を嫌い恐怖する灯は、段々と歩む脚の速度さえ衰えて、いつの間にか地面にへこたれてしまつた。

「ど、どうしよう……。脚が、震えて……」

ガクガクと震える自分の脚を両腕で抱えながら、その場で縮こまる灯　思わず、自分の情けなさに口惜しくなり、歯軋りをする。

「……みんなだって、一人で頑張ってるのに……。どうして、動けないんですか……！」

その瞳には涙がにじみ出し、寒い校舎の中で、次第に自分の身体までが震えだすのがわかる。

このままでは役立たずだ……。そうは思つものの、身体は心に反して恐怖で引きつっている　どうすればいいのかわからないまま、灯が嗚咽をあげようとした、その時だつた。

「そこにいるの……、誰？」

ふと、少女のような声がした。

聴こえてきたのは廊下の向こう側　灯がこうして膝を抱えている教室の扉、その教室の反対側の扉の辺りに、一人の少女が立つていた。

「……え？」

見たことのない少女の姿に、思わず灯は絶句する　まさか、今回のことの事件の……。

(嘘……、いつも側にいるはずがないのに。「ううん……、そういうじゃない。まさか、本当は……！」)

黒く、長い髪を靡かせながら、その少女が　見た目的には十一、

三歳程度だらうか　いつん、いつん、と廊下に足音を響かせながら、灯のもとへと歩み寄ってきた。

「ツ……！」

絶対絶命だ　　そう思い、灯は思わず皿蓋を強く閉じた。

船橋由香利は、自分の担当である三階を大体のところ調べつくしていった。

他の三姉妹　　佐久間飛花里と一之瀬灯には、自分の担当の調査を終えたら、一階の昇降口にて集合、と伝えていた。

「うーん。灯は一階だから、先にあの子の様子でも見に行こうから。あの子ってば、どうにもトロいところがあるし……まあ、本人に言つたら怒られちゃうから言わないけれど」

一人呟きつつ、窓の外に見える夜空を眺める。

今宵は満月の夜だ　　こんなに綺麗な月夜だと言つのに、どうしてこゝも事件というものは起きてしまうのだろう。

そんなことをふと考へながら、すぐに思考を入れ替える由香利。「予知能力……か。未来を知る力なんて、所詮は曖昧なものに過ぎないわよね」

ただそういうにして、由香利は一階へと降りる階段へと向かつていた。

「「、「めんなさい……。驚かせるつもりは、なかつたの……」」

皿蓋を閉じていた灯は、唐突にそんな言葉を耳にした。

思わず皿を見開いて、目の前で申し訳なさそうにこちらを見下ろす少女の顔を凝視した。

「……え？」

「あの……香奈さんの、お知り合いの人、……？」

恐る恐る少女がそう問う 香奈の名前が出たことに灯は驚き、今までの恐怖心などどこかへ飛んだように立ち上がった。

「香奈を知ってるですか……？」

「は、はい。ここに……その、隠れてるの」

少女が言いながら指差したのは、まさしく灯が目前にしている教室であった。

「この中に……香奈が」

灯は突然の事態に戸惑いを隠せない この見慣れない少女は一体どこに誰だろう？

もしかすれば、この少女は演技をしているだけで、これは限りいう可能性だって否定はできない。

だが

「……中に入つても、いいですか？」

「香奈さんが、入れて欲しいって……言つてるの。だから、私が出てきたの……」

少女の言葉に、偽りがあるとは思えない。

香奈の名前を知っているだけでも十分だといえるし、ともかく、今は彼女の言葉を信じる他に、灯に打つ手などなかった。

灯は黙つて頷き、教室の扉へと手を伸ばした。

ガラガラと音を立てながら、スライド式の扉がゆっくりと開かれていいく。

扉を開き、教室の中へと脚を踏み入れて ふと、シンと鼻をつく嫌な匂いがした。

教室の中心に、ひとつバラバラ死体があつたのである。

一気に背筋が凍る感覚を得ながら、灯は思わず吐きそうになつた

口元を手で押さえる。

「……くすくす。驚いた？ お姉さん」

背後からは嘲るよに笑う少女の声。

一之瀬灯は、今度こそ絶対に絶命な状況へと陥った。

倉坂濠夜と有栖川京は、一階の浴場へと脚を踏み入れていた。食堂や手洗い場といった、人の隠れやすいスペースは、ほぼ調べ尽くした。一階で残っているのはこの場所しかない。

「…………わかりました。はい、そうします……はい。では」

通話を終えた京は、折りたたみ式の携帯電話をしまつと、濠夜のほうへと向き直る。

「百瀬先輩は一階の調査を終えたみたいですね。…………さすがは透視能力、ですね。指揮のほうは問題ないみたいですから、あとはこの浴場を調べるだけです」

そんな京の言葉に耳を貸していたのかいないのか、浴室の中心で辺りを見回しながら、濠夜が明らかにつまらなさそうな表情を作つた。

「チツ……なんだよ、結局コツチは外れだつたつてことじやねーか。オレの予想が外れるなんてな。これじゃ、犯人は校舎側にいるってことが確定したようなもんだぜ」

大浴場　といつても、その寒、隠れるような場所は限られている。

濠夜は、他の生徒よりはこの宿舎の構造を理解しているつもりだ
　それも毎晩、抜け出す為に色々と調べたからなのだが　だが
　らしさ、この大浴場にさえ誰一人として隠れていないことぐらいすぐ解る。

あまりに予想外な展開を前に、濠夜は本当に面白くないと聞いたげな顔をして、

「ま……予想は外れたが、宿舎が殺し合いの場になるってのはどうも気が散つてならねーしな。人の気配がしない夜の校舎のほうが、

確かに戦場にや相応しいけどよ

「……、ひとつ聴いてもいいですか？ 倉坂さん」

「あん？ なんだよ」

「どうしてあなたは、そんなにも戦いたがるんですか？」

唐突な京の質問に、ただ濠夜は鼻笑いをすかして返す。

「そんなもん、楽しいからに決まってんだろーが」

濠夜にとつての行動理由なんてものは、基本的にそれだけしかない 今日は他意もあるが、根本的なものは何ひとつ変わりはしないのである ただし、殺し合い、本能的な部分が、そういうた『スリル』を追い求めている。

倉坂濠夜とは、あくまでそういう人間だ。

周りからは不良生徒だと呼ばれているが 彼女にとつては、そんな呼び名さえヌルい。

それこそ、彼女はただの『戦闘狂』なのである。

「……そうですか。それじゃあ、樂しければ人の命を奪つてもいいと、思いますか？」

「それはオレに道徳を説いて欲しいつつ意味で言つてんのか？ それなら答えはノーだし、樂しいだけで人殺しをやつてる奴つてのは、正直なところ狂つてると思うぜ。ま、オレ自身、相当狂つてつて自覚はあるけどよ」

「狂つている…………ですか。…………そうですよね。人を殺しておいて、

笑つていられる人間は、やっぱりおかしいですよね」

濠夜は、そこでようやく、目の前の少女の様子がおかしいことに気が付いた。

「……何が言いたいんだよ」

「いえ、別にたいした意味じやないんですよ。ただ、そうした人間を底おうとしている人間つていうのも、やっぱり狂つているのかなあ

……つて、そう思うんですよ」

瞬間、何かが濠夜の首筋に触れ 言葉もないまま、濠夜はただ目を白くしてその場に倒れた。

有栖川京は、その手にスタンガンを握り締め、それを濠夜の首筋へと撃つたのである。

「……ごめんなさい。でも、あの子がこっちにいなってことはわかつたし、あなたはもう邪魔にしかならないから」

無表情のまま、京は手に握っていたスタンガンを上着のポケットへと仕舞う。

ぴくりとも動かない濠夜を背に、彼女は踵を返し、大浴場を後にした。

一之瀬灯は、背後の少女に対してもできないうま　ただ、息の詰まる空気を感じていた。

田の前にあるバラバラの死体　教室の中は明かりも無く、それが誰の死体かは把握しきれないが　ただひとつだけ言える事、それは、灯の背後に立っている少女こそ本当に今回の事件の犯人である　と言つ事だ。

「……、どうしてこんなことをしたですか」

灯は恐怖心に耐えながらも、苦し紛れに言葉を紡ぐ。

いつ殺されてしまつてもおかしくないこの状況では、もはやできることなどこの程度の時間稼ぎくらいだろう　そんな灯の思惑を知つてか知らないでか、背後に立つ謎の少女は、どうやら灯の言葉に耳を向けたようだ。

「こんなこと、って言つのは一体何のことを指してゐるの？　お姉さんがいま見ているその死体のこと？　それとも……」

ふと、背筋を上から下に指でなぞられる感触を得る　灯は思わずうめき声をあげてしまう。

背後の少女は楽しんでいるのか、そんな行為を繰り返しながら、

「あの教師を殺したこと？」

間違いない　灯は確信する。

まさかこんな場所、タイミングで犯人と出くわしてしまうとは思つてもみなかつただけに、灯の心臓は強く脈を打ち続け、緊張の汗が額から流れ落ちる。

灯の心身が伝わっているのだろうか 背後の少女はくすくすと

氣味悪く笑いながら、その指を灯の首筋までゆっくりと這わせた。

「ツ……。灯を、殺すですか」

「うーん。死にたくないのはわかるんだけどね？ ほら、やつぱりわたしもこんなところで捕まっちゃうわけにはいかないし。現にこうして一人殺しちゃってるから、どうあがいたって有罪で豚小屋行きになっちゃうんだもの」

「一人……？ 二人じゃないですか。そこの……その人と、暮凪先生。二人もの人間を殺しておいて、今更逃げあおせようだなんて……」

「……ああ。勘違いしてるみたいだから、誤解は解いておくけど その教師を殺したのは、わたしじゃないんだよ？」

「は ？」

「殺したのは久峰麗華。わたしはその現場に居合わせただけに過ぎないし、その時に麗華に殺されかけて渋谷香奈さんを助けたのだから、わたしなんだから」

背後の少女の腕が、灯の背中から抱き締めるように絡み付く その指は灯の胸元をさすり、少女は震える灯の耳元で囁くように、「勘違いして欲しくないなあ。わたしはただ、殺人鬼の妹を殺しただけなのに」

パチン、と、背後の少女はもう片方の手を使い、教室の扉付近にある電灯をつける為のスイッチをオンにした。その瞬間、灯の目の前にあるバラバラ死体の全貌が明らかになる。

「な……、これって」

そこについたのは、見るも無残な少女の死体。

見知らぬ顔、見知らぬ服装 それは、間違いなく渋谷香奈のものではなかつた。

「ほら、やつぱり勘違いしてた。それはお姉さんの探し人じやなくて、このわたしが探し出してようやく殺した殺人鬼・久峰零次の妹、久峰麗華なの」

「久峰……麗華……。それじゃあ、あなたは
灯は、思わず背後の少女へと視線を向けた。

「わたしは有栖川舞。ありすがわまい この学園でお世話になってる、有栖川京

の妹だよ」

有栖川京は、宿舎の廊下を一人歩いていた。

暗所が苦手な彼女にとって、こうして一人で歩くのは精神的にキツい。だが、もう後戻りはできないところまできてしまつたのだ……怖いなどとは言つていられない。

「あの子は……、舞は大丈夫かな……」

有栖川舞　京の妹であり、今回の事件に関わっている人物。

京は最初から、この事件の犯人が妹の舞と関わっていると言うことに気が付いていた。百瀬百合花の口から『久峰麗華』の名前が出来るとは予想外であったものの、それを踏まえれば、今日の夜、唐突に妹の舞が京の自室へと姿を現したことにも納得がいく。

突如としてやってきた舞は、京にとある『お願い』をした。

それは、今夜だけ委員会・監視班による監視を緩めて欲しい、とのことだった。

京は元々、監視班の代表とも言える存在だった。そのことを話した記憶はないが、少なくとも、京がこの学園を仕切るグループの一員であるということを理解していた舞は、唐突にそんな話を切り出したのである。

昔から、京は妹のお願いだけには弱い面があつたのだが、今回ばかりはそんなことを軽々しく引き受けるわけにはいかない。京にも、今、自分が受け持つ仕事へのプライドというものが少なからず

あつたからだ。

だが、それ以上に舞の眼差しは真剣そのものだった。

姉として、妹の決意を尊重せざるを得ない 悪いことだと解つ
ついても、久々に会つた妹の頼みを簡単に無下にできるはずもない。
結局、京は舞のお願いを聽きいれ、指定された時間帯の監視カメ
ラの記録を改ざんしたのである。

そして、この事件が起つた。

まさか殺人事件などという物騒な事態に陥るとまでは予想できな
かつた京は、なんとか事件に巻き込まれているのであらう妹を助け
ようと、監視班の目を盗みながら、カメラ越しに彼女の姿を探そう
と必死になつっていたのだが そこで、思いもよらない事態が起こ
る。

百瀬百合花が、この有栖川京を捜索班へと移動させたのである。
最初は、自分のしたことがバレたのかと思った だが、実際は
そんなことではなく、今回の事件の犯人が『久峰麗華』である可能
性があるということ、そして、その少女と面識があるので京ただ一
人であるということ それが理由だった。

安堵しつつ、しかしこれではいつ監視カメラに妹の姿が映し出さ
れるか解らない。

京は戸惑い、どうすればいいのか思考し、流されるがままに倉坂
濠夜という初対面の能力者に連れまわされながら

ようやく、一つの解答に辿り着いた。

(舞が探していたのは、きっと久峰麗華。……。もし本当に麗華ちゃ
んが犯人なのだとしたら、舞は? ……もしかすれば、舞は最初か
ら、麗華ちゃんの)

そう 考えれば考えるほど辻褄が合づ。

舞が親友だと言つていた少女、久峰麗華 そして、その少女が
今『危ない』のだと言つていた。

それを助けて、という事は、最初から舞は殺人者である麗華に
協力している そう考えるのが自然だし、監視カメラの件だって、

麗華を逃がす為の退路を作りたかっただけなのではないか？

そして今、彼女達が見つかったという報告はないつまり、まだ敷地外へは逃げ出していないということ。

「待つてね、舞……。あなただけは絶対に、お姉ちゃんが助けてみせるから」

それは結果的に殺人鬼の妹をも助けるということであり、同時にこの学園を敵に回すということでもある　京はそれを承知の上で、それでもかけがえのない妹を助ける為に前へと進む決意をしたのだ。

例えその先に、百瀬百合花が立っていたとしても。

「……一人でどこへ行こうといふのですかしら、有栖川さん」

一人、宿舎の玄関口に立ち尽くす少女　百瀬百合花が静かにそう言い放った。

「つ……、離して下さい！」

一之瀬灯は、背中にくつつく少女　有栖川舞を振りほどくように、強く身体を回転させる。

勢いよく舞の身体を引き剥がし、向かい合いつぶやくように舞の顔を睨みつけた。

「……事実がどうだかは知らないですが、あなたも立派な殺人者です！　いくら事件の犯人だからといって、殺してもいいと思つてますか！」

先ほどまでの怯えていた姿はどこへやら、急変した灯の態度に舞は少しうれながらも、気持ちの悪い笑みを浮かべたまま返答を口にする。

「うん、そうね。別にわたし、自分が悪くないなんて言つた覚えはないけど。それに、殺した理由なんてこの際どうでもいいし」

「なつ……！」

「あなた達の目的はあくまでそこの久峰麗華と、失踪者の渋谷香奈さんだよね？ 香奈さんならそこのロッカーの中で眠つてゐるし、ケガもないから安心して。少しだけお話したけど、あの人最後まで怯えてたなあ……あはは。ま、ともかく、わたしさはここであなたを殺して逃げ出さないと、やっぱり殺人者扱いで捕まっちゃうから

とつあえず、死んでおいてくれない？」

ビクッ、と灯が反応したが、そんな隙が許されるほど、相手は素人ではなかつた。

一気に距離を詰められ、灯の顔面めがけて少女の掌が伸び
「そつはさせないわよ！」

不意に聴こえる声が少女の注意を逸らした。その聞き覚えのある声に、灯は思わず涙を浮かべてその名を呼んだ。

「由香利ーっ！」

危機一髪 ナイスタイミングで駆けつけた船橋由香利のハイキックが、舞の後頭部に直撃した。

「きやあッ！」

見事に決まつたその一撃が、舞の身体を勢いよく床に転がせる。すかさず由香利が灯の元へと駆け寄ると、怯えきつた灯の姿を自らの背後へと守るように隠した。

「由香利……」めんなさいです……。灯が弱つちいせいで……」

「何言つてるのよ、灯は十分によくやつてくれたわ。だつて、こうして時間稼ぎをしていてくれたんだもの」

由香利は微笑んで、灯の髪を撫でながら囁いた。

それが今は嬉しくて、何よりも頼もしく感じられた灯は、次第に湧き上がつていたはずの恐怖心が消えていくのを感じていた。

「さてと、それじゃあ反撃開始とさせてもらひつわよ。殺人姫さん？」

さつじんき

宿舎の玄関口と、そこから続く廊下の途中に立つ一人の少女
百瀬百合花と有栖川京は、互いの姿を一度たりとも見逃さないと言
わんばかりに見つめ合い、もしくは睨み合っていた。

いくらなんでも行動が早い そう思つ京をよそに、百合花は毅
然とした態度でそこに佇んでいる。

まるで最初から、こうする事を知つていたかのよう」。

「どうしてわたくしがここにいるのか、不思議そうな顔をしていら
っしゃいますわね」

「つ……！」

京は百合花の顔をしっかりと見ることができない 外の月光だけが頼りなこの空間で、百合花からは京の顔がわかるのかも知れないが、京からしてみれば、光を背負つてそこに立つ百瀬百合花の姿は、まるで影そのもののような存在に見えた。

「別にそこまで驚くようなことでもないでしょう? わたくしの超
能力は透視ですもの。一階にいれば、一階の様子ぐらい簡単に把握
できるのですから。……まさか倉坂さんがあんな不意打ちにやられ
てしまうとは、少し予想外というか、期待外れではありますけれど
まあ、問題はないですわね。わたくしに不意打ちは通用しませ
んわよ?」

「そこを退いて下さい、百瀬先輩。早く行かないと、私の妹が危な
いんです……！」

「ええ。知っていますわ

百合花の思いもよらない返し言葉に、都は思わず絶句した。

「……、どういう意味ですか」

「知つているのですよ。わたくしは最初から、貴女が監視カメラの
データを改ざんしていたことも、妹である有栖川舞さんと宿舎内で
会い、話をしていたことも……全て知つていたのです

「そんな……！ ジ、じゃあ、どうして私を……？」

「貴女も不思議に思いましたでしょう？ 元々、監視班向きなはずの自分が、どうして捜索班に選ばれたのか……と」

「それは、私しか麗華ちゃんの顔を知らないから……」

「いいえ、違うのですよ。あれは真実を隠す為の誤魔化しに過ぎません。本当は、貴女を監視班から遠ざける為の処置でしかないのです」

「私を……。なるほど、そういう事だつたんですね」

そんな百合花の事実の証言に、京は納得せざるを得ない だが、

それでもまだおかしな点はいくつも存在している。

「ですけど、それなら……どうやつて私と舞のことを見つたんですか？」

「簡単なことです。目撃者がいたからですわ」

「…………目撃者？」

「暮凪遙診先生ですよ、有栖川さん。彼女はこの宿舎の官僚も勤めています。丁度、今日は彼女が見回りの日だったのですが、その見回りの途中……偶然にも貴女と舞さんの会話を聞いているのですわ。そして、当然その報告を耳にしたわたくしは、同時に暮凪先生からもう一つ報告を受けています。それが、有栖川舞という少女を敷地の入口付近で保護し、預かっている といつお話ですわ」

「舞を……暮凪先生が……？」

「そうですね。というより、おかしいとは思わなかつたのですから？ まずこの敷地内に入るにはそれなりの手続きが必要です。それもなしに突然やつてきた少女が、委員会や教師、官僚の目に留まらないわけがありませんでしょ？」

京はハツとする。

確かに言われて見ればそうだ 例え侵入できたとしても、すんなり宿舎の中までやつてこられるとは限らない。

監視カメラのデータ改ざんは完璧だったが、それはあくまで映像記録上での話でしかない 直にその姿が見つかってしまえば、それは監視カメラ以前の問題ということになる。

「ですが、一つ問題がありました。暮凪先生が貴女達の会話を聞いたのは事実ですが、消灯時間を過ぎた宿舎内では、暗闇であまり姿が見えません 会話内容から貴女と舞さんだということは推測できますが、確証はない。ですから、貴女を一日泳がせたのですわ。本当に細工を行うのかどうか、会話の真実を見極める為にも」

「……そうして、事件が起きたんですね」

「ええ……わたくしとしても予想外でした。まさか一日足らずの間にこんな事件が起きてしまうとは。暮凪先生が殺害されたと聞いたとき、今回の事件の真相については予測できはしましたが……まさか、本当に貴女やその妹さんが関わっているとは思いもしませんでした」

百合花はどこか悲しげな表情 といつても暗闇ではつきりとは見えないが を作りながら、静かにそう呟いた。

「わ、私達は事件の犯人ではありません！ 今更、こんなことを言つても信じては貰えないかも知れませんけど……。舞は……ただ……」

「もちろん、それも理解しているつもりですわ。舞さんは探し人を求めてこの場所へとやってきた……それが誰であるかは聞かされていないようですねけれど、大体予想はできます。そうでしょう？」

「……まさか、それも最初から気付いて？」

「久峰麗華。少し調べれば、貴女方との接点も見つかりました。…逆に言えば、調べなければ接点があることなど解りはしませんでしたけれど。紅条焰さんが匿つているというお話をしていた少女それが久峰麗華さんであり、今回の事件に貴女方が関わっているのだすれば、必然的に久峰麗華を追つてきた有栖川舞、今回の事件の犯人はそのどちらか という事になるのですわ」

「… ようは、友人同士の喧嘩にでも巻き込まれてしまつたのでしょうかね」と、百合花は笑えない冗談を付け加える。

京は驚きながらも、確かに辻褄が合つことに納得さえしていた。

「……そうですね。私もそう思つて、舞を……できることなら、間

違いを犯してしまった麗華ちゃんも……救おうと思つたんです

「この学園を敵に回しても、ですかしり？」

「はい……。私にとって、妹は生き甲斐とも呼べるくらい、大切な存在なんです」

百合花はその言葉を聞き、少し沈黙した。

焦燥感が募る中、京は文字通り手に汗を握る状況で、

「お願いします、ここを通して下せ……！　早くしないと、妹が……舞が……！」

「……はいですか、と聞いて差し上げても良いのですけれど。

残念ながら、わたくしだけの判断で首を縦に振れる状況ではないようですわよ？」

「え……？」

暗闇の中からでもわかるくらいに不敵な笑みを浮かべながら、京の姿を見つめて言い放つ少女、百瀬百合花。

否、彼女が観てているのは京ではない。

「パートナーをポイ捨てして一体どこへ行こうつてんだよ、おかげ眼鏡？」

京の背中、その背後　廊下の後ろから響く足音と共に、倉坂濠夜が何事もなかつたかのように登場した。

「ぐ、倉坂さん……？　どうして……？」

後ろを振り返り、宿舎入口から照らされる光によつて微かに見えるその姿を確かに直視した京は、一体何が起こつているのか理解できなまま、ただそう問い掛ける。

「どうして、つてのはオレを甘く見過ぎじゃねーのか。まさか、あの程度の攻撃でオレが本当にやられるとでも思ったのかよ？」

「そ、それは……」

「まー確かに不意を突かれたのは認めるが……別にあの程度なら大したことじゃない。慣れてんだよ、そういうのにはさ。とにかく

く、話は大体聞かせて貰つた。犯人がコツチにいねーってのも解つたし、いつまでもこんなところでグダグダやつてゐ暇はねーだろうがよ」

濠夜はそう言いながら何の躊躇もなく京の隣を通り過ぎて、その先に佇む百合花へと一瞥をくれた。

「オイ、百瀬。テメエもいい加減に後輩をイジめんのはその辺にしどけ。事情は把握できたんだ、オレとおかっぱ眼鏡はさっさと校舎まで行かせて貰うぜ」

「……ええ、それは構いませんけれど。ですが、彼女を連れて行く理由はもうありませんでしよう?」

当然の事だと言いたげな百合花の態度に、京は内心苛立ちを覚えていた。

確かに、この状況では彼女にとつて京は敵でしかない。そんな相手に情けなんてかける必要はないだろう。

だが、それでも京にとつて有栖川舞という存在は大切なものだ。それは解つて貰えてもいいはずなのに。

「……ッ」

そんな気持ちが胸中で渦巻いているのに、言葉にできない。

脚はその場からくつついて離れず、手に握られた汗は増えるばかり。京は自分の情けなさを同時に恨みながら、ただ黙していることしかできなかつた。

「連れて行く理由、だと?」

そんな彼女の心境を知つてか知らずか、目の前に立つ少女　倉坂濠夜は、京が裏切り地味た行為をした事など忘れたのか、それとも気にも留める必要がないのか　ただ自分の思うがままに、その口を開く。

「そんなもん簡単だる。オレがコイツと組むつて言つた瞬間から、コイツはオレのパートナーなんだよ。……そんなにテメエが納得できないってんなら、納得できる理由をつけてやる。このおかっぱ眼鏡がもしあかしな行動に出やがつたら、そん時はオレが全力で止め

る それでいいんじゃ ねーのか？」

「……解りました。倉坂さんがそこまでおっしゃるのでしたら、わたくしにも止める理由がありませんわね」

観念した、といった表情で降参のポーズを取る百合花。先程までの緊張や苛立ちはどこへ行ったのか、京はただ嬉しくて、濠夜の元へと歩み寄つた。

「あ、あの……私……」

「なんだよ、おかげば眼鏡。……ああ、言つとくけど勘違いすんなよ。このオレにスタンガン一発くれやがつた事は別に忘れちゃいねーし、許してもいねーんだ。その借りはしっかり返させてもらいつ。

全部、終わつた後にな

棘薔薇学園、その校舎 二階にあるひとつ教室の中で、二人の少女が睨みあう。

一人の少女は地面に尻を付かせ、田の前に立ち塞がる金髪黒力チユーシャの少女を見つめ その少女は、自分が蹴り飛ばした長い綺麗な黒髪の少女に向かい構えを取る。

「随分と派手なご挨拶ね、お姉さん」

黒髪の少女 有栖川舞は、さも皮肉めいた言葉を挑発じみた口調で吐きかける。

「わたしに直撃を入れた事は褒めてあげたいけど。……お生憎様、わたしつて他人に邪魔をされるのが凄く嫌いなの」

立ち上がりながら舞はそう言い放つ 表情こそ穏やかではあるものの、その口調からは相当の苛立ちを感じられた。

そんな少女の態度を見つめながら、だが金髪黒力チユーシャの少女 船橋由香利は恐怖心のカケラも見せず、ただ余裕綽々に凜然とした態度で答える。

「あら、人殺しなんて他人に邪魔されるべき行動よ？ そうでなけ

ればこの世はとっくに殺人者で埋め尽くされてるわね。まあ、貴女みたいな幼い子供相手ともなるとさすがに論外なんだけど。とにかく灯に手を出そうとした事は戴けないし、貴女が今回の事件の犯人じゃないとはいえ、そこに転がってる死体死體^{死體}については言い逃れできないのも事実よね。観念しなさい殺人姫、貴女はここで捕まるのよ」

「……威勢だけは良いみたいだけど。お姉さんだけで、このわたしに勝てるのかな？」

「そうね。やつてみれば解るんじゃない？」

「ツ……舐めた口をつ！」

二人の少女が動いたのは同時　否、若干ではあるが、由香利が先に脚を踏み出した。

そのまま前屈みの体勢で、突進するかのように一気に相手との距離を詰めにいく由香利に対し　だが、舞はただ両手を突き出して受け止める形を取っていた。

にやり、と舞の口元が歪む。

このまま舞が由香利の身体をその両手で受け止めてしまえば、それだけで全てが片付いてしまう。

舞の持つ超能力、その発動条件は、

「お馬鹿さんにもほどがあるわよ、お姉さん！　わたしのチカラはね

「　相手に触れれば発動する、でしょ？！」

ピタリ、と由香利の身体が動きを止める。

その瞬間、舞の後頭部に強烈な打撃音と共に不意の一撃が加えられた。

「な、ど、どうし……て……」

勢いはなく、ただ一度天を仰ぎながら舞はゆっくりとその場に倒れ込んだ　その背後にはいつの間にやら、長身青髪ポニー・テール

の少女 佐久間飛花里が立っていた。

「良いフェイントだつたな、由香利。……気配を消していたといふのに、良く気付いたものだ」

「よく気が付いた、なんて……冗談はやめてよね、飛花里。わたしからしてみれば、こんなのちょっと前から見ていた結果でしかないんだから」

「そうか、予知能力^{よちのうぢょく}……。戦闘で使うところを見るのはこれで初めてだが、なんとも存外強力なチカラだな」

「ま、予測に近いけれどね。この教室に飛び込む前に連絡しておいた飛花里の行動力とその脚の早さ、行うであろうパターンを考えれば、丁度これくらいのタイミングで来るだろうっていう結論に至つただけなのよ。……まあ、それも能力によって予測できるチカラを強化されているおかげなのだけれど」

一仕事終え、軽くため息をつきながら由香利は咳く。

後ろで見ていた灯にとつても、これは予想だにできないほど呆気ない結末だった。

「それだけじゃないです。由香利は、その子……有栖川舞の行動パターンさえも予測していた……」

「ん？ まあ、そうでもしなきや今みたいな一発勝負はできないでしう。正直、わたしつて賭け事はあまりしたくないし、リスクはなるべく犯さないタイプだから。さっきのだって余程確信が持てなければやらないわね、普通」

「それを成し遂げてしまつのが由香利の持つ未来予知^{フューチャーサイト}、なのだろう？」

「やっぱり凄いです、由香利」

「やだ、何よ一人とも。そんなにおだてたって何も出ないわよ？」

……それに、まだ事件は片付いていないんだから。気を緩めちゃ駄目よ」

由香利の言葉に、灯と飛花里は同時に頷いた。

そして、飛花里は倒れる舞に触れ、気絶していることを確認

灯は教室の奥にあるロッカーへと駆け寄り　由香利は室内に腐臭を漂わせている原因、バラバラになつた一人の少女の死体へと歩み寄つた。

「……香奈？　しつかりするです、香奈！」

「う……ううん……」

「き、気が付いた……？　良かつたです……香奈……」

ロッカーの中、膝を抱えるように突つ込まれていた少女　渋谷香奈は、灯の呼びかけに反応し、うつすらとその目蓋を開いた。

「……あかりん？」

「あ、あかりんって呼ぶなですっ！　……っと、あ……『めん』です、

香奈。どこか痛いところはないですか？」

灯がそう声をかけた瞬間、何かおかしなモノでも見たかのような表情をして、目を覚ました香奈が返答する。

「な、なにー？　なんか気持ち悪いよー、あかりん。『じしたのー？』

「……。軽口が叩ける程度には、大丈夫みたいです」

「香奈ちゃんは大丈夫だよー。もしかして、助けにきててくれたー？」
「そうです、灯達に感謝して欲しいです。……ま、まあ、灯としては別にどうでもよかつたんですけど、香奈がいないと困る人がいるです」

「そうだねー。でもねー、残念ながらほむりやんはあたしのだよー

？」

「なつ……！　べ、別に灯は　」

そこまで口にして、灯は背後から聴こえるおかしな音に気が付いた。

ぐちや、

ぶちぶち、

どさり。

何かが引き千切れのよつた音と、それが落ちて転がる音　。

「……え？」

背筋に走る悪寒に絶えながら、灯は震えた。

「どしたのあかりんー？ 怖い顔して」

「み、見ちゃ……駄目ですよ、香奈」

「何……何を言つてるの、あかりん……？」

「いいから！ お願いですから何も見ないで全力でここから逃げ出してください！」

それだけ言い放ち、灯は香奈の身体をロッカーから引き出すと、そのまま隣の扉を開いて外へと押し出した。

すぐに扉を閉め 取り付けられている鍵を閉めてから、灯は後ろへと振り返る。

ドンドン！ と扉を叩く音が一、三だけ聴こえたが、それから先はもはや音など聴いている余裕などない。田の前の惨劇と呼べる惨状に、灯は身を震わせ恐怖していた。

「ひ、飛花里……。飛花里いいいいつ！」

そこには、佐久間飛花里の飛び散った肉片と。その中心で、血まみれになつて佇む少女の姿があつた。

「灯！ 貴女も早く逃げなさい！」

その少女 有栖川舞に立ち向かうよつて、由香利は後ろを振り向かずただ叫び放つ。

だが、今の灯にはどんな言葉さえ届きはしない。

恐怖心 目の前でバラバラ死体になつた飛花里の亡骸に、灯の意識は釘付けにさせられてしまつていたからである。

「……うふふ。悔つたようね、お姉さん。これで貸し借りはチャラ、つてところ？」

「なんてことをしてくれたのよ、貴女……！ 飛花里は……飛花里は、わたし達の大切な……ツ！」

激情をあらわにしながら叫ぶ由香利と、愉悦と恍惚で満たされた表情で頬についた血をペロリと舐める舞 一刻前と完全に立場が逆転した二人の間に、言いようもない殺伐とした空気が漂う。

「ともだちねえ。結局は赤の他人でしかない相手なんて、そこまで気にかけるほどのものなの？ 少なくとも、わたしからしてみれば……ともだちなんてものは所詮、虚像でしかない」

由香利と舞の間にあるもう一人の少女のバラバラの死体 有栖川舞が殺害した少女、久峰麗華 その成れの果てを、どこか哀愁のようなものが含まれた表情を浮かべながら、舞はそれを見下ろして呟いた。

このとき、背後で彼女らの様子を覗つていた灯は、正気を取り戻しつつあった それと同時に、由香利の勝利を確信さえする。（……由香利は、灯達にとって一番頼れる立派なリーダーです。一度破った相手を、二度破れない事は絶対にない……！ 未来予知で相手の動きがわかる由香利なら……、由香利なら必ずあの子に勝つてくれるはずです……！）

しかし、未だ不安定な精神状態である灯には気付かない 否、気付けない。

自分のその考えが、ただ一つの願望から生まれていることに。

船橋由香利が勝たなければ確實に自分は死んでしまう、その事実から逃れたいが為の一種の現実逃避が、彼女にとある現実を知らしめない。

激情に身を任せ、精神が不安定であるひとりの少女に、そのチカラはあまりにも手に余る存在だということを。

「わたしねぇ、解るんだよお姉さん。 未来、見えないんでしょ

？」

「な……
「未来予知、
フューチャーサイト」

詮のところ、今のお姉さんには過ぎたチカラ。とてもではないけれど、そんなお姉さんに負けてあげられるほど、わたしってヒマ、じやないのよね」

まるで見透かしたかのような少女の発言に、驚いたのは由香利ではない 灯であった。

「どう、どうこういふのです……？」由香利、どうして黙つていろですか？

か
?

「由香利いつ！」

返事は無く、ただ悪魔的に微笑みながら、その右手を広げて突き出す舞だけが、その場からゆっくりと歩み始めた。

火は依然として動く」とか出来ず
由香利もまた、迫り来る魔
手さえ払えずに、

「……、灯。最後のお願い。逃げて……早く」

「おまえが、母物を手に持てないで見

える由香利なら、そんな相手一人ぐらうひとつでもなるはずです！
なのに、どうしてそんなこと……！」

「わたしには何の未来も見えていない」

「そんなん」

「だから勝ち目はゼロ。今のわたしや貴女は、ただ何の力もない普通の女子高生と変わりはしない。……そんな人間が、二人して殺人姫に勝てるわけがないでしょう。逃げることもね。だからせめて、灯だけでも逃げて」

「ゆ、由香利は……？　由香利はどうなるですかっ！」

死めんたよ今ここでね

そう言い放ったのは、他の誰でもない
有栖川舞だつた。

その同時に、日暮和也の娘から距れること困難の脇元へと距

「逃げなさい！ 灯つ！」

「い……、いやあああああああああああああああああああああつ！」

その刹那 由香利と舞の身体が触れ合うその直前の時 灯の中から理性が失われ、感情が失われ ついに、恐怖心さえもが消

え去つた。

叫ぶと同時に　いや、叫ぶ前からかは灯自身も覚えてはいないが、彼女の脚は本能と掛け離れて動き出す。

駆け出したことさえ記憶にないまま、自分が何をしたのかなんて、そんな些細なことさえ気付かずに。

「……え？」

そうして、気付けば由香利の服を掴んでいた。

そうして、気付けば由香利を思い切り引っ張った。
そうして、気付けば

一之瀬灯が、絶命した。

「は……？」

由香利は何が起こったのか理解できないまま投げ飛ばされ、教室の端で仰向けになりながらその一部始終を目撃した。

最初は、どうして自分が死んでいないのかと疑問に思つた。

次に、強烈な衝撃が背後を直撃した。

最後に、目の前で一之瀬灯が死んだ。

膨らませた風船が破裂するかのように、赤い血しぶきを飛び散らせ、グロテスクな肉片を撒き散らしながら。

「あらら、ちつちゃいほうが先に死んじゃつたね。弱虫だと思つてたけど、結構やるじゃない。……ま、それで死んでぢや意味ないんだけど。あははは」

由香利は、自分でもわかるくらいに強く音を立てて歯軋りをした。

許せない。

目の前の殺人姫のことが。

そして、何よりも。

親友を守れなかつた自分の不甲斐なさが、許せない。

「……わたしのするべきことが決まつたわ、殺人姫」

ゆらりと立ち上がり、いつよりも冷静に　先ほどの激情の欠片

も覗えず、ただ微笑さえ浮かべるほどいの余裕を見せつけて。

「な、なに？ 二人も殺されて、ついに頭おかしくなっちゃった？」

「おかしいのは最初から貴女のほうよ。……面白いわ、面白過ぎて

ついつい一ヤけてくるもの」

「……まさか」

「視えたのよ、殺人姫。 貴女の最期って言つ未来がね」

百瀬百合花は、薄暗い廊下の中を歩きながら、監視班のもとへと向かつていた。

これからは自分の出る幕ではないように 相手の居場所がわかつた以上、今度こそ総員の指揮にあたるべきだ。

万が一、ターゲットを逃すことがないよう 自分のすべき善処を尽くす、そうでなければいけない状況に今、彼女は立っている。（三姉妹や渋谷さん、倉坂さん達……。皆さん無事に帰ってきて下さると、わたくし信じていますわ。ですから……）

祈るように思いふけながら、百合花は歩みを止める。

百合花の透視能力は、基本的に暗闇さえも透視する だが、それは意識すればこそその話であり、実際に普段は能力を使つていれない。その為か、最初はその先に誰かが居るとは思わなかつた。

ふと気配に気付き、能力を行使してその姿を確認して 初めて、

そこにはいる人物に気が付く。

そこには、

「じんばんは、生徒会長さん。なんだかお困りのようですね」

紅糸焰が いた。

綺麗なオレンジ染みたセミロングの髪をほどいて下ろし、いつもとはまるで違う雰囲気 少女然としたものを漂わせながら。

「焰……さん？　いいえ、あなたは　」

「ん、私は焰ですよ？　なんだつたら、香奈つぱくほむりやんでも別に構いませんけれど。どこのつまり、あくまで私は焰でしかないんです。……まあ。私、というよりは、私達……と言つたほうが解りやすいかも知れないですけど」

「私達で焰、ですか。……それはまた、面白い言葉遊びですね」「遊びもなにも、そのままの意味と受け取つてもらえば結構です。正直な話、ずっと起きてこない兄の不甲斐なさに少し頭にきたんですね、私。一応、あの戦闘狂さんにおぶられでいる間にある程度の話は聞きましたけど。妹が出てきて良い事になつてるのは、あくまで兄の感情が不安定になつた時の抑止力、……という状況だけですかいら、出てこようかちよつと迷いましたけど」

「……やはり、あなた方は」

百合花は確信めいた言葉を紡ごうとして、不意に焰の人差し指が百合花の口元をそつと押された。

「秘密は、最後まで取つておぐのが筋つてものです。ね？」

「……わかりました。今は、そのお力を借りできますかしり？」

「ええ、もちろん。その為に無理して出てきたんですから」

焰は、今まで見せたことがないくらい気持ちのいい笑みを浮かべて、

「さてと。それで、どこにいるんですか？　せいぜい廃棄物処理場にでも送られるのがお似合いな、生きている価値もないゴミ屑は」

は

船橋由香利は、馬鹿だとしか思えない自分を心底嘲笑うしかなかつた。

フューチャーサイト
彼女の未来予知は、行使する人間の精神状態に大きく依存する

というのも、基本的に相手を冷静に分析し、その未来を予測しな

ければならない能力である為、予知能力者は常に安定していなければならないのである。

だが、今の由香利に精神を保つことなど無理難題 つまり、今この瞬間でさえ、彼女には対峙する敵の未来なんて見えていなかつた。

けれど、ここで負けるわけにはいかない。

彼女には果たすべき役割ができた 親しい友人、自分の片割れ達と言つても良かつたほどの少女達が一人殺され、由香利の生きる目的なんてものは全て崩れ落ちた。

だからこそ彼女は戦い、勝たなければならぬ。

狂つた殺人姫さつじんきのやり方を否定する、否定しなければならない

一人の能力者として。

見境がなくなつた、などと言われてしまつても言い訳はできないだろう 未来が見える、という虚偽を騙つたのだから。

「……未来が見えるだなんて、平然と言えるものじゃないのに、ね

」

今現在、彼女の近くにあの殺人姫さつじんきはいない 予知能力の復活はあまりに分が悪いと判断したのだろう、窓から飛び降りたのである。この教室は一階にあるため、そこまで痛手にはならないだろう だが、由香利にそこまでの身体能力は無く、当然飛び降りた先で待ちうけられる可能性も考慮して教室の扉から飛び出した。

だが この未来でさえ、敵からすれば由香利には視えたはずだ。それでもそれを予測できず、窓から逃げるという行為を見逃した瞬間から、由香利の予知能力復活説は怪しいものになつてしまふ。「これでもう恐らく後はないわね……、まずは落ち着いて本調子を取り戻したいところだけれど。……ああ、無理。絶対無理よね 未だにこれが夢なんじゃなかつて疑うくらいだもの」

一人、学園の廊下を勢いよく走りながら、せめてまずは救援を求めに戻るべき とまで考えて、しかしそんな当たり前の思考を止めた。

口調こそ冷静に見える彼女の胸中では、有栖川舞という殺人姫を討つことばかりが渦巻いていた。復讐の悪鬼にも似た憎悪を握り締め、ただ敵を追いかけ捕まえる為だけに走り続ける。

自分の命など問題ではない。今すべきことは、あの敵を捕まえて死よりも苦しい人生を歩ませるという未来を掴み取ることだけだ。（ごめんなさい、飛花里……灯……。貴女達の弔いは、全てが終わってからきちんとするわ。だから今は……少しだけ、待っていて）後ろ髪を引かれる思いをしながらも、由香利は背後を振り返らない。

ただ決めたから　自分の成すべきことをまつとうする為に、彼女は駆け抜けた。

階段を飛びように降り、一階の廊下を突っ走つて昇降口から外へと繰り出した。

外に人の気配はない　恐らくは裏側だろう。

冷たい夜の風が吹き付ける中、由香利は間髪いれずに行動を再開した。

棘薔薇の園いばらばい　その園、と呼ばれる場所がある。

校舎の裏側に位置するその場所は、その名の通り棘と薔薇に包まれた庭園だ。

校舎の半分程度ではあるが、それでも広大な裏庭として有名であるその庭園の中に、殺人姫の少女は姿を隠していた。

二階の教室、その窓から飛び降りた先に待ち受けていた棘の群れ。それらに予想だにしない傷を負わされた少女は、血の流れ出る二の腕を右手で抑えつつ、花陰に隠れて外の様子を探ろうと必死になっていた。

未来予知能力者　上手く騙されたものだ、と少女は思う。

冷静になつて考えてみれば、この時点で自分の未来を見透かされ

ていないうことが解る。

ようは相手の口先にまんまと惑わされた、ところへこと。

そして、焦つて動いた結果がこのザマだ　あまりに滑稽な自分の姿に、少女はつい肩をすくめて苦い笑みをこぼす。状況は一気に不利なものになつた。

恐らく、あの予知能力者は強力な増援を呼ぶだろう　そうなつたとき、果たして自分に勝機があるのであらうか、と想像する。

「……ふふ。嫌なものね、勝ち目の薄い未来を予測するのは。あの未来予知のお姉さんにしてみれば、全ては当然の出来事でしかないんだろうけれど」

それでも、と少女は思つ。

この学園から逃げ出す　ただそれだけで、自分の役目は全て終える。

目的は達成した。

あとは、自分を待つ人もとへと帰るだけ

「よつやく見つけたぜ、お嬢ちゃん」

不意に背後から声がした。

聞き覚えのないその声色に、思わず少女は振り返る。

「あ……貴女は？」

黒い短髪をボサボサと仕上げた少女　倉坂濠夜は不敵に口の端を吊り上げて、

「ああ、気にすんなよ。ただのしがない戦闘狂つてヤツを」
田の前の少女がそう言い終わつた直後、舞は眉を顰めてその場から飛び退いた。

迷いもせず背中を向けて駆け出す少女を眺めながら、濠夜は頭を

搔きつつ咳ぐ。

「……オイオイ、せつかちだな。こんな身動きの取り辛い場所で追いかけて」でもやううつてのか？」

面白H と付け足して、濠夜は少女の後を追い始める。

この棘薔薇の園は思ったよりも広く、生い茂った草花たちがまるで生きた迷宮のように複雑な道を作り出している。その為か、あの廃工場と同じく、障害物だらけの空間での戦いになることは必死に見えた。

「にしても悪趣味な場所だな。こんなモンを裏庭に作るうなんてよく思えたもんだ。ま、あの百瀬の野郎ならやりかねないっちゃあそうなんだが」

そんな場所で、濠夜にとって何より厄介なことはこの障害物が「生きている」ことである。

廃工場にあつた障害物はただの有機物であったが、今回のモノは生物だ。これらを濠夜の能力でどうにかするには、いささか加減が必要になる。

殺さずに済むような手心を加える。ところのは、彼女にとってはなかなか難題なのであつた。

「教室に転がつてあつた死体はおかげで眼鏡に任せるとして、さつさとあのガキを捕まえて終わらせたいんだが。ハツ、やっぱオレにこつ言うのは向か

「ずきん」と。

突如として、濠夜の脳天に割れるような痛みが襲つた。

「 ツ、が、はア」

ぐらりと視界が揺れ、立つてることすらままならず 無意識のまま、地面に膝をつけていた。

右手でこめかみを押さえながら、苦い表情を浮かべて軽い舌打ちをひとつ。

「チツ……もうそんな時間かよ」

憾むような声色で咳きながら、未だ痛みの治まらない重い頭を上

げる。

面倒くせえ 胸中で吐きつつも濠夜は立ち上がり、逃げ去った少女が向かつた先へと視線を向け、揺らすことさえ辛いはずの頭を抱えながら歩き出した。

「なーにやつてんだろーな、オレは……」

渋谷香奈 濠夜の友人である彼女はもうすでに助かった。

校舎入口で鉢合わせた彼女は間違いなく生きていたし、怪我一つ負っているわけでもなかつた。濠夜にとつて今回の事件に首を突つ込んだ理由は彼女の救出だし、それ以外のことなどはどうでも良かった。

だから、本来こうして殺人鬼の少女を追い掛け回すような行為は、彼女には無意味でしかない。いつもなら、関係ないからと放つておくだろう。

だが、それでも濠夜がこうして立ち上がっている理由。それは。「渋谷はこっち側にいてイイ人間じゃねえ。アイツはあっち側にいるべき存在だつたんだよ。ソレを無理やり引きずり込みやがったやツがオレの目の前にいる……ハツ、確かにこのオレが動くにや十分な理屈か」

濠夜にとつて、渋谷香奈という存在は普通の友人とは少し違う。よく共に活動する綾峰零やその他不良グループメンバー達とは一昧違つたその少女は、あくまで濠夜とは違う場所にいて、だが同じ空気を吸うことのできる唯一の人間だ。

その少女が今、自分と同じ場所に立つてしまおうとしている

それは濠夜にとつて決して望ましい事態ではない。

濠夜は手遅れだと解つても、無関係なモノを巻き込んだ存在を許さない。

自分を巻き込もうとするモノ、自分と同じ場所に立つモノには容赦しないが、関係のないモノには絶対に危害を加えないし、加えようとするモノにこそ手加減しない。

それが 倉坂濠夜という少女の持つ、異常に何んむ能力者として

の本懐だつた。

「……さあて。時間もヤバくなつてきやがつたコトだし、そろそろ遊びの時間は終わりだぜ」

いつの間にか歩んでいた脚の速度は増し、棘に囲まれた庭園を駆け抜けて ようやく、目の先に殺人鬼の少女の姿を見つけ出す。

三秒、四秒 五秒。

五秒間による視覚で対象の認識 これが濠夜の持つ能力の発動条件であり、彼女の能力はその空間に存在し、視覚で認識し得る物質全てに効力を影響させる。

そのチカラとは

「墮ちろよ、小娘。オレの目の前でその身体^ごと地面に這い蹲りやがれ……！」

がくん と、逃走に全力で駆けていたはずの少女の身体が崩れた。

まるで重い錘が圧し掛かつたかのように、その場で両手足を使って四つん這いの格好で当惑と苦悶の表情を浮かべる少女 有栖川舞。

「な、なに……？ 一体、なにが……くあつ！」

「どうだ、初めて味わう感覚だろ？ テメエの背中には別に何もありやしねーんだぜ」

重力制御 グラビティーション 対象の空間内に存在する物質へと掛かる重力量を自由自在に変換し、操る超能力。

質量だけではなくその方向さえも操作するこのチカラは、こと戦闘においては発動条件こそ厳しいものの、一度相手を捕捉してしまえば関係なく思うがままに蹂躪してしまつ。

対人において、これほどまでに便利な能力はない 人体の耐えられる重量を超過させて死に追いやることもできるし、動けない程度に捕縛して殺さず捕らえることも可能である。

もちろん相手を五秒間以上視覚で認識しなければ発動はできない 紅糸焰や久峰零次は廃工場のスクラップを盾に身を守っていた

が、この庭園にはそこまで身を隠せるほど密度のある物質はありません。

相手の姿さえ確認できれば問題はないのだから、この勝負、初めから濠夜にかなりの分があつたという事になる。

それでもここまで相手を自由にさせていたのは、それだけの自信があつたからこそだつた。

「重い……、わたしに一体なにをしたの……ッ」

「んなもん教えるわけねーだろ、バカ。　　ああ、こうして加減をするのは久しぶりだから、死なねー程度には我慢しといてくれると助かるんだが」

「……あくまで殺す気はない、つてこと？　あは、甘いね」

「殺さないことが甘さに繋がるとか勘違いしてやがんなら、テメエのほうがよっぽど甘ちゃんだと思うがな」

「知つたような口を……！」

庭園を抜けた先　　校舎が隣に見える裏庭の敷地に、有栖川舞は身動き一つ取れないまま挑発するように濠夜へと視線を向ける。殺されないと知つたからかどうかは解らないが、濠夜にはその光景がまるで滑稽にしか見て取れなかつた。

「テメエさ、オレが言うのも何だが　　狂つてるぜ、心底な」

「……能力者なんて所詮は異常者の集まりでしょ。こんなチカラを手に入れて、真っ当な精神でいられるヤツのほうがおかしいと思うわ」

「そうやって被害者ぶつてりや氣が済むのかよ、テメエは。……自分が能力者だからって節度を持つて生きてるヤツってのは、オレの周りにや少なからずいてやがんだ。オレ自身がそうだと自惚れたことを言つつもりもねーが、そうやって生きる術を見出して、正常なヤツらと同じ空氣を吸おうつて……それでもこっち側には巻き込まないようにして、それがオレ達の唯一掲げられる『正義』つてヤツじゃねーのか？」

「正義……？　はつ。子供みたいな理想しか掲げられない大人が、

本当の子供の気持ちなんて解るわけない」

「ああ、わからぬーよ。テメエの気持ちなんざ知つたこいつちやねえ、どうでもいいねそんなことは。それより大事なのは……テメエを許せねー理由はただひとつしかねーよ。オレ達の理念に十足で脚を踏み入れて、関係のないヤツらまでも巻き込みやがった 理不尽なんだよ、テメエのやつちまつたことは。絶対に許されることじやねえ」

そうして、濠夜は一步ずつ舞の元へと歩み寄る。

もう喋る気力さえなくしたか、観念したのか 舞はそれ以上何も喋らず、抵抗さえ出来ないまま地面に這い蹲つて目蓋を閉じた。

「悪いが少し手荒にさせて貰うぜ。さつさとテメエを捕まえて、あの百瀬の奴に」

どくん と。

強く心臓の跳ねるような鼓動音が、唐突に濠夜の脳裏に響き渡つた。

「が……は」

目眩が襲い掛かり、刹那 視界がブラックアウトする。

その瞬間。

有栖川舞に掛かっていた重力の枷が、何事もなかつたかのように解かれた。

「つしまつ……！」

一瞬で自由を得た舞は、背後で立ちくらむ濠夜の姿を見て 先程までの苦悶の表情など消し去つたかのように、口元をひどく歪めて駆け出した。

「あはははは！ なんだか良くなきんないけど！ 詰めが甘かつたみたいだね、お姉さん……！」

舞はその右手を伸ばし、飛びかかるように濠夜の頭部を、

「倉坂さん！」

ガシッ、と。

飛び入るように現れた船橋由香利の左手が、舞の右腕を掴んだ。

「ツ……、あなたはどこまで私の邪魔をすれば気が済むの……！」

「お生憎様。仇は自分の手で取らなきや気がすまないタチなのよ……！」

……」

由香利はそのまま押さえつけるように舞の身体を地面へと叩き付け、その左腕も封じ込める。

顔を地面にへばり付かされ、舞は憎らしげな表情で　だが、口元を歪ませたまま。

「ああ、そう。それはとても素晴らしい心意気だとは思うけど。

残念ね、お姉さん。あなたはこのわたしに触れた時点で、すでに死んでしまっているの」

え？　と、由香利は疑問の表情を浮かべる暇さえなかつた。

最初に崩れ墮ちたのは自分の腕。

ボロボロと、自らの肉片が零れ落ちるようにバラバラに落ちる。そして連鎖するかのごとく、船橋由香利の身体は一瞬にして破裂し　血飛沫」と、舞の背中へと飛び散つた。

濠夜は、朦朧とする意識の中でその光景を見た。

自分の目の前で無残に死に行く少女の姿。

そして　もうひとつモノを凝視する。

血塗れになり、黒い髪が赤く染まった殺人鬼　愉悦の表情を浮かばせて、ぺろりと舌で頬の血を舐める異常を。

「く……そ。なんで……こんな、ときには……ツ

力も入らず、ただ地面に身を委ねるかのように　濠夜はその場に倒れ、意識を失つた。

有栖川京は、教室に散らばる死体を見てもいられず、扉の外で百瀬百合花の到着を待つていた。

転がつていた三人の死体　こんなものを任せられても、彼女にはどうすることもできない。

有栖川京は、その実ただの一般人であつた。
超能力など持ち合わせていらない彼女にとつて、今回のような事件において出来得る事など限られている　それこそ監視班などがお似合いだというものだが、今回ばかりにおいて、彼女には『動く理由』ができた。

妹である有栖川舞の救出　しかし、事態を見ればもはや手遅れだつたということは一目瞭然に等しい。

こんな結末を認めたくは無かつた　が、現実は彼女に辛い事実を突きつける。

「舞……どうして、こんな……」

できる事なら、こんな結末を目の当たりにしたくはなかつた。

部屋に転がつているその死体を直視して、それでもなお、これは虚像に違いないと何度も心の中で頭を振り続けた。

だが、それでもその光景が消え去ることはなかつた。

あふれ出る涙が京の視界を塞いだことが、からうじて彼女の精神を崩壊させずに済んだものの　教室を飛び出した後に残る彼女の心中では、認めざるを得ないその現実を確認しなければならないという責任感が渦巻く。

けれど　果たして自分は、その現実を受け入れられるだろうか？

京は思う。

この扉をもう一度開いたとき、自分は正常のままていられるのだろうか、と。

それに、それだけではない。

窓から照らしつける月の灯りだけが頼りな夜の校舎　その廊下に一人立つているだけでも足が震える思いだというのに、そんな状況下で恐怖すら凌駕するモノを直視などできるわけがなかつた。

「　なんて、いつまでも逃げてちゃいけないよね……舞」

その時　京は、自分でも何をしているのか理解していなかつた。

ただしあしなければならない、と言つ感情が彼女の身体を無意識に動かせる。

怖いはずだ、悲しいはずだ、苦しいはずだ　けれどそんなものを通り越して、彼女の中に断固として貫き通したい意地がある。

迷いはない、後悔するはずもない。

今、自分がこの目に焼き付けようとしている光景は、まさしくこの自分が引き起こしたといつても過言ではない惨状　その成りの果てを見届け、責任を負うことが自分にできる唯一の事。

だから　　身体が動く。

怖くとも、悲しくとも、苦しくとも。

その先にある光景が、全ての終わりへと繋がると信じじて。

そうして　京は、震えたその手でゆっくりと扉を開いた。

「　ああ。やっぱり、ダメだった」

教室の中心にあるもの　　ただそれを視界に納めてから、彼女はぐたりと床に膝をつく。

外した眼鏡が転げ落ち、ぽろぽろと零れ落ちる涙が止まらない。ただ懺悔するように、京はそこにある死体をしつかりのその瞳で確かめながら呟いた。

「ごめんね……何の役にも立てないお姉ちゃんで、ごめんね　舞」

教室に転がり散らばっているバラバラ死体の数は　三。

その内の一人　『三姉妹』のメンバーである少女、佐久間飛花里と一之瀬灯。

そして。

最後の一人、その少女の名前は　。

「　こんにちは、殺人鬼のお嬢さん」

背後から聞こえた聞き覚えの無い声に、殺人鬼の少女は思わず振り返る。

そこにいたのは、オレンジに近い紅色の髪の少女 気配さえ気付けなかつたその相手に、殺人鬼の少女は咄嗟に身構えた。

「な、何者……？」

「私は貴女がそこに転がした女の子のお友達。 で、貴女は誰？」

「……ふん、増援つてわけ？ そんなに必死になつて、たかが一人の子供を捕まえたいんだ」

「御託はいらないし、話を逸らさないで。 私はキミが誰のかつて聞いてるのよ、お嬢さん？」

敵意のない笑みで、敵意のある言葉を放つ紅髪の少女。

それに少し気味の悪さを感じながら、殺人鬼の少女は答える。

「……わたしは有栖川京。この学園に通う有栖川舞の」

「ねえ、久峰麗華さん。 口先だけのごまかしはどうでもいいから、一体それがどういう事なのか教えてくれない？」

「ど……どういう意味？ わたしは」

「久峰麗華さんでしょ？ 久峰零次の妹。 殺人鬼の妹の殺人鬼。 ううん、真実の殺人鬼つて言つたほうがいい？」

「……は。はは」

とたん、殺人鬼の少女は口元を吊り上げ 笑い出した。

「あはははは！ 憂いねお姉さん、あなた何者？ 誰にも話したことないのに、誰もが騙されているはずなのに まさか知つてる人がいるなんて！」

「……別に何者でもないけれど。 ねえ、真実の殺人鬼さん 人を殺し続けるのって、そんなに楽しい？」

「ふん、行為に快樂しか求めないなんてのは大人のやることだよ。わたし達子供はね、いつだって純粋無垢であるべきなの」

今更言つまでもないが 久峰麗華は、生粋の殺人鬼である。

己の両親をその手で惨殺してから 兄に庇われ、共に逃亡生活を続けてきた彼女のの中には、いつの間にか人を殺すことへの快感純粹な破壊衝動が宿っていた。

それから一年と経たないうちに、麗華はいつの間にか備わつてい

た力を使い、街で殺人を犯した。

そうして行為を繰り返し、街では次第にとある一つの噂が広まる事となる。

殺人鬼、久峰零次の存在。

だが、それは正確に真実ではなく

「それで上手く正当化したつもり? そのツケを支払っているのは貴女のお兄さん 結局は大人なんだってことを自覚してる?」

「ま、言っておくけど私って脣には容赦しないから。痛い目に遭いたくなかったら、それが一体どういう事なのか早く説明しなさい」

「……どうもこうも、わたしが本物の久峰麗華だった。それだけのことでしょう?」

「そんな事、他で聞いた話から考えればすぐに推測できるわ。最初に死んだ暮凪先生の死因と、そこに転がってる死体の死因がまったくの同一だし。犯人は統括して同じ人間 殺人鬼の妹である久峰麗華がこの宿舎に潜んでいて、それを探しにやつてきた只の一般人である少女が有栖川舞。 うん、そこまでは解るんだけど」

紅髪の少女は淡々と語り、そして殺人鬼の少女 久峰麗華を見つめ、

「どうして、同じなの?」

ただ、それだけを言った。

「……ふうん。頭の良さそうなお姉さんでも、そこだけは解らないんだ はは、いいよ。特別に教えてあげる」

少し勝ち誇ったような顔をして、麗華はあざ笑うかのように語り始めた。

「ドッペルゲンガ多重存在、って言つてね。つまりところ、わたしと有栖川舞は同じなの。と言つても姿形や声色、年齢が同じなだけで中身はまったく違うわけだけど。……知ってる?ドッペルゲンガ多重存在って、出会つた瞬間から相手に抱く感情が決まってるの。 相手を消したい、相

手を破壊したい。そういう衝動に苛まれ続けるんだよ

久峰麗華と有栖川京の出会いは、何の変哲も無い 夜の街での邂逅である。

いつもの日課を済ませた麗華が偶然道端で見かけた少女、それが有栖川舞であつた。

「……まるで廃れた都市伝説を聞かされている気分ね」

「信じる信じないは自由にすればいい。……で、ここからが本題。わたしは元から殺人鬼だから、舞に対して抱くこの衝動が、果たして何の所為なのか解らなかつた。舞はそんな感情と向き合つてみたいだけど、わたしにしてみればそんのは滑稽でしかない。わたし達は、出会つた瞬間から辿る運命を決められているんだもの」最初に舞を目視したとき、麗華は鏡を見ているような錯覚を覚えすぐにそれが勘違いだと気付いた麗華は、自分と瓜二つの姿をした少女に思わず声を掛けていた。

その瞬間から溢れ出すような破壊衝動に襲われていたが、それこそ慣れたものだ。

その日はすでに事を済ませていた麗華にとって、その衝動をセーブすることは容易いことだつた むしろ、こんな感情は常日頃から得ているし、違和感を覚えることがない。

自分と同じ存在 ドッペルゲンガーマルチ存在 という言葉を知るのは、舞と出会つてからしばらくしてのことになる。

「舞はね、言つてた。わたし達は友達だから、こんな気持ちはきっと間違いだ って。それから、二人してお互いの姿を出来る限り違えるようにしたの。髪型を変えたり、服装の趣味もまったく違うものにして……まあ、それでパツと見は全然違う女の子二人に見えたと思う。……でも、そこまでしたつて舞は相変わらずだし、わたしは殺人鬼をやめられなかつた。結局出した結論は、もう二度と会わない それが一番お互いの為になる、そう舞が言い出したの」

思い出すたび、麗華は冷静に保つていた表情を歪ませる。

もう殺した相手のことだ 何を気にする必要がある?

そう思い、だが　思い返すたびに、苦しい気持ちが麗華の胸を痛めつけた。

「その時のわたしの気持ちがお姉さんに解る？　結局、わたしは自分が得ていたこの感情が、本当にただの殺人鬼だったから得たのが解らないままだった。　もしそれだけが原因だとするなら、舞はどうしてあんなにも苦しんでいたのかって。先に声をかけたわたしのことを、本当はとてもなく嫌悪していたんじゃないかなって……ね」

「……多重存在^{ドッペルゲンガ}、ね。それで、どうして貴女は舞さんと同じ姿に戻つたわけ？」

「わたしが戻したわけじゃない、あの子がそうしたんだよ。わたしと瓜二つの昔の姿に戻つて……一度と会わないと約束してから一年経つた今になって、舞はわたしの前に現れた」

麗華の前に再び姿を見せた少女　　有栖川舞は、街で殺人を繰り返す久峰零次の噂を耳にしたと言い、麗華の身を案じたのだろう。約束を破つてまで彼女を助けようとやつてきたのである。

だが、麗華がその時に得た感情は

「舞は知らない。わたしが街で殺人を繰り返していること、わたしの兄は本当の殺人鬼ではないってことも。あの子はわたしを助けるつて言つたけど　そんなのは結局、殺し合つことしか知らないわたしと舞では無理な話。相容れない一人の多重存在^{ドッペルゲンガ}は、最後の最後まで手を取り合つことができなかつた　　つまり、これはそういうお話」

「……そして、結局貴女は舞さんを殺す決意をした。つまり、先にこの学園へやつてきたのは久峰麗華じゃない　　有栖川京だつたのね？」

「そう。まあ、あの様子じゃわたしが手を出さなくてもいつか精神のほうが先に折れちゃうんだろうけど。　つん、殺す前にはもうすでにイカれかけてたし。わたしを見ても何とも言わない上に、ただ怯えるような顔をしていただけだったから。確かめずらしなかつ

たけど、アレじゃまるで記憶喪失みたい」

麗華は口調こそふざけているが、その辛辣な表情は隠しきれるものではなかつた。

そんな彼女を眺めながら、紅髪の少女は呆れた態度で溜め息を吐く。

「みたい、じゃないけれどね。私が保護したときには確かに記憶を失つていたから、彼女」

「……は？」

「言葉の通りだけど。私が保護したのが久峰麗華ではなく、有栖川舞だったのだとしたら、保護していたのが、記憶喪失のフリをしていた久峰麗華という推測はなくなり、本当に記憶を失つていた有栖川舞をこの私が助けた……ということでしょう？」

「……じゃあ、なに？　あの子は最後の最後で、結局わたしへの憎悪さえ抱くことを忘れたまま……一方的な殺意を持ったわたしの手で死んだって言うの？　……なに、それ。冗談じゃない」

「ようするに、彼女もまた殺人鬼・久峰麗華の餌食の一人に過ぎなかつた、ただそれだけね」

「……っ！　それは」

麗華は思わず否定の言葉を口にしかけ、そこで唇を強く噛んだ。全ては確かだつた。殺人鬼である自分が持つていた有栖川舞への破壊衝動、それは確かに存在していたのだから。

だとしても、麗華は心のどこかで殺人鬼である自分を退けたかつた。

せめて、もう一人の自分と言つても過言ではない少女　有栖川舞の前でだけは、普通の女の子としていたかつた。

だが　二人は同一、互いを壊しあう存在に過ぎない。

自分が殺人鬼として彼女に接しているのか、それとも二重存在の枷として破壊衝動を持つていただけなのか　その違いがわからぬ以上、麗華は決して舞に心を許せるはずがなかつた。

そう　仕方が無い、で済む問題のはずだつたのに。

「……は、はは。あははははッ！」

麗華は狂うように叫び笑う。

記憶喪失だから？

記憶がなくてもその存在が同一なことに変わりはない。
結局のところ、麗華は舞をただ純粹に憎んでいた 殺人鬼として他人へ常に抱く負の感情を、麗華は友人である舞にでさえ得ていたのである。

耐え切れなかつたのは、舞のほうだったのだ。

二人が多重存在ドッペルゲンガーだからではない ただ単純に、舞は友人から向けられ続ける強い殺意に耐え切ることができなかつただけなのだろう。

舞が苦しんでいた理由を知らずに、麗華はただ自分勝手な独りよがりを彼女に押し付け 挙句の果てに精神さえ崩壊してしまった儚い少女の身体を、その手でバラバラに解体して殺害した。

「やつぱり屑ね、貴女。ま、平気で人を殺せる人間が屑じゃない訳がないけど。とにかく事情は大体把握できたし、もう聞きたいことは何もない。それじゃ、大人しく捕まつて貰うとしましょうか」

「ツ……うわあああああああ！」

嘆くように涙を流しながら、久峰麗華は捨て身の覚悟で目の前にいる紅髪の少女へと走り出す。

こんなところで捕まるわけにはいかない。

友人を失つた今でも、わたしにはまだ待つてくれている人がいる そう自分に言い聞かせながら。

「残念だけど……早く終わらせないと兄が起きてきちゃうし、仲良しあ喋りタイムはこれまでよ。お礼代わりに、貴女には圧倒的な敗北をプレゼントしてあげるわ」

その瞬間 有り得ないことが起こつた。

麗華の目の前にいたはずの少女の姿が、一瞬にして完全に消えたのである。

そして、

「ぐ、あ……ッ」

視界が暗転し、麗華の身体がどさりと地面に倒れた。

背後から攻撃を受けたのであろう　触れられたことにさえ気付けないまま、麗華はその場にうつ伏せになり、次第に気が遠くなつていく。

その時、何か言葉が聞こえたような気がした。

「さようなら、眞実の殺人鬼さん。　そしてよつこそ、死よりも苦しい牢獄の世界へ」

そうして、夜が明けた。

学園で起こつた連續バラバラ怪奇殺人事件は、その犯人の捕獲と死体の隔離にて事態の收拾を得ることとなつた。

委員会リーダーである百瀬百合花の指示のもと、今回の事件に関わつていない人間達には、教師・暮凪遙診の死のみしか知られないよう情報操作が行われ　また、関わつた者達を召集し、朝一番に会合を開いて事の顛末を報告しあう事となつた。

生徒会室　　学園の三階にあるその部屋に、数人の少女達の姿がある。

「　で？　いくつか腑に落ちねー点があるんだが、聴いてもイイか？」

真っ先に挙手をしたのは倉坂濠夜　　不良生徒でありながら、今日の会合には時間通りにきつちりと顔を出した少女である。

それを受け、囲まれた席の一一番奥に座る百瀬百合花が答えた。

「ええ構いませんわ。どうぞ」

「ああ、まず一つ目。監視カメラに渋谷や有栖川舞、久峰麗華の姿が映らなかつたのは、常時おかっぱ眼鏡がデータの改ざんをしてやがつたからだ　　つてのは解るんだが、そのデータの改ざんを頼んだ人物つづーのは結局のところ有栖川舞と久峰麗華、どっちなんだ

よ？」

濠夜の視線は百合花ではなく　　彼女がおかっぱ眼鏡と呼ぶ少女、有栖川京へと向けられていた。

「……多分、あれは舞じやなかつたんだと思います。紅糸さんの話が確かなら、舞は記憶を失つていたんですから。私と会つたあの子は、舞と同じ姿をした麗華ちゃん……つてことなんぢやないでしょうか」

「姉のテメエでも見分けがつかねーくらい、その多重存在^{ドッペルゲンガ}一つ一のは似てるモノなのか。だけどよ、それならどうして一度会つたときに似ていると気付かなかつた？」

「私が初めて麗華ちゃんと会つたとき、一人は全然違いました。少なくとも、私の目からみれば……髪型も、服も。背丈や声は似ていたのかもしませんけど、当時の私からしてみればそんなことは些細なことだつたんだと思います。気付けるはずがありませんでした」「京は暗い表情のまま、辛いのであらう気持ちを抑え　今、自分が果たすべき事をやり遂げる為にここにいる。

思い返すほどにもうこの世にはいない妹のことが恋しくなりそれでも、姉として責任を真つ当しなければ、それこそ妹にあわせる顔がないというものだ。

「成る程ね。……じゃあ次だ。なあ渋谷、テメエはどうやってあの殺人鬼から逃げ出せた？」

唐突に話を振られ、戸惑つ渋谷香奈。

だが、隣に座る畠に手を握られ、香奈は呼吸を落ち着かせながら答える。

「……うん、単純に言えば暗かつたからかなー。暗いから隠れやすいし、追いかけられにくい状況だつたからねー。それに実際のところ、あの麗華ちゃんはそこまで運動できる子じやなかつたんだと思う。あたしはそれなりにやつてる方だから、逃げるだけなら簡単だつたんだよー。あと決定的なのは、ほむりやんの部屋に逃げ込んだら違う子がいて、その子が舞ちゃんだつたってことだねー。麗華

ちゃんは舞ちゃんを狙つていたみたいだから、あたしのことなんて忘れたみたいに舞ちゃんを狙い始めたんだよ。……さすがに一人で逃げるのは難しくなって、二階の教室で舞ちゃんが麗華ちゃんに向かつて言ったの。『この人は関係ない、わたしはどうなつてもいい』ってねー。そこから、麗華ちゃんに気絶させられてあたしは口ツカーの中。……舞ちゃんは「

一度口を開けば饒舌な香奈でも、舞のことに関してはこれ以上話そうとは思えなかつた。彼女の姉である京に気を使ったのだろう。

「……あんまり気にすんじゃねーぞ、渋谷。テメエは別に何も悪くねーよ」

「あはは、まさかほりちんからそんな言葉が聽けるとは思わなかつたよー。珍しいこともあるもんだねー」

「つるせえよ。……ま、オレが気になつたのはここんくらいか。じゃ、後は勝手に進めてくれて構わねーぜ」

濠夜の言葉に百合花は無言で頷くと、その視線を今度は焰へと向ける。

それに気付いて、焰は静かに口を開いた。

「……じゃあ、今度は僕の番だね。正直な話、ずっと気を失つていた僕からしてみれば、今回の事件に関して気になるつてこと自体は特になけれど、そうだな、じいて言つなら百合花さんへの質問がいくつかあるよ」

「あら、わたくしにですか？ どうぞ、遠慮なく聞いて下さい」

「それじゃお言葉に甘えて。ねえ百合花さん、本当のところ貴女は知つていたんじゃないんですか？ この街で起きていた連續殺人事件の本当の犯人が、久峰麗華だつたって事を」

「……何故そうお思いになるのかしら？」

「うん。これは憶測なんだけれど、僕に久峰零次の始末を任せたのが久峰麗華が彼の元を去つた後、つまり、彼が街の能力者達を疑い始め、次々と襲うようになつてからの時期と被つてる。どうして百合花さんが今になつて久峰零次を狙つたのか、それは別に今ま

では大目に見ていたとか、そんなことじやない。ただ単純に、久峰零次が犯人ではなかつたから……違うかな」

「……正解率五十パーセント、といったところですかしら」

百合花が答える。

「確かにそれはその通りですが、全貌ではないですわね。わたしは、最初から久峰零次が街の連續殺人事件の犯人だとは思つていませんでした。そして久峰麗華が犯人だとも確証はなかつたですし。ただひとつ、犯人が女性であるということだけは掴んでいたのですけれど」

「……もしかして、だから僕に久峰零次の性別を？」

「ええ。女性だつた、と聞いたときはまさかと思いましたわ。そもそも以前から起きていた街の連續殺人事件と、今回の久峰零次が起こしていた事件はまた別件です。わたくしは、あくまで久峰零次が起こしていた事件の解決を焰さんに一任したまでですから」

「ま、結局それはオレだつたんだがな」

濠夜が誰にもなく呟いた。

「でも、勘違いとはいえ 久峰零次が女性だという情報を得て、百合花さんは街の連續殺人事件の犯人が久峰零次なのかもしれないと睨んだ。噂ではそう言われている つていうのは、証拠もない上で久峰零次がただそう言いふらしているからだ、つてことか」

「そうですね。妹を守る為とは言え、あれでは自分が犯人ではないと言いながら歩いているようなものでしたから」

「つまりところ、久峰兄妹は一人して殺人鬼と成り果ててしまつたつてわけか」

両親を殺し、そのトラウマから純粋にして生粋な殺人鬼となつた妹 久峰麗華と。

壊れゆく妹を守る一心で汚名を被り、助け出す為に本物となつた兄 久峰零次。

二人の兄と妹は、そうして『殺人鬼』という穢れた仇名を持つに相応しい存在となつたのだつた。

「……さて。それではそろそろ開門の時間ですし、会議はこの辺にしておきましょう。倉坂さんと有栖川さんはわたくしと一緒に来てください。焰さんと渋谷さんはここでお別れですわね。また放課後にでもお会い致しましょ」

「あ？ なんでオレが百瀬と

「手続きがありますから。 まさか、お忘れではありませんです

わよね？」

「……別に、何でもねーよ。チクショウ」

「あれー？ ほりちんつて百瀬先輩に弱いんだー。これまた意外ー」

「……渋谷、アイツらにチクつたりしたら殺す」

「それでは皆さん、失礼しますわ」

そうして、百合花と濠夜、京の三人は生徒会室から去って行った。一人取り残された焰と香奈は、互いの手を握り合つたまましばらくの間、静かな時を過ごすことにしてしまった。

「さてと。紅条と渋谷を一人にさせてやつたのはテメエの気遣いだとして、別にオレとおかっぱ眼鏡を連れ出したのには他に理由があんただろ？」

校舎内の廊下を歩きながら、ふと濠夜が口を開いた。

「ええ。どうも血生臭いお話になりそつたので、あのお二人には退席して戴こうかと思いまして」

「ふうん。で、どんな話だよ？」

「久峰麗華の持っていた能力のことですわ。気になりますでしょう？」

「ああ。触れただけ いや、多分アレは自分に触れたモノに対しうつ発動する能力なんだろうが……一瞬で人間をバラバラに解体できちまうチカラなんて、一体どんな能力なのか つてのは、オレも割と気になつてた」

「私も……舞や三姉妹のみんなをあんな風にしてしまった力について、知りたいです」

濠夜と京が頷いて、百合花がそれに応える。

「恐らく、アレは超能力ではありますん」

「……なんだと？ どういう意味だ、それ」

「解らないのですわ。わたくしにも、アレが一体どんなチカラなのか。人と触れ合っただけでそれを分解してしまう能力 わたくしはそう見ていますが、そんな能力なんて見たことも聞いたこともありますんから。正直な話、アレはわたくし達の手に負える存在では……」

一瞬、百合花が影のある顔を見せ それに気がついた濠夜は、思わず百合花の肩をその手で掴んだ。

「オイオイ、血生臭い話つづーのは…… よりするにやうにう」とかよ？」

「……恐らく、あの少女は拘束しようが牢に閉じ込めようが 自らに触れるモノ全てを破壊してしまっていれば、そんなことをしても意味がないでしょう。次に目を覚ましたとき、わたくし達はあの殺人鬼の少女を止めることができない」

二人の会話から、ようやく京も話の内容を理解できたのだろう 驚いたように目を丸くして、百合花の目の前まで駆け寄り向かい合つた。

「まさか、麗華ちゃんを殺すつもりですか……！」

「そうしなければ、彼女は」とも容易く脱走し……今回の事件のように、また死体の山を築き上げるでしょう。それだけは、なんとしても止めなければならぬのですわ」

「おかげば眼鏡に話したのはケジメだらうが、オレに話したつづーことは 殺しをオレにやらせる、つづー意味で受け取つていいのか？」

「倉坂さんつ！」

「黙つてろ、おかげば眼鏡。……で、どうなんだ百瀬」

三人の間に不穏な空気が漂つ。

百合花はどこか躊躇いをもつた表情で目線をそらしていたがやがて観念したかのように、静かにその問への返答を口に出す。

「可能であれば」

一階のある教室　三人の少女の死体が散らばっていたはずの場所へ、焰と香奈はやってきていた。

今となつては跡形もなく、血痕ひとつ残さず綺麗になつたその部屋を　一人は口惜しさと悲しみを込めた表情でただ眺めていた。
「……ここでさー、あかりんがあたしを助けようとしてねー。自分も一緒に逃げ出せばいいのに、あの二人を置いていけなかつたんだろうね……あたしだけを外に追い出して、カギまで掛けちゃつてさー。その時、あたしどうしていいのかわからなくてねー。だから逃げ出した。うん、その時は必死に助けを呼び戻るつもりだった宿舎で百瀬先輩とほむりやんに会つて、その時すごくホッとしたんだよねー」

ただ独り言のように呟く香奈の言葉を、焰はただ無言で聞いていた。

「あたしは助けられただけで、あかりん達を助けることはできなかつたんだよ……」

「……倉坂さんも言ってたじゃないか。香奈は何も悪くないんだつて

「それでも……あたしは……」

しばらく俯きながら、ふと香奈は鼻をすすつた。

「あかりんがさ、言つてたよー。あたしを助けた理由が、あたしを助けないと困る人がいるからだ……つて。あの子、きっとほむりやんが好きだつたんだよ」

精一杯の笑顔を作つて、香奈は焰に向けてそう言つた。

だが、その時、平静を保っていた焰が表情を崩す。

まるで何か的外れなことを言われたような顔をして、

「違つよ、香奈。一之瀬さんが好きなのは僕なんかじゃないんだ」

「え……？ ど、どういふこと？」

「少し前にね、相談を受けたことがあつたんだ。彼女は自分が女なのに、同じ女の子を好きになつちゃつたつて。その時、僕はそういう話は苦手だから、つてあまり話を聞かず仕舞いだつたんだけど。

その相手つてさ、香奈のことなんだよ？」

その時。

今まで強がりで耐え続けていた香奈の涙腺が崩壊し、泣き崩れるよつにして焰の胸元へと飛び込んだ。

「一之瀬さんって、ああだからさ……多分、面と向かつて素直に言えなかつたんじやないかな。それによく考えてみなよ、もし僕を好きだつたのとしても、そんな僕が悲しむからつて理由だけで、命を賭けてまで香奈を助け出そつとするはずがないだろ？」

「うん……、うつ……！」

香奈を抱きかかえるよつにして、焰は彼女の頭を撫でながら言つ。

「それに、一之瀬さんだけじゃない。佐久間さんも船橋さんも、みんな香奈が好きだつたよ。みんなで香奈を助けたいと思つたから、今がある。善惡でいえば香奈は悪くはないけれど、彼女達の賭けた命を背負うことはしなくちやならない。僕なんかが言うことじやないかもしけないけれど、香奈は彼女達の分まで生きなければならぬ義務を背負つたんだ。僕や倉坂さんみたいな人間がいるこぢら側に、香奈はいるべきじやないんだよ。解るよね」

「つ……でも、ほむりやんは」

「僕は、もうすでに壊れてしまつたから。香奈と同じ場所には立たないから。だから、僕にできることは、香奈を守るつてことだけなんだ。じつして同じ空氣を吸えるだけで、僕にとつては十分幸せ

なんだよ

「う……、うあ……っー」

嗚咽を混じりせ、声を上げて嘆く香奈の身体を抱き締めながら
焰は髪を解いた。

「そつ……香奈はこちら側にほきてはいけない。貴女は私達を踏み
とどませられる枷かせでもあるのだから」

少女達は、交錯する道を互いに別れ歩んでいく。
その道がいすれ繋がり、ひとつになることを夢見ながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6336d/>

焰の邂逅 01.能力者達の交わる夜

2010年10月8日14時36分発行